
とある刹那の奮闘記

ハルキタレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある刹那の奮闘記

【Nコード】

N5675R

【作者名】

ハルキタレ

【あらすじ】

バカの名は長野 司。レベル0だが、かなり特殊なレベル0。

この物語は、上条当麻とステイルが死闘を演じてる最中に、バカが乱入したらどうなっていただろう？という作者の妄想から始まる。

溶けたら一番マズいアイスはなんなんですかねえ？（前書き）

初投稿です。ヒマ潰しに読んで下さい。

溶けたら一番マズいアイスはなんなんですかねえ？

暑い夏、夏ならば当たり前。さらに言うならば、灼熱のビル群に囲まれている、科学技術の発信地、学園都市なら、なおのこと。

「溶けるなよ！根性出してくれ」

汗だくになりながら、一人の少年がアイスを大量に詰めた袋に声援を送っている。

少年の名は長野 司

中肉中背の体に、整った細面。美形と言っている容姿だが：

「あぢう！裸の女の子でも落ちてねえかな」

そんな事を言いながら、鼻をほじる姿はどうみても、ダメ人間だった。

付け加えるなら、彼はレベル0。いわゆる無能力者だ。この学園都市での評価は能力のレベルが大きなウェイトを占めている。

良識がある人間はレベルなんぞで、出来、不出来を決めつけたりしないが、残念ながら、『良い人』は何処でも少数なのだ。

粗悪な無能力者。

彼の一般的、評価である。そして、それに対して彼の反応は、「なっ、なんでバレた！？」

こんな感じだ。自覚がありだ。反論しない、面倒くさいから。

そんな性格なので、付き合ってくれる女の子も出来ず、貴重な高校生の夏休み期間を『溶けたら死ぬ程マズそうなアイスを、ドライアイスなしで自宅まで運ぶ』 そんな不毛な遊びを して過ごしていた。

「ヤバイ、太陽のヤツ気合い入れすぎだろ」

アイスは司が思っていたより、早く溶け出した。自分の部屋まで全力で駆け上がったも間に合わない。エレベーターでも厳しい状況だ。

「クソッ、誰だ、こんな遊びを思いついたバカは？」

仕方無く、司は奥の手を使用する。自室の玄関前の通路を確認して、その場所に自分が降り立つ姿をイメージする。

次の瞬間、司の体はロケットのような勢いで、イメージした場所へと、ブツ飛んで行く。

これが司の奥の手、測定機械も感知が不可能な一瞬だけ、発動する超能力。

司の身体機能を限界を越えて、酷使する事が可能になる。

能力名は仏教の概念で最小単位を示す言葉『刹那』と司は名付けた。

問題点は一瞬なので、能力発動の後の制御がまったく出来ない事。今も脚力を限界を越えて強化して、飛び上がったが、着地は能力を頼らず行わなければならない。

さらに、

「シ〜〜又〜〜〜!!」

加速によりかかるGに能力なしで耐えなければいけない。

司は必死で目を見開き、通路の手すりに両手でしがみついたが、勢いを殺しきれず前転飛びのような格好で通路内に飛び込み、自室の扉に激突した。

これは、かなり痛い。司は幼少の頃に動物園で勝手にカバのオリに入り、体当たりされた過去を思い出した。

「何者だキミは？」

「長野！どっから飛んで来たんだ、お前は！？」

痛みに悶える司の耳に、聞き覚えがある声と、聞き覚えがない声が同時に聞こえてきた。

「うるせえなあ、…何かここ異常に熱くねえか？」

アイスを冷蔵庫に入れるため、痛む体を無理やり起こした司が見たものは、

黒髪ツンツン頭のお隣さん、上条当麻と、長身＋赤髪にくわえタバコの黒コート。
そして、通路を這い回る炎と、血痕らしき後が見える純白の修道服を着た。倒れているシスター。

はつきりと、一目で分かる。ヤバくて危険な状況だと、司はそう判断して、無言でうつぶせにぶっ倒れた。

「なっ！大丈夫か長野！？」

倒れた司に慌てて駆け寄ろうとする上条だが、

「近づいてもいいのかい？」その眼前にステイルが、立ちふさがった、右手に炎を宿し威嚇するように。

その後ろから、不吉な音楽を倒れた状態のまま歌い出す司。

「「？」」

上条とステイルは揃って疑問符を浮かべる。そして歌うのを止めて司が一言。

「へんじがない、ただのしかばねのようだ」

いきなり場が凍りついた！夏なのに！炎ガンガン燃え盛ってるのに！！

「「ふざけんなっ！！」」

敵同士の上条とステイルは、同時に乱入してきたバカに突っ込んだ。

夏の暑さと、炎の熱さにクラクラしながら、必死に死んだふりを続ける司。

アイスは馬鹿の体を張ったギャグの犠牲になりました。

溶けたら一番マズいアイスはなんなんですかねえ？（後書き）

出来たら、週一で更新したいです。

V Sスタイル（前書き）

少し長いです。

VS ステイル

沈黙、うつぶせに倒れている司は、痛い程、視線を感じていた。

(うーん、見下されて、呆れ果てられてるな。さて、どう切り返す)

渾身の一発ネタを外した時に、どうやって場を取り繕うか、司のセンスの見せ所だ。

「ヘッ、命拾いしたな、顔面バーコード」

能力の反動で体は悲鳴を上げていたが、それをまったく悟らせない表情と仕草で司は立ち上がった。

「オレに背を向けていたら、お前はすでに死んでいた」

「……………」

ステイルと上条は氷河期の視線を司に放った！

司のセンスは0になった。と言うか、元から0だった。

「ヤレヤレ、本当に君は何しに来たんだい？もしかして、面白くない、お笑いで、この場を寒くして僕の炎を消そうとも言っ気かな？だとしたら傑作だがね」

ステイルが余裕の冷笑を浮かべて、司に問いかける。

司は耳をほじりながら、これに反発する。

「やかましい、テメエの方こそ、目元にバーコードつけて、ギャグ

のつもりか？コンビニに顔突き出して、ピツて、やってもらうのか？」

司の言葉にステイルは青スジをひたいに浮かべる。

「今の侮辱を殺される度胸があるなら、もう一度、言ってもらおうか」

「ピツ、お値段、320円になりまゝす」

司の言葉を合図に、ステイルが呪文を唱え始める。使用する魔術は、『魔女狩りの王』、イノケンティウス、目の前の無礼で下等な馬鹿者を焼き尽くすには、もったいない代物だ。司も、その脅威を十二分に感じていた。

「やつ、やだなあ。イケメンのお兄さん、ブサイクの意見に本気で怒っちゃって」

「…ファッションだ」

「はい？」

「僕のこれは、ファッションだと言っているんだ！」

イノケンティウスが司に襲いかかる！

ボルトも適わないという逃げ足で、危機を脱しようとする司だが…

……

ムニツッ！！

思いつきり、何かを踏んづける。

「アーッッッ！！！！？」

ステイルがイノケンティウスを操るのを止めて、空気だった上条と共に仲良く絶叫している。

お前ら、もう結婚しろ。

そう思いながら、司が足下を見ると、死んだ様に動かないシスターさんの姿があった。

「アーッッッ！！！！？」

3人の絶叫が、夏の日の学生寮に響き渡った。

…コイツらホントは仲良しなんじゃね？

絶叫フェスティバルから最初に正気に戻ったのはステイルだった。ただし、その端正な顔を憤怒の炎に歪めていた。

「君はこの世に消し炭も残さず死にたいみたいだね」

ステイルが、右手を高く掲げて、再度、呪文を唱え始める。

今度の魔術は、炎の剣、吸血殺しの紅十字！

「させるか！！」

司はとつさに、溶けた大量のアイスが詰まった袋を投げつける。

ビキンッッ！！

しかし、酷使した体に激痛が走り、狙いは逸れた。袋は壁にぶつかり、ド派手な破裂音と共に、辺りを汚しただけだった。

「チイツ！」

「？」

悔しがるのは、狙いを外した司のハズが、なぜかステイルが舌打ちをした。

司が不思議がり、壁に目をやると、炎の迫力に惑わされて気付けなかったモノが見えた。文字が書かれた紙が何枚も、何枚も貼り付けられている。

（あれは！？）

司の目に入ってきたのは、溶けたアイスで汚れ、文字が読めなくなつた大量の紙。

そして、汚れた紙を貼つてある場所から距離を置くステイル。

（ネタが分かつた！）

その瞬間、司の頭脳が瞬時に思考する。

ステイルの魔術の弱点。

勝利の一手と、その手段を実行した時の成功率と危険性。

様々な可能性をほんの一瞬、まさしく刹那に思考して、司は後ろを向いて駆け出した。

その、胸中に思ふ事はただ一つ。

（死ぬほど痛いだろうな、チクショウ）

「逃がすか！」

司の考えが分からないステイルは呪文を唱え始める。

「やめろお！」

司の考えが読めない上条はステイルを止めるため駆け出した。

「誰が………」

つぶやき司は急停止する。そして振り向いて、上着を脱ぎ、両手に巻き付ける。

その姿は枷に繋がれた囚人のようだ。

「「?」」

司の奇行が理解出来ず、上条とステイルは同時に動作を止める。

（やっぱり、お前ら結婚しろ）

内心そう思いながら司は全力で踏み切った。そして、両手を高く掲げて飛び跳ねる。『刹那』発動。

意識と体をぶつ飛ばしながら司は吠えた。

「逃げるか！クソツタレEEEEEEEE」

雄叫びと共に司の体が宙を爆進する！掲げた両手が、次々とスプリンクラーをぶち壊していく。

ブッシャアアアアッ！！

破損して通路を水浸しにしていく、人工スコール。

ゴキャンッ！！

それを起こした張本人は、一日一度が限界の能力を二度、使用した事と、顔面をエレベーターのドアに大強打したため、噴水のごとく鼻血をぶちまけて失神していた。

間一髪で司の人間ミサイルから逃れたステイルは、高笑いをあげる。

「ハアッハッハッハッ。本当に何がしたいんだろうね。この馬鹿は」

「それが分からないお前も、相当な馬鹿だと思うぜ」

険しい顔つきで上条は壁を指差した。

壁を、正確には壁に貼り付いている、ルーンが書かれた紙を見て、ステイルは驚愕する。

文字が水に洗い流されていた。

「！？」

「お前の魔術は、その文字がなければ使えない、長野はそれに気がついたんだ。

勘だらうけどな」

「なっ、ふざけるな！勘だと！？そんなもので」

「あんまり、アイツをなめてんじゃねえぞ」

上条は力強い口調で語り出す。

「確かにアイツは大馬鹿だ。勝利者にはなれない。でもな、いつだってアイツはぶっ倒れるまで全力なんだ」

右拳を強く握りしめて、上条は断言する。

「状況を変えるのも、勝利を呼び込むのも、いつだって偉大な馬鹿の役割なんだ。お前はアイツに負けたんだよ」

「負けただどつ、僕があんなヤツに！？認められるかつ！！」

「そうかい、まだ自分が勝てるって思ってたのかよ。なら、その、ふざけた幻想を……」

右拳を大きく振りかぶりながら、一気に間合いを詰める上条。

ステイルは反射的に魔術を使おうとするが、当然、何も起こらない。ステイルの青ざめた顔に、上条の拳が迫る。

「俺がぶっ壊す！！」

バキンッッ！！！！

強烈な打撃をコメカミに受けてステイルは倒れた。そして、そのまま気絶する。

「あゝ、やっと終わった。でも……」

白眼を向いて倒れている魔術師。

未だに鯨のごとく、鼻血を噴射して気を失っている馬鹿。

そして、動かない血染めの修道服のシスター。

トランクスまでも濡れのハリネズミ。

（あゝ、でも不幸だなんて言ってられるか！倒れたヤツを助けるのは、立ってるヤツの義務だろうが）

バチンッ！

上条は両頬をきつく叩いて気合いを入れて、インデックスに駆け寄った。

……とりあえず、見た目だけなら一番アブナイ馬鹿は、死にはしないと後回し。

V S ステイル（後書き）

男女平等パンチはカッコいいと思います。

次回はギャグのみ、作者の大好きな、インなんとかさんが大活躍！

本当にマズイと思ったら、迷わず119。(前書き)

長いので分けました。

本当にマズイと思ったら、迷わず119。

床が抜けるのでは？と心配したくなる50キロのダンベル×2。腹筋用のトレーニングマット。玄関に置いてある縄跳びロープ。

この部屋の主はボクサーか？はたまた、レスラーか？

いいえ、違います。

ここの主はただの馬鹿、体を張った芸風なので、鍛えてないと死んじゃうんです。

名前は、長野 司と言います。

ただいま、喋る死体の状態です。

ステイルとの戦闘を終えて、上条は自宅に司とインデックスを運ぼうとしたのだが、ドアの金属部分が炎の熱で変形していたため、入る事が出来ず、司の部屋へ二人を運んだ。

そして、司は意識が戻ったが、体が動かず、仰向けで倒れている。心配されるのはインデックスで未だに意識が戻らず、上条の必死の呼びかけにも反応を一切、示さない。

「上条、とにかく病院だオレの携帯アドレスに『病院』で登録してるからそこにかける。ツラはカエルだけど腕はブラ。クジャ。クの先生につながるハズだ」

上条の悲痛な叫びを聞きかねて、司が指示を出す動けない司の変わりに上条が携帯を操作する。その手は少し震えていた。

「顔面バーコードはどうした？」

司は上条に質問する。軽いパニック状態の上条を落ち着かせるために。

「ああ、アイツならお前達を運んでる間にいなくなってた」

「なにに！？クソオ…！アイスの代金、返しやがれ」

心底くやしそうに愚痴る司に上条は苦笑した。その時、耳に当てていた携帯から呼び出し音が消えかなりの年配者だと思われる男の声が聞こえてきた。

『司かね、ヤレヤレ今度はどんな無茶をしたんだい？』

「あつ、違うんです！今長野は動けなくて、代わりにオレがかけてるんです！」

上条は噛みつくような勢いで、携帯に向かって声を張り上げた。

『君は誰だい？』

「上条当麻です！そんな事より今………」

上条が状況を伝えようとした時、インデックスの体が突然、光り出した。

青白い光を放ちながら、両目を見開いている。その表情は感情が抜け落ちていて、まるで人形のようにだと上条は思った。インデックスは何事かつぶやいているが、上条にも司にも聞き取れない。聞こえたのは最後の一言だけ。

「…ヨハネのペンで目覚めます」

そう言っでインデックスは立ち上がった。

「なんだ！？どうした？ゲツ！発光してやがる」

必死に首だけ動かして、インデックスを見た司の感想。インデックスは司に視線を向けて話し出す

「これから回復魔術を行うため、天使を降ろして神殿を構築します。倒れている人、手伝って下さい」

「上条！ヤベーぞ、このガキ。早く医者と呼ばっ！」

司はインデックスの頭がおかしくなったと思ったようだ。

「長野！その子の言う通りにしてくれ。その子は魔術を使うつもりなんだ！」

上条の言葉を聞き、司は大音量で怒鳴る。

「ゲコタ先生！ヘルプミ！今オレの部屋には病人と怪我人しかいません！」

『…了解、司は自宅にいるんだね。救急車を手配するから待ってなさい。…上条君だっけ？バカが動かないよう見張っててくれ』

そう言っで、上条が返事する間もなく、電話が切れた。

「誰が病人だ！？」

「お前だ病気ウニ！何が魔術だ、天使だ、大体ダイコンじゃねえんだからそんなもんがホイホイ降りてくるか！」

言い争う司と上条。ちなみに司は『天使降ろし』と『大根おろし』をかけてます。

「だったら、さっきの黒コートはどう説明すんだ！炎の化け物を出してきたじゃねえか！あんな能力者いないぞ」

似たような能力でバイロキネシスがあるが、炎が怪物になるなど聞いたことがない。

「知るかよ！大方、お前とおんなじ中二病の能力者だから、あんなのが出て来たんだろ、もしくは本当に中学生なんじゃねえの？」

「あんな図体のタバコくわえた中学生なんかいねえよ！」

……神は言っている、「世の中、不思議でいっぱいです」

「ゲブツ、ゴッフン！！」

「「！！！？？」」

延々と続く上条と司の言い争いを止めたのは、床にぶちまけられたインデックスの吐血だった。ポタポタと滴り落ちる血を拭いてもせず、彼女は言った。

「話を聞いてくれれば、助かります」

「わ、分かったインデックス、ちゃんと聞くから」

「あのー、冷蔵庫にトマトジュースが入ってるんで、よかつたらどうぞ」

上条は正座して、司は気を使いながら、インデックスの話を黙って聞いた

救急車が来るまで自分の命が持たない事、回復魔術を使うのに上条の『幻想殺し』が魔術を打ち消してしまうため部屋から出て欲しいとインデックスは語った。上条は悔しげに右拳を床に打ちつけた。

「クソ！オレの力なんて壊すだけで、誰かを救うのには、なんの役にも立たないのかよ」

「でもさあ、救急車が来るまでホントに持たないのか？」

「ええ、せめて気を失っている時に受けたダメージが無ければ、なんとかなっただんですが…」

インデックスは遠回しに、司のせいでピンチだと訴えた。

「そのウニさんが、『ガキを踏みつけないと幻想なんてぬるい事を言わず、テメエの現実ぶっ壊すぞ！』で、脅してきたんです」

「…長野…上条さんは今ほど、お前が動けない事が、嬉しいと思っただ事はないですよ…」

「ウオオオオ！オレはとんでもない事をしてしまった！シスター、オレに出来る事ならなんでもするぜ、言ってくれ」

上条の殺意を敏感に察知して、司がインデックスに協力する事を誓う。

「そう言っただけで助かります。失敗したら、アナタが死ぬかもしれませんけど、よろしくお願いします」

インデックスの言葉に、顔をひきつらせる司。

「長野、お前と会ってまだ3ヶ月ぐらいだけど、楽しかった…本当に」

「止めて！フラグが立つから、…って、何拝んだウニヤロー！！」

「じゃあ、俺は外で成功する事を祈ってるぜ」

上条はそそくさと部屋から出ていき、インデックスは無表情で司を見下ろしている。

「それでは始めます」

「始めんなあ！上条さーん！右手をもぎ取ったら参加できますよー！！代わって下さーい！！！！」

司の心からの叫びであったが、答えてくれる声は皆無であった。

「では、まず正確な時間を教えて下さい」

「正確な時間？…テレビの時間表示なら正確だと思うけど…」

「テレビ…この薄いパネルの事ですね」

インデックスは、トコトコと、テレビの前に移動する。

そして、数秒後…

ボカアンツッ！！

テレビが大破した。

「オイイイ！！何しやがった！？」

「とんでもないポンコツです」

「ポンコツはお前だ！いくらしたと思ってんだ！そのテレビ」

「安心して下さい。こんな物に頼らなくても、星の位置と月の角度で時間は分かります」

そう言つて、インデックスはベランダに出て行く。司の言う事など聞きもしない。一方、司は…

「ふざけんな！！最初から、そうしろ！アホ〜！ロリ〜！イカ〜！！」

ツバを撒き散らしながら、怒り狂っていた。そして、インデックスが戻ってくる。

「正確な時間を確認しました。では神殿を構築します」

辺りを見回して、ダンベルに目を留める。

「とりあえず、これで…」

ポキンッ！

軽快な音が響く。

片手で50キロのダンベルを持ち上げようとして、インデックスは肩を脱臼した。

「…どうしてくれるんですか？」

若干、怒気をはらんだ口調でインデックスが司に問いかける。

「知るか！さっきのも、今のも、お前の自爆じゃねえか！！」

インデックスは司の発言を聞き、黙って台所に移動した。ゴソゴソと何かを探して、戻ってくると司の顔を見下ろす位置に立った。

手には包丁が握られていた。

「…もう一度、尋ねます。どうしてくれるんですか？」

「すみません。ごめんなさい。これからはダンベルの横に、空のペットボトルを置いておきま……」

「ゲボラ、バツハ!!」

ベシヤッツ!!

「ウギャー! 汚ねえ!!」

司の命がけの謝罪の最中に、インデックスがいきなり吐血した。

「余計な手間と予期せぬ負傷のため、限界が近いです」

「…そうですか…オレも動けないところに、刃物で脅されたり、顔面血まみれにされたりで限界なんですけど」

司の言葉を完全スルーして、インデックスはちやぶ台に血文字で魔法陣を描き、お菓子の空き箱やDVDのケースなどを使って、この部屋のミニチュアを作り始めた。

片手で脂汗を額に滲ませながら、なんとか完成させたが、すでに呼吸は荒い。

司の耳にも苦しそうな息遣いが聞こえてきた。

「オイ、大丈夫かよ?」

「…ゼエ、気遣い無用です。それでは私の真似をして唱えて。そして、天使を想像して下さい」

「お前の真似? それはいいけど、天使って何?」

「アー、アー、アー………」

（聞けよ、人の話！クソツ、天使だと？）

司は仕方なく自分なりの天使をイメージし始める
司が想像したのは、白鳥の羽を生やした『小便小僧』。

本当にマズイと思ったら、迷わず119。(後書き)

何故、司があんなイメージを脳内に描いたのか？
馬鹿の考えは次で説明します。

余裕があるなら、タクシーを利用するべし。(前書き)

司が見た番組はトレ。アの泉だと思っています。

余裕があるなら、タクシーを利用するべし。

その少年は、迫りくる敵の大軍に自らの『聖水』を放水して、自軍を勝利へと導いた。

また、ある時は炎がついたダイナマイトの導火線に『聖水』をかけて炎を消し、人々の命を救ったと言われている。

生まれもった力だけで困難に立ち向かい多くの民を感動させた少年は、死してなお人々の間で語り継がれる伝説となった。

現在でも、彼は物言わぬ石像となり、この世が平和で満たされる事を望んでいる。

尊ぶべし。その高潔なる名は『小便小僧』。

…以上が司が昨夜に視聴し、多大な影響を受けたTV番組の煽りである。

（まあ、いいよな。オレは無宗教だし、エ。アは好きじゃないし）

そう思いながら、司は自分の意識の中に没頭していく。

…これで余計な事を考えなければいいのだが、残念ながら司には無理な話であった。

司のおバカ思考は、とある実験映像を描き始めるその内容は、

導火線の炎は『聖水』で本当に消火が可能なのか？

コメントするのも馬鹿馬鹿しくなる、この実験。しかし番組スタッ

フは、通常よりはるかに長い導火線のダイナマイトと『小便小僧』を用意。ヤル気満々で実験を開始した

導火線を炎がバチツバチツと、音を立ててゆつくりと伝っていく。そして『小便小僧』が放水を開始、『聖水』は炎に勢いよく降り注いだ。炎を消す事は出来ない。『聖水』をくぐり抜けた炎は、火薬に迫る！石像は動けず見当違いの方向に『聖水』を浴びせ続けやがて…

ズドガ〜ンツツツ！！

ダイナマイトは爆発して残ったのは原型を留めていない英雄像の残骸のみ

「…って、何を考えてんだオレは〜！！」

司が絶叫して目を開けると、部屋はまばゆい光に包まれていた。そして、ちやぶ台の上には純白の翼を持った天使がフワフワと浮かんでいた。

「素晴らしい。これほどの天使ならば私だけでなくあなたの傷も癒やし、マナを満たしてくれるでしょう」

「…あつ、そう…コイツはそんなに凄いのか？」

確かに突如、現れた天使は司の小汚い部屋を、ここは神殿か？と錯覚してしまう神々しさと存在感を放っている。が、司の最悪イメージで現れた天使である。ハッキリ言って信用性0だ。

「失礼な、この天使だったら信者の一万や二万人を軽く騙せます」

明らかに司より失礼な事をほざくシスター。

「オーイ、せめて救うと言いやがれ」

「残酷な真実が人々に悲しみを与えるならば、私が真実を背負い、人々には幸福の嘘を伝えましょう」

「何様！？」

2人が言い合っている間に、天使が放つ光は強さを増していき、司は目を開けていられなくなった

目を閉じてしまった司の耳に、インデックスの声が聞こえてくる。

「さあ、アナタも素直になって我らが神にすぎりなさい。今、入信すればローラ＝スチュアートの下着写真がつかますよ」

なんか、いかがわしい手段で勧誘してきた！心なしか声が生き生きとしている。

司は両手で耳をふさいで、拒絶する。

「誰だよ、それ！？欲しかねえよ！そんなもん！！」

叫んで司は、自分の体から痛みがなくなっている事に気付いた。

（治ったのかよ、あれで？）

司が目を開けると、そこには光もなく、天使もいない。

インデックスが散らかったちゃぶ台に突っ伏しているだけだ。司は慌てて駆け寄り、抱き起こして頬を軽くはたく。すると

「うにゃあ、大丈夫だよお。まだまだ食べられるもん、むにゃ…」

なんとも幸せそうな、寝言が聞こえてきた。司は安堵のタメ息をもらす。

「ハア」。とりあえず、コイツも無事か…」

なんだかんだで、助けてもらったと司は思った、先程までの司の状態は経験から言って、入院一週間コースだ。それが、方法はどうであれ30分、足らずで完治したのだ。

「起きたら、おごつてやるぜ。入信はしねえけどな」

司はインデックスに感謝した。そして、

「???!?!」

とてつもない事実に気付き、驚愕した。一瞬で、『刹那』を使わずに、出せる最高速度のスピードで玄関まで行き、勢いよくドアを開けた。

「なんだ! あつ、長野!?!? どうしたんだ!? 顔面が血まみれだぞ、まさか、失敗したのか!? インデックスは!?!?」

外でヤキモキしながら待っていた上条が、司の尋常でない姿に狼狽しながら話かける。

「とりあえず心配事を解消してやる、あのガキは無事だ。ついでにオレもな」

まだ湿り気が残る自分のシャツで乱暴に顔を拭きながら、司が答えた。

「そうか……よかったあ」

よほど心配していたのだろう、上条は全身の力が抜けて、その場にしゃがみこんだ。

「長野、ありがとうな、ちゃんと事情を話すよ」

「どうでもいいんだよ、そんな事！それより上条、あのガキを裸にひんむいたのは、お前か？」

「なっ！なんでそれを…ハッ、タンマ今のは違う！」

上条は慌てて言い直そうとするが、司はすでに携帯をイジくり、メールを作成し始めている。

「ちよつと待て長野、大体なんで分かったんだよ！？」

「アホか、シスターがクールビズするなんて聞いたことねえんだよ。後あんなバカデカい安全ピン持ってるのは上条、学園都市でお前だけだ！」

司の推理に上条は言葉を返せない。バカのくせに、こういう時は鋭い。

「そういう事で、貴様の悪事はデルタフォースの他2名に報告する」

デルタフォースとは司のクラスの三バカをまとめて呼ぶ時の名前である。ちなみに司はデルタフォースに所属していない。
一人無敵艦隊と呼ばれ、バカのキングに君臨している。
…ダメじゃん。

上条が司から携帯を奪おうとするが、司はすでに送信ボタンを押していた

「終わった…不幸だ〜！」

嘆く上条の携帯が、立て続けにメール受信のコールを鳴らす。

『Eメール2件』

上条が無言で内容を確認する。

『カミヤ〜ン、ホンマ殺す』

『カミヤン、ぶつ殺すにや〜』

「…………不幸だ」

「チャラララ、チャツ、チャツ、チャ〜ン。長野 司は上条を不幸にした。ロリコンを一匹、この世から消した」

「うるせえ！ゲームの戦闘終了の後みたいなの喋り方すんな！殺意が沸くんだよ、その話し方！」

ゴガンツツツ！！

上条が文句を言うと、同時に折りたたみストレッチャーが強烈なバツクアタックを司に決めた。ふっ飛ぶ司。

「おかしいな司、救急車を呼ぶほどの怪我人が何故、立って歩いているんだ？、驚いて担架を投げてしまったぞ」

不機嫌な口調で、そう言いながら歩いて来るのは、救急隊の制服を着た長身の女性。同じ制服を着用している屈強そうな男2人を後ろに引き連れて倒れている司の前に仁王立ちする。

「ちよっ、村野さん。シャレにならないぐらい後頭部が痛いんですけど」

頭をさすりながら、起き上がる司、どうやら知り合いの様だ。

（思い出した。前に長野が学園都市には世界一恐ろしい救急隊がいるって言って、めずらしくビビってたな、この人達がそれか）

そう思って見ると、確かに3名の救急隊員は異様に迫力がある。特に隊長と思われる村野は離れて見ている上条でさえ、息苦しくなる威圧感を放っている。

「え〜っと…村野さん来てくれたんですね。でもサイレン聞こえなかった様な」

似合わない愛想笑いを浮かべながら、何を話せばいいか分からない司。

「サイレンは故障中だ、ついでに言えばここまで上がって来るのに階段を使った。エレベーターも故障中らしい、そんな事より…」

喋りながら村野は司の顔面を鷲掴みにして、高々と持ち上げる。恐るべき握力と腕力である。

「痛い、痛いッス！村野さん。オレ浮いてるんですけど〜イテエ！アイキヤ〜ン・フラ〜イ！！」

余裕がある様に聞こえる司の悲鳴を聞いても、眉一つ動かさない村野。…さつきから患者と救急隊員のやりとりに見えないのは、気のせいです。

「長野、まさかと思うが、私の最も嫌悪する輩がなんなのか忘れたワケじゃあるまいな？そんなハズないよな？かれこれ3年間に渡る腐れ縁だもんな？」

？マークが語尾につくたび、司の顔にめり込んでる指の力が増していく。

「アダダダダッツッ！！覚えてます！『救急車をタクシー代わりに使うウジ虫共』であります！」

「そうだ。よく覚えてた。ならば自覚しろ。今のキサマがソレなんだ」

「ちよつ、違うんですって！天使のおかげで治ったんですよ、オレは！！」

このままでは、顔面を粉碎される。半ば本気で、そう思い司は絶対に信じてもらえない真実を口にした。すると、以外な事に村野は司から手を離し、眉間にシワを寄せて2人の隊員と話し始める。

「チツ、しまった。脳だなコレは、恐らく過度の能力使用により、パーソナルリアリティと現実の境界線がいまいになってる状態だ。元からイカれたガキだから分かんかった」

「それから、神経系統が破損して、脳内麻薬が過剰分泌して思われます。受けた連絡では、動けないハズですから」

「クソツ、動かない体を無理やり動かしたか、患部によっては壊死する部分も出てくるな、担架に早く乗せろ」

「アレツ？なんすか今の会話、日本語？」

ワケが分からないまま、担架に乘せられる司。

脳に異常がある司には、伝わらないと知っていながら、村野は心から司に謝罪する。

「すまなかつたな、司。もし、お前に後遺症が残ったりしたら、私の人生を全て使って償おう」

村野は静かに、決して揺るがぬ誓いを口にした。その表情は泣きそうな子供の様に見えた。司を運ぶ2名の隊員も沈痛な面持ちで、うつむいている。そして司は…

「あの、これでオレが検査の結果、正常だと分かったら、どうなるんでしょうか？」

事態がシヤレにならない状況だと、ようやく理解して、その後、我が身に訪れるであろう災難にビビっていた。

司の問いに、村野は「ありえないが」と前置きして、ありえない場

合の話を始める。

「そうだな…体に刻み込んでやろう。重病患者や重体患者がどれほど辛く、苦しいかを。本当に救急車が必要な人間に対し、自分がどれほど非道な真似をしたか、きっちり、みっちり教えてやる」

「ヤダッッッッ！もう一回、頭がぶっ壊れるまで顔面クローをかけてくれえええ！！かけてくれないなら、自分でやるから邪魔しないでくれええええ！！！」

「くっ、暴れるな司！いいか、出来るだけ衝撃を与えず、迅速に運ぶぞ」

司の左胸部と腰を指で押さえて、暴れるのを止める村野。

「ハイツッ」

村野の指示に息ピッタリの返答をして、音すら出さず、滑る様な足運びになる隊員達。そして村野も同様の移動術を使い、あっという間に階段を駆け降りていく。

「オッタッスッケッ！！」

司の悲鳴だけが響き渡る。上条が通路から下を見ると、ちょうど救急車に司が搬入されるところだった。

「不幸な…」

上条は初めて口癖を友人に使用し、合掌した。

「まあ、長野なら大丈夫だろう」

上条は友人の頑丈さを信頼して、その場を後にした。そしてインデックスを心配して司の部屋に入った。

その15分後……

「フギヤルベブ！ナタナマタナ！！♂ ¥ £ ▲ \$ ✂！！！！」
学生寮の前に停めてあった救急車から、人外のモノとしか思えぬ叫び声が、辺りに響き渡った。

この日から、3ヶ月後に『人体実験をする、魔の救急車』という嘘臭い、都市伝説が学生の間で騒がれるが、それは、また、別の話。

余裕があるなら、タクシーを利用するべし。(後書き)

次は、ねーちゃん出すのを目標にします。

レトロゲームほど、ハマると抜け出せない(前書き)

目標達成出来ず(＜―＞)

レトロゲームほど、ハマると抜け出せない

「司…お前に私の救急車に乗る資格を与えてやる」

救急車内で行われた身体検査の後、村野は笑顔で司にそう言った。村野から告げられた言葉それは司を精神的にも肉体的にもボロボロにしてやる。そういう意味だった。

優れた医療技術は、拷問技術にもなる。事実、村野の宣告から3分後、初めこそ奇声を上げ抵抗していたが、

「アルファガベータヲカツパヲツライプシロンシタノハナゼナノ??」

などと全く持つて意味不明な言葉を呟き出した。このまま司の精神は崩壊してしまうと思われた。だが、

『村野救急隊、緊急要請。第6ショッピングセンター、第2フロアにて火災事故が発生。直ちに現場へ急行されたし』

緊急無線に入った一報が司を救う。

救急隊の使命と馬鹿の更生。天秤にかける必要もなく、司を車内からポイ捨てして救急車はフルスロットルで現場に向かった。

残された死体もどきは、しばらく動かなかったがやがて起き上がり自室を目指してフラフラと歩き出した。

「オ…イ、長野。壁に話かけても返事は一生、戻ってこないぞ」

部屋に戻って来るなり、体育座りでブツブツと何事か呟く友人を上条はもて余していた。

「ねえ、とうま。この人お腹すいてるんじゃないかな？」

「お前、この廃人を見てなんで空腹かどうかを心配するんですか？」

上条にはインデックスの思考回路が理解出来ない。

「だって、お腹が空くと私は頭がクラクラして目に入った物が食べ物に見えたりするもん」

グキョルルル~~~~!!

その言葉を言い終わると同時に、インデックスのお腹が空腹を盛大に訴えた。

「…ちなみに、今のお前に上条さんは、どう見えているのですか？」

「…食べていい？」

「コンビニで何か買って来るから!!」

言うが早いか、上条は部屋を飛び出した。後ろから「早く帰って来てね」と暴食シスターの声が聞こえてくる。

（アイツ待ってる間に、長野に噛みついたりしないだろうな…）

不吉な考えが頭によぎるが、すぐに打ち消した。

（まあ、そうなくても長野なら復活してやり返すだろうけど…）

しかし、今の司の姿を思い返し、万が一の事を考える。

（とりあえず、長野の分も買って行こう）

インデックスの考えに否定的だった上条だが、『食べれば治る』というのも司ならば、十分に有り得ると思い直していた。さらに上条は考える。

（それでもダメなら、もう一回、救急車だな）

…司が聞いたら、症状を悪化させる事、間違いなしの危険な思考であつた。

しかし、上条の心配は杞憂におわる。

「あゝ、うまかった。最近のコンビニ弁当はクオリティ、ハンパないな」

ご満悦の司。食べた弁当は10個。

「おいしかったんだよ。特にサンドイッチのイチゴとクリーム挟んだヤツなんか、思い出ただけで幸せだよ」

大満足のインデックス、食べた弁当12個にサンドイッチを4袋。

「不幸だ……」

嘆く上条、食べたのはオニギリ3個。財布の中身、残高0。

その後、上条が買ってきた大量の食料を見るなり司は完全復活！（二度と心配しねえ）と上条に決意させる。さらにインデックスと共に異常な食欲を発揮！（途中で食べ物がなくなったらオレが食われる！？）と上条を恐怖させてコンビニを3往復させる。（明日からどう生活しよう…）と上条を落ち込ませて、今に至る

ブォーンッ、ブォーン。

学園都市では、すでに骨董品扱いの扇風機が首を振りながら、必死に涼風を巻き起こしている。窓も全開にして、時々カーテンを揺らす程度に風も吹くのだが、熱帯夜なので、それでも暑い。

「しかし、10万3000冊の魔導書。か…2、3冊ぐらいゲームの攻略本が混じってんじゃねえの」

「ムッ、そんな事ないもん。確かに数は多いけど、仏教に北欧神話にギリシア神話やスラブ神話、他にもいっぱいある異なった魔術法則が…」

「そうだ、ゲームしようぜ」

「人が話してるのに無視されたあゝ！」

なぜ2人は、こんなに気安く話しているのか？その理由はインデックスと司が食事の最中に、

「モグモグモグモグ、ガツガツ…！ガツガツ！？ムシャムシャ」
「パクパク、ウング、ウング。パクパク！ハグハグ、ハグハグ」

と食事擬音コンタクトで、意気投合したから、らしい…なんじゃ、そりゃ??

無視された事に腹を立てたインデックスは短い手足を振って、可愛らしいパンチとキックを司に放つ。

「コノツ、コノツ！」

「えっと、これじゃなくて…あつた！」

インデックスの攻撃も全く無視して、部屋のスミに置いてあるダンボール箱から、何を描いたか分からない絵や、けん玉を引っ張り出して目当ての品を見つけ出した司。

「ゲーム…テレビが壊れてるんですけど？」

上条が液晶画面がなくなってるテレビを指差した

「ゲームと言えばテレビかネット。そんな時代だから、この男が必要なんだよ！」

司が勢いよく掲げた物、それは…

「どうした、ちっこいの？右か左なんだから、さっさと決めろ」

50キロのダンベルをお手玉の様に扱いながら、インデックスを急かす司、その顔は楽しそうに、ニヤついている。

「ぐぬぬぬ、こっ、こっちなんだよ！」

意を決してタルにナイフを突き立てるインデックス。

ビヨォ〜〜ンッッ！

「ヒヤッ！？」

間抜けな音と共に、タルから飛び出す『黒ヒゲ』。すでに7回目だが同じ様に驚くインデックス。

「ヤッリ〜！」

そして、そのインデックスを見て、歓声を上げダンベルを天井近くまで投げて再びキャッチする司。

「ムウ、つかさが横でガチャガチャうるさいから悪いんだよ！」

「ハイハイ、次は横からゴチャゴチャ言ってやる」

ホッペタを精一杯膨らませて抗議するインデックス。

怒るインデックスをさらに煽る司。ヘラヘラと笑ってる顔はインデックスでなくても腹が立つ。

（良かった参加しなくて）

とうとうブチキレたインデックスが司の頭にかじりついているのを見て、上条は胸をなで下ろしていた。

平和な光景であつた、司が頭から血を流し「トマトジュース！」と叫んでいたが…しかし、平穩は長く続かない。

突然、窓の外から『矢』が飛んできて、黒ヒゲのタルを撃ち抜いた！

「ギヤアアア！黒ヒゲさんが、家なき子になってしまったあゝ！！」

インデックスを頭にぶら下げたまま、司が絶叫する。そして、ベランダに出て辺りを見回す。

「バカッ！長野戻れ」

いつ『矢』が飛んでくるか分からないのに、ベランダに出るのは無謀過ぎる。上条はそう思っただけで司に怒鳴る。しかし、司は辺りをジロジロと見回しながら、ゆっくりと戻って来る。

「バカヤロオ！インデックスも引っ付いてるのにどういっつもりだ！？」

「心配いらねー。初めからオレ達を殺すつもりじゃなかったハズだ」
司は落ち着き払って、上条に説明を始める。

「タルに偶然当たったなんて思ってたのか？当てたんだ。間違いなく、その気ならオレでもお前でも殺せたハズだ」

そう言いながら司は『矢』の先端部分に結んである『手紙』を解いて上条に見せる。

「それは！？」

「内容は…ケツ、インデックスの事で話があるから、ココにこいだとき。脅迫状だな」

手紙には手書きの地図と時間が指定されていた。時計を見ると後2

時間ほど余裕があった。

「空き時間で別れを済ませろって事だろ。ムカつくヤローだ」

司が手紙を丸めてゴミ箱に捨てた。

上条はここで、さっきから気になっていた疑問を口にする。

「…長野、さっきからマトモな事言ってるけど、頭が血を流し過ぎて変になったんじゃないか？」

ようやく突っ込みを入れる上条、司は待ってましたと言わんばかりに、インデックスを頭から引っ剥がして、床に投げる。

ベチャ！！

インデックスは床にうつ伏せでダイブする。

「突っ込みオセエよ！もうボケてる場合じゃねえよ！包帯、ボウタイ、ホゥタゥイッ！！」

血まみれの頭で騒ぎ立てる司。

「ハイハイ、ちょっと待ってる」

勝手知ったる長野の家。落ち着いて救急箱を持って来る上条。

ガジッ、ガジッ、ガジッ！

未だうつ伏せの状態だが、歯を音を立てて噛み合わせている得意満面のインデックス。

馬鹿なコントを繰り広げてる間にも、時間は刻一刻と過ぎていく。
指定時間まで後、1時間55分42秒…41403938
373635……………

レトロゲームほど、ハマると抜け出せない（後書き）

次こそキーワードに『ねーちゃん』を追加したい。

「一番面白い時代劇?」『三匹が斬る!』(前書き)

やっと出た。ちよつと出た。

「一番面白い時代劇？『三匹が斬る！』」

作戦名

『遅いぞ武蔵！すいません、場所を間違えてました』

「……………」

司から渡されたチラシの裏に書かれた文章に、上条は顔をひきつらせた。

その上条に頬を寄せて、覆い被さる様にして一緒に紙面を見ているインデックスは、不思議そうに首をかしげた。

1、オレの部屋の出入り口に仕掛けをして、誰か来たら分かる様にする。

2、上条の部屋に移動、窓から入る。開いてなければ鍵を壊す。

3、脅迫状は当然、無視。怒ったクソヤローがオレの部屋に来るのを待つ

4、クソヤローが、部屋から出てくるまで金属バットを持って待機。出てきたら『砂』にする。

5、ひとしきり殴った後上条のパンツを被せて、「変態が出た」とアンチスキルに通報。

6、どうせ、不法侵入者ブタ箱に直行。メデタシメデタシ。

「完璧じゃね？もうこれからオレは名字の上に『軍師』って付けた方がいいかな？」

「……………」

これで軍師なんて名乗られたら、諸葛孔明が幼女化して。ハンニバ

ル・バルカとスキピオ・アフリカヌスは異次元に飛ばされて、喧嘩を始めるだろう。つまり……
あり得ません。

しかし、上条当麻は出来る男。ここでの突っ込みは不毛な言い争いになるだけだと心得ている。

「……いいんじゃないか」

「だよな！さすが上条。だてに尖ってない！」

自分の案が認められて喜ぶ包帯頭。上機嫌になったところに上条は、自分の意見を言ってみる。

「ただ、一回、話が出来ないかな？」

「はあ？」

日本語で話をしていたら、いきなり相手がヘブライ語を話し始めた。それぐらい司にとって理解し難い意見であった。

「なんだそりゃ??」

「だからさ、オレ達が腹を割って話し合おうとすれば意外と……」

「シャラップ！」

ビターンツッ！

上条が言い終わる前に司の闘魂ビンタが炸裂した

「イテエツッ!？」

「話し合いなんて選択肢はとつくの昔に消滅してんだよ！コイツ見りゃ分かんたる！」

「ほえ？」

突然のバイオレンスについていけず、ぽかんとしていたインデックスが、間の抜けた声を出す。

「こんなガキを後ろから襲うヤツらだぞ！ノコノコ行ってみる。お前はグロ注意の人間標本にされて！コイツはタコかイカの化け物にウネウネされて成人指定！そしてオレはピカソを超える巨匠になる！」

「…長々と説明ありがとうございます。でも、お前が巨匠になるプロセスが分からん。後、これは仕返し」

バコッ！

上条がそれなりの力で頭をど突くが、司はビクともしない。何事もなかった様に語り出す。

「上条、お前が1日一回は説教しなきゃ禁断症状が出る厄介な病気なのは知ってる」

「そんなの、上条さんが初耳なんですけど！？」

上条の訴え。司はそれが聞こえていない。かまわず喋り続ける。口振りが徐々に熱を帯びていく。

「でも、さっき言っただろ簡単に殺せたのに殺さなかった…ナメられ

てたら話し合いにならねえ」

苦々しい物を吐き捨てる様に司は言った。真剣な顔つきだ。話と言えど馬鹿話しかしない目の前の友人が、初めて真面目に何かを伝えようとしているのかも知れない。そう感じた上条は黙って話を聞く事にした。

司は言葉を探すように、髪を片手でクシャクシャといじった。

「自分の得がなかったり、相手の力を認めてなかったら誰が言う事を聞くかよ。聞いて欲しかったら何でもいい、価値を認めさせなきゃいけない……ああ違う！価値なんか認めさせなくていいや、どんな手を使っても、満足させればいいんだ」

司が言ってる事は当たり前の事だ。あまりにも当たり前過ぎて、普段は意識もしないような事だ。だが、司はコレを強く意識して、自分なりに深く考えて生きている。

だが、残念な事に司は自分の考えに具体性を持たせて、話が出るほど言語を知らない。

故にこれ以降は「ア……」か「ウ……？」という呻き声しか上げられない。見かねた上条が口をはさむ。

「無理すんな、長野。言いたい事は大体分かったから」

「マジ！？良かった。一年分の頭を使ったカイがあった」

上条の助け舟に、司は最も苦手な『思考』から解放され、得意分野の『行動』に移った。

まずスミのダンボールからクルミ大の鈴がいくつも束ねてある、音を出す以外の用途が思い浮かばないオブジェを取り出し、玄関のドアに設置する開ければ、さぞかし近所迷惑な事だろう。

続いて押し入れから金属バットを取り出し、軽く素振りをする。

「ケツケツケツ、野球仲間から『キチガイにバット』と言われたフルスイングを見せてやるぜ」

イメージの中の相手をボールに見立て、かつ飛ばしているのだろう。誰が付けたか知らないが、ピッタリのあだ名だと上条は思った。

「オラッ、チビっ子なに寝てやがる。お前、オレが話してる最中にもう寝てたろ？」

司が、立ったまま寝ていたインデックスの頭を、バットで軽く突っつけた

「ふにゃ…だつてつかさ話が長いんだもん…むにゃ」

まだ寝ている様な、とぼけた口調でインデックスが抗議する。

「甘えてんじゃねえ！校長先生の話はこんなモンじゃねえぞ！」

「…そんなの知らないもん…クウ……」

そう言い残してインデックスは再び眠り始める。後は司が揺さぶつても、ほっぺたを引っ張っても、起きる気配を全く見せない。司は立ったまま眠りこける、インデックスの姿に苦笑した。

「まあ、いいかガキンチョは寝るのが自然な時間だもんな」

そう言って微笑を浮かべた司は、年齢に不釣り合いな父性を感じさせた。

…ように見えたのは勘違いでした……

「…まったく自分もインデックスと変わんねえじゃねえか」

自分のベットで体を猫のように丸めて眠るインデックスと、床に大の字でヨダレを垂らして、だらしなく寝入っている司を見比べて上条はつぶやいた。

あの後、司がビニール紐で起きないインデックスとバットを背中に背負い、上条の部屋に移動した。幸い、窓の鍵は閉め忘れていたので壊されずにすんだ。

「こっからは徹夜覚悟だ寝てたら叩き起こすからな」

インデックスをベットに横たわらせて、偉そうに司はこう言った。そして上条がトイレから戻ると眠りの国に旅立っていた

「どうやって抜け出そうか考えてたオレがバカみたいじゃねえか」

上条は時計の時刻を確認して静かに立ち上がる。

（しかし、何も考えないで突っ走るだけだと思ってたんだけどな…）

上条は司がたどたどしく語った言葉を思い出す。実に正しい事を言っていた。有利な方が不利な方の意見を打算なしで、聞く事はない。それぐらい上条だって言われなくても分かっている。

（でもさ長野…それじゃあ世の中、寂しすぎるとオレは思っんだ）

せつかく口が付いてて、人を想える心もある。ならば誰も傷つかない方法だって見つけられるハズだ。

（アツサリ殺されちまうただけだろうけど…長野の言ってたオレの病気はあながち間違っていないかもな）

上条はベランダの窓を静かに開けて、2人の寝顔を見ながら、小声で謝った。

「ワリイ、行ってきます」

自分の耳にも届かない言葉に当然、返事はかえってこなかった。

指定された場所は、夏の夜の町とは思えない静けさだった。

「人払いのルーンを仕込んだだけです」

そう上条に教えてくれた女は神裂火織と名乗った。昼間見たステイルと違い魔術師に相応しいと思えない、Ｔシャツとジーンズ姿。

（それに結構、ギリギリのところまで露出していらっしやる!？）

昼間の町中であつたら、上条も鼻の下を伸ばして見とれてしまったかもしれない。だが今はそんな余裕はない。それに上条はさつきから、服装よりも神裂の持っている日本刀の方が何倍も気になっていた。

「返答を聞かせてもらえますか？」

実直そうな声で問いかけてくる神裂。その瞳には強い意志と闘志が宿っていた。腰の刀といい格好さえ抜かせば、彼女はどう見ても魔

術師には見えない。

（サムライだよな、どう見ても。さーて、上条さんは首を取られずにすむんでしょうか？）

頭の中で言いたい事をまとめ、意を決して話し始める上条。神裂の手が油断なく刀の柄にかかる。

刀を持った女剣士と学生の夜中の立ち話。異様と言える光景だが、この場には見る事も聞く事も出来る人間はいなかった。

「一番面白い時代劇? 『三匹が斬る!』 (後書き)

ドリフターズは面白い。

誰かのために泣くヤツは誰かの気持ちを考えろ（前書き）

最後に、やっとボケてくれた。

誰かのために泣くヤツは誰かの気持ちを考える

「…っ…さ、つかさっ。起きてよ、つかさ！」

熟睡していた司は、インデックスに揺さぶられて渋々、目を開けた。

「…なんだよ…トイレぐらい一人で行け」

無理やり起こされて不機嫌な司は、それだけ言って再び目を閉じる。

「違うよ！つかさのばかぁ！とうまが…」

「…変な事してたか…そつとしとけ、男は足の間で発電機を備えてい…」

「とうまが、どこにもいないんだよぉ！」

「！？」

その叫びを聞いて司の眠気は一気に消し飛んだ。ヘッドスプリングで立ち上がり、すぐさま窓から自室に戻る。玄関の仕掛けが外されているのを確認して、上条の部屋に戻る。

「あのウニめ…コンビニ行くなら起こせよ」

その時のインデックスが、あまりに不安げだったので、司は馬鹿な事を言った。

「違うよつかさ…とうまは一人で行っちゃったんだよぉ…」

しかし、司の言葉を聞いてもインデックスの表情が和らぐ事はなかった。彼女は今、自分の身勝手さを呪っている最中だったので当然だろう。

インデックスは何故、動けるようになった時に、司達から離れなかったのか？そう過去の自分を責めていた。

（分かってたくせに、私と一緒にいたら、とうま達が死んじゃうかも知れないって…それなのに！）

あまりに少年達が優しくかったから、自分の事を責めたりしなかったから、弱い自分は、すがってしまった。

（私は分かってたんだ、こういう事になるって、それなのに…）

差し伸べられた手を取ってしまった。振りほどいて離れていたら、危険な目に会わす事もなかったのに。

「とうま…ごめん…ごめんなさい…」

遂にインデックスは堪えきれずに絞り出すような、小さな嗚咽を上げて泣き出してしまった。

肩を震わせて、自らの行いを責める少女。その姿を見て司は…

ムカついた。

「インデックスー!!」

司が両手でインデックスの頬を挟み込んだ。かなり強く挟んだので、インデックスの唇がタコの様になる。

「ちゅっ…ちゅかひゃ!?(っ…つかさ!?)」

ワケが分からず涙で滲んだ目で見上げると、それでもハッキリ分かるくらい司は怒っていた。

「どうかしてるぜガキ。オレでも分かるくらい、どうかしてる」

言いながら、ズイツと顔を近づける司。

「上条がお前の事を考えて一人で突っ走ったのは分かるな?」

言われるまでもない。上条を自分のせいで危険な目に会わせてしまったから、インデックスは後悔しているのだ。

「次は、お前だ。自分が上条の事を大切に思ってるから泣いてるって分かってるか?」

それも多分、分かる。我が身の境遇を嘆いているだけじゃない。インデックスは上条に心底、感謝している。だから涙を堪えられなかった。

「じゃあ上条は、お前に泣いて欲しいのか?」

インデックスは司の、この言葉を聞いて思考が止まった。司は両手を離して、言葉を続ける。

「上条は望んでねえぞ、泣き顔なんか。お前が上条に少しでも恩を

感じてんならメソメソすんな。気合いで泣き止め！」

司はインデックスを慰める気は全くなかった。ただ腹が立ったから、言いたい事を言っただけだ。だが、その言葉が塞ぎ込んでいたインデックスの心を、奮い立たせた。

「なっ…泣いてないもん。笑ってたんだよ！」

服の袖でゴシゴシと、両目を擦ってインデックスは強がった。その様子を見て、司が齒をむき出しにして、嬉しそうに笑う。

「ヨシ！それで良いんだ。第一あのウニが黙って行くから悪いんだからな」

そう、司が怒っているのは上条に対してまだ。知恵熱を出しながら捻り出した作戦を無視された恨みは大きい。

（行くなら、行くで一声かけろウニめ。本気だったら止めたりしねえよ！）

とりあえず、上条を2、3発殴ると心に決めた。

「じゃあ、行ってくるぜ。絶対に連れてくるから、噛み付く準備して待ってる」

「分かったんだよ！」

ガジ、ガジ。

元気良く返事したインデックスは齒を噛み合わせる。…上条は例え

無事でも無事じゃ、なくなるかも知れない。

「あつ！でも、つかさ待って」

景気づけに開かなくなったドアを、ぶっ壊して外に出ようとしていた司はインデックスに呼び止められた。

「つかさ駄目なんだよ、人払いのルーンがあるもん」

「何それ？」

……少女、説明中……

「ケツ、人払いが現金払いか知らねえけどコソコソと嫌なヤツらだ」

それだけ言つて、司はインデックスに背を向ける

「つかさ、どうするの？」

「心配いらねー」

ガチャンッ！！

司がドアを力任せに、こじ開けて不敵に言い放つ

「我に秘策あり！」

神裂と上条の闘いは終結に近づいていた。

神裂の『七閃』と体術で、上条の体は满身創痕の状態だ。対して神裂の体には傷一つ、ついていない。しかし、追い詰められてるのは

神裂の方だった。

（何故また立ち上がる？何故まだ向かってこれる？）

神裂は表情に出さなかったが、内心で焦りを感じていた。

神裂は上条を傷つけるつもりはなかった。しかし、何も知らない上条に、インデックスの事を、とやかく言われたため、頭に血が登ってしまった。

「うつせんだよド素人が！」

口調を荒げて上条を罵り、洗いざらいブチまけた。

インデックスの完全記憶能力の欠点について、彼女に自分達がどれほど無力感を抱きながら接しているかを。それを知っても、上条は黙らなかつた。

諦めないでくれと、インデックスを助けたいと。

神裂はそれから、上条が何か言う度に傷つけた、力を徐々に強めていきながら、上条を黙らせるために。傷口は増えていき、痛みは激痛に変わっていった。

それでも上条は倒れない。自身の痛みじゃなく、インデックスの痛みを、自分の嘆きでなくインデックスの嘆きを、救ってやる事を諦めないでくれと、神裂に訴え続けた。

大声が出せなくなったから、声が届くように、今も傷んだ体を引きずりながら、神裂に向かって一歩、一歩と歩を進めている。

「何故ですか？あなたとインデックスは出会ったばかりのハズです。それなのになんでそこまで…」

神裂には、もう上条を傷つける事は出来ない。

「なんでって…見たいから。インデックスとアンタが笑い合ってるところを、オレが見たいだけなんだ…それだけだ」

力無く語られた言葉、それは自分とは違う『聖人』の言葉だった。

神裂は刀を鞘に収めて、自らも上条に向かって歩を進める。

両者の思いを隔てていた壁は崩れ落ち、和解の瞬間が近づいていた、その時…

「フリ〜〜ズ！動くんじゃない、クソアマア！！」

上条が、よく知ってる馬鹿がデカい声を張り上げ乱入してきた。

（バカな！？人払いのルーンをどうやって…）

疑念を抱き、声がした方向を振り向いて神裂は絶句した。

そこに立っていたのは、『倒れそうなポーズ』『漫画史上最悪最高のカリスマ』『ロードローラーだ！』『有名な、あのお方……の被り物をした司だった。さらにこのセリフ、

「ジョ条〜〜！オレは人間をやめたぞ〜〜！！」

「やかましい！誰のつもりなんだ、お前は！？」

自分の体の痛みも忘れて突っ込む上ジョウ。

ガクッ！

その横で神裂が片膝をつき、額に汗を浮かべていた。

「そ…そんな手があったとは…」

「ねえから！！！！！」

上条の突っ込み、2連発。もはや体が痛いなどと言ってはいられない。

「やれやれだぜ、コイツら早く何とかしないと…」

上条は深刻な顔で、そう呟いた。……上条さんも結構テンパってます。

誰かのために泣くヤツは誰かの気持ちを考えろ（後書き）

上条のジヨウはあしたのジヨウ。

真夏の会話は92%、Y談になる。(前書き)

日本刀には、着物。

真夏の会話は92%、Y談になる。

「古来より中国に伝わる拳法の中に、象形拳という動物の動きを模倣して闘う拳法があると聞きます。その中でも達人は催眠術と同じく自身を変性意識状態に保ち、他の動物になりきる事で人間と思えない力を発揮すると……まさか、こんな少年が秘術を会得しているとは……」

「そんな設定ないから！？ただのバカだから！」

「タバコを吸わないから、最高の肺ってヤツだあ」

「うるさいよバカとりあえず被り物を取れ！」

「キヤーッツツ、ケダモノ」

司の言葉を見無視して、上条は被り物を無理やり取ってしまった。

「Myカリスマ返せ！」

「…本当に何しに来たんですか、お前は？」

文句を垂れる司に上条が尋ねる、司は神裂の姿を見てから、上条の肩を組んで引き寄せた。

「お前が勝手な真似するから、殴ってやろうと思ってさ」

言いながら司は左拳をピタリと、上条のアゴに寸止めする。

「でも、やめた。これだけやった男は殴れねえ」

「長野…ワリイ」

苦笑混じりの謝罪を聞いて、司は上条から離れた。そして神裂を前にして仁王立ちで宣言する。

「上条！お前のはオレが引き受けた。残った方もキツチリ破いてやるぜ！」

司の発言の意味と勘違いを上条と神裂は分かりたくもないのに、瞬時に悟ってしまった。

「えーっと、長野。あの人は初めから、あの格好だったぞ…」

申し訳なさそうな上条の発言。神裂は怒りと羞恥にプルプルと体を震わせて、赤面していた。

「騙されねえって、あんな格好でポン刀持ってる女がいるかよ」

鼻息を荒くして、上条に向かって親指を立てる司。その後ろ姿を目掛けて抜刀した神裂が迫る。

「うっせんだよド素人が！ちゃんと意味があんだよ！」

ズバツッ！

「ウオオット！？」

神裂の鋭い胴薙ぎ。上半身を仰け反らせて、かわす司。そして、バ

ク転しながら体勢を立て直す。

「チイッツ！」

舌打ちしながら、神裂は手首を素早く動かして、『七閃』で司の動きを止めにかかる。

だが、司は人間離れした柔軟性で見切りで、ことごとく回避する。しかも神裂との距離を徐々に詰めながら。しかしそれは神裂が仕掛け罠。

「ハアアッツ！」

鞘に収め直した刀を、司の動きに合わせ抜き放つ抜刀術『唯閃』！最速の居合い斬りが司を真つ二つに切断する。ハズだった。

「ケツケツケツ、ハズズレ！」

居合いを獣の四足歩行の体勢になって避け。さらに神裂の右側面に回り込み笑う司。

「ケダモノめ、今宵の七天七刀は血に飢えているぞ」

中段刺突の構えをとり殺る気満々の神裂。その殺気をモノともせず、に司は軽快なステップを刻み始める。

「中々、齒ごたえがあるじゃねえか、気に入ったぜ」

果たして司は斬られる前に神裂のジーンズを破り取り、ショートパンツ姿にする事が出来るだろうか！

「ちょっと待てえ！オカシイだろ、いくら何でも」

緊迫する二人の間に上条が割って入る。

「止めないで下さい、この少年は危険です。今この場で始末しなければ」

「何でだよ！？コイツはオレの友達だ。バカだけど悪いヤツじゃない」

上条が司を庇うように両手を広げ、神裂の目を真っ直ぐ見つめる。
上条の視線に耐えきれず、うつむきながら両指をせわしく動かす神裂。そして小声で言い訳をするように呟く。

「そつ、それは…いきお…ではなく『聖人』としての勘と言うか…」

「成人！？ウソつけ、テメエはどう見ても二十代後半だろ！」

司の問題発言に神裂が、薄ら笑いを浮かべて刀を構え直す。…人は本気で怒ったら笑います。

「長野、少し黙れ！アンタも抑えてくれ」

司を一喝して、なんとか神裂をなだめる上条。その間も上条を挟んでメンチを切り合う『聖人』と『野獣』

（ダアア～！こんな事してる場合じゃないってのに）

二人の殺気に挟まれて、胃を痛めながら上条は心の中で嘆いた。
それでも、なんとか両者を落ち着かせて、神裂から聞いたインデッ

クスの体質を司に話す。全てを聞いた司は、

「ふ〜ん…ウソくせえ」

実にアツサリと否定する

「何を根拠に、そんな事が言えるのですか？」

神裂は一応、丁寧な言葉使いで司に問いかけた。
司は質問に、ある男の話をして答える。

「知ってるからだ。あらゆるジャンルに対応し、古今東西に存在する全てのエロを極めようとしている男を」

ある日、男は天を指差しながら聞いてもいないのに、こんな事を言った。

『ボクの脳内妄想を観測するならツリーダイアグラムが五台は必要やで』

b y、青髪ピアス。

「まさにヤツこそ、エロ完全記憶能力の持ち主！だけでも今でもピンビンだ！つまり…」

ヒュンッッ！

風切り音と共に、司の脳天へ『突っ込み』でなく神裂、特有の『斬り込み』が振り下ろされる。それを真剣白刃取りで防ぎ、抗議する司。

「何しやがんだ、人が話してる最中にオツパイ星人」

「字が違うと言っているでしょうが！真面目に聞いてやれば馬鹿話ばかり、その腐れた頭をかち割ってあげましょう」

司にしてみたら、この上なく真剣だったのだが、神裂には伝わらなかったらしい。

ギリギリ、ギリギリ！

二人の力が拮抗して、硬直状態が続く。
その間に上条は、

「え〜っと『人間の記憶力』、サイト見つかるかな？」

司の言葉で神裂の発言に疑問を抱き、二人は勝手にやらせておいてケータイで検索していた。

…上条さん、超クール。そして結果は…

「そんなバカな…」

神裂は人間の脳が140年分の記憶が可能だと知り、呆然としていた。

「やゝい、バゝカ。ヘソ出して、腹を冷やしてるヒマがあったら、ヒエ。タ貼って頭を冷やしとけ」

さらに、司にバカ呼ばわりされる屈辱。

「…そうします…」

しかし、神裂は相当なショックを受けたのだろう。力無い返答が返ってきただけだった。逆に司が対応に困る。

「いや、なんて言うか…元気だせよ。これでガキンチョの体に細工したヤツがいるって分かったんだから」

「長野の言うとおりだ、後はインデックスの体の異常の原因が分かれば…」

「上条が一番分かるんじゃないの？裸見たんだし」

「…聞き捨てなりませんね」

この話題に神裂が食い付いてきた。上条は慌てて両手を振り、無実を主張する。

「ちょっと待て、言っとくけど、不可抗力だから！それにオレが見て分かるようなモノなのか？」

「確かに…それならば、ステイルが何か気づいたハズです。彼はルーン魔術の天才ですから」

「ケツ、使えねえヤツら…待てよ、見ても分からない、感じ取る事も出来ない。なら、隠してる可能性が高いな」

その時の司の表情は一言でいったら、『ドスケベ』だった。

「待てケダモノ!!」

神裂が止めに入るが、元々の機敏な動きにエロパワーと言う起爆剤が加わった司は止まらない。

「まゝほゝうゝの言葉はあ、上条さんにやれって言われましたゝ。ポ、ポ、ポ、ポゝンッ！」

歌いながら、アッと言う間もなく、走り去って行った。

「止まれっ、ゲスヤロウ！！」

させるものかと、後を追いかける神裂。

「オレのせいだよー！？」

二人の爆発的脚力に追いつこうと、必死に手足を動かす上条。真夜中の追いかっこが始まった。

一方、上条宅では…

「つかさ大丈夫かな…」

インデックスは司が出て行ってから、部屋の中をグルグルと回り、しきりに時計で時刻を確認していた。

実際、司が出て行ってから時間は、さほど経過していないのだが、今は一分一秒がとても長く感じられる。

（信じなきゃ、つかさと、とうまは無事に帰って来るって）

湧き上がる不安を打ち消しながら待っていると、玄関から待望して

いた声が聞こえてきた。

「ただいまー！！」

自分の家でもないのに帰宅の挨拶を告げる司。インデックスは喜ぶ気持ちを抑えきれず玄関へと駆け出した。

「よう、チビッコ。上条は無事だぜ、もう少しで来る」

顔を見るなり、彼女が一番、喜ぶ報告をする司。インデックスの表情は、まるで花が咲いたように明るくなった。しかし、

「だから、今すぐ全部、脱げー！！！！」

…台無しであった。

「この、変態め！」

カッーッッ！！

ようやく追いついた神裂の奇襲。これを司は足音で察知して後ろを見ずにかわす。

斬撃は上条宅の通路を傷つけたのみ。

「インデックス、部屋に引っ込んでろ！」

司が声を張り上げる。インデックスは、とりあえず先程の司の発言は脳内の片隅に押しのけて指示に従った。

神裂は壁に食い込んだ、自分の愛刀を見て不利を悟る。

「オレが、ガキンチョの裸を見るために全力疾走するかよ！」

不敵な笑みを浮かべる司。この狭い場所では長刀も、ましてワイヤーなどは使用の制限が、かかって役に立たない。

「フツ、しかし刀が使えなくなっただけで私が怯むとでも？」

刀を使用する事を早々に、あきらめて神裂が身構える。

「ケツケツケツ、もうズボンなんかじゃ収まらねえぜ、チチ揉ませろ」

両手をワキワキさせる司、その表情は一言でいったら、『超ドスケベ』だった。

「返り討ちにしてくれる！」

「揉まずに死ねるか！」

今宵、二度目の『聖人』VS『野獣』
果たして軍配はどちらに上がるのか？

その頃、馬鹿騒ぎの抑止力、上条 当麻は…

「ハア、フウ、2人共、足速すぎだろ」

汗だくになり、息を切らしながら夜中の街を駆けていた。

真夏の会話は92%、Y談になる。(後書き)

浴衣も好きです。

ギャグがカレーならシリアスは福神漬け。(前書き)

上条宅の両隣が一般学生だったら、夜逃げする騒がしさ。

ギャグがカレーならシリアスは福神漬け。

「ハア、ハア、よ、ようやく着いた」

エレベーターが使用不可能のため、痛む体に鞭を打ち、階段を駆け上がり自室のフロアにたどり着いた上条。まず彼の目に留まったのは…

「ウ、…ウチのドア!？」

壊され、引き剥がされた玄関のドア。そして開放状態の我が家から、犯人達がハタ迷惑な騒音を撒き散らしている。

「不幸は中か…」

怒りを通り越して、あきらめの境地に達したメ息をつく上条。

ドアの無い玄関を抜けると、ちょうど神裂が仕掛けた隅落としが司に決まった瞬間であった。

背中から床に叩きつけられた司であったが、神裂が追撃を行う前に立ち上がる。動きと表情にダメージは感じられない。

「ケツケツケツ、技が鈍ってきたぜ」

「フン、タフさだけは賞賛しておきましょう」

司が仕掛け、神裂が返す繰り返される攻防は、どちらにも傾かない拮抗した状況になっていた。

「やってる場合かよ！？インデックスは？」

「奥だ。上条、先に行けオレはコイツを揉んでから行く！」

キリツと引き締まった良い表情で宣言する司だが、ワキワキと動かす両手が気色悪い。

「お前も来いつての！」

ズガンツッ！！

司の頭部に上条さんの、ドアを使用した大胆な突っ込みが決まる。

「アンタも何やってんだ？」

「…申し訳ありません…私とした事が…」

バツが悪そうな神裂を見て、それ以上は何も言わず、上条は司の首根っこを掴んだ。

「ここはどこ？ぼくはだれ？」

とぼけた口調で、記憶喪失を演じる司、神裂と違い全く反省していない。

「ここはオレのウチで、お前はバカだ」

そのまま、ズルズルと司を引きずりながら上条は部屋の奥へと進み始めた

インデックスに事の真相を説明するために、しかし…

「インデックス!？」

ベットにもたれかかり、苦悶の表情を浮かべているインデックスを見て、上条は血相を変えた。

司から手を離し、神裂と共に容態を確認める。

「期限は、まだ先のハズなのに…何故!？」

「…食い過ぎとかじゃねえの？」

バコンッ!

ヒョッコリと二人の間から首を出して、覗き込んでいた司のバカ意見を、神裂は顔面に裏拳を叩き込み黙らせる。

「とにかくスタイルに連絡します!」

最悪の場合、消去の術式をインデックスに施さなければならない。神裂は慣れない手付きで携帯電話を操作し始める

「プッフ。名前がひらがなだし」

懲りずに神裂の携帯電話を覗き込み、『すている』の文字を見て司が吹き出した。カッ!となった神裂は司の鼻面に携帯電話を投げつける。

バキッ!

…携帯電話はアッサリと壊れた。
痛々しい沈黙。

上条も神裂も言葉を発せられない。

「あきらめるな！なにか方法があるハズだ！！」

このままでは非難の嵐に、さらされるので一足先に司が逆ギレ気味に叫ぶ

そして瞑想するように目を閉じた。

「こんな時に寝てどうするんですか！？」

「待ってくれ！」

口調を荒げて司を叩き起こそうとした神裂を、上条が制止する。

（長野の常識無視の発想と閃きなら、もしかして…）

一縷の望みを託す上条。2、3秒して司が目を開けた。
果たして結果は？

「…寝て、食べてる所しか見た事ないんで、全く分からないんですけど」

「じゃあ、やるな！」

バチィン！！

神裂が渾身の右ストレートを司に見舞う。

もんどり打って倒れる司上条は2人を無視して必死に思考する。

（考えろ！どこかにあるハズなんだ！）

上条が今まで見聞きした情報の中から、二つのキーワードが思い浮かぶ。

『どこかに隠している可能性』

『食べている所』

（そういえば…オレが初めてインデックスと会った時も…）

上条はここまで考えて、うつすらと噛み後が残る左手を見つめた。

（ひょっとしたら…！）

上条は苦しそうに呻く、インデックスを抱きかかえて、口を無理やり開かせる。

「上条！？何やって…」

「口の中だ！変な印が喉の奥に見える…！」

説明しながら、上条は右手を、『幻想殺し』を印に押し当てる。

次の瞬間、上条は右手に何かを砕いた感覚を持ち得体の知れない力に吹き飛ばされて、壁に激突した。

「うわぁっ！！！！？」

「これは魔術！？」

インデックスは魔術を使用する事が出来ない。そう聞かされていた神裂は、目の前で起こっている現象に思考が追いつかない。しかし、

彼女から感じる魔力と口から紡がれる言語で理解してしまった。

（全て虚言か！）

神裂は騙され、踊らされていた事を知り、悔しさに唇を噛み締める。

「…書庫の保護……迎撃を優先……」

それでも、神裂はインデックスの口から発せられる言葉を聞き、我に返る

（悔やむのは後回しだ。今はやるべき事が他にある！）

神裂は即座に思考を切り替えて、インデックスの術式を見極めようと目を凝らし…

「テレビ弁償しやがれ！」

空気を読まないバカの声に邪魔された。

インデックスも無表情でブツブツと呟き続けているが、頬に一筋の汗が走る。

「聞こえてんじゃねえか無視すんな」

「警告…言い掛かりをつけてきた罪人を確認…証拠隠滅…誰が弁償するかバカ…」

黒過ぎる発言を連発して、魔力の濃度をどんどん高めていくインデックス

その様子を見て司は文句を言う相手を神裂に変更する。

「あのガキにどんな教育しやがった！？魔道書、覚えさす前に常識を教えとけ！」

「あなたが言わないで下さい！！」

誰もが激しく同意するであろう神裂の正論…だが、その中に長野司は含まれていない。

「うるせー！だいたいテメエら個性あり過ぎなんだよ『秘匿』とか言って隠す気0じゃねえか！」

「…禁句と問題発言を確認…バカを特級危険人物と認識…」

インデックスの眩きと共に、空間に魔法陣が形成されていく。

「せ、聖ジョージの聖域！？」

その正体と恐ろしさを知っている神裂は司に逃げるよう指示しようとするが、それよりも早く圧倒的破壊力を宿した光の柱が司に放たれた。

「ちよっ…おま、コレは反則…」

逃げる術も、防ぐ術も、持たない司に出来た事は間抜けな遺言を残す事のみ。しかし…その『死』を認められない者が、己が右手で光を食い止める

シュイインッッ！！！！

気を少しでも抜けば消し飛ばされそうな光の衝撃それを五臓六腑で
感じ取りながら、心に宿った激情のままに、上条当麻は叫んだ。

「ふざけてんじゃねえぞ！くそつたれえ！！」

ギャグがカレーならシリアスは福神漬け。
(後書き)

次回は福神漬け単品で。

満席のカレー屋には、福神漬を食べに来てる客がいる。(前書き)

店長 「なんでウチの店は客、こねえんだよ？」

バイト 「カレー屋なのに福神漬しか、ないからじゃないっすか？」

満席のカレー屋には、福神漬を食べに来てる客がいる。

光の激流は、上条の右手が少しでもズレたら、上条の事を飲み込んで、この世から消し尽くしてしまうだろう。

『竜王の殺息』

今、上条の右手には伝説のドラゴンが繰り出す攻撃が、絶え間なく襲っていた。

「…うううつつ！！」

その威力を誰よりも理解しながら、弾かれそうになる右手を左手で懸命に押さえ込み、上条はインデックスへと歩み始めた

（くやしいよな…好き勝手に体を使われて、記憶を消されて仲間も忘れちまうなんて…）

上条は神裂に、その話を聞いて、両親の事を思い出した。幼い頃に周りの人間は自分を害毒の様に扱った。

その中で両親は自分を大切に思ってくれた。

生まれた事を誇ってくれた。

（認めてくれる人がいるから、胸を張れるんだ）

生きてても良いんだと、誰かに肯定されて初めて人は生きられる。

（インデックス…お前はそんな事も忘れちまうんだろ？）

それはどれ程の孤独なのか？それでも人を大切に出来る彼女を、狂った『現実』から必ず救い出す

（そうだ、今回だけは、テメエが敵だ！）

インデックスを弄ぶ者。人としての尊敬など踏み蹴散らし、有効利用できる機能として扱う者。

それは世界にカタチを変えて無限に存在する、強者の遊びが弱者の嘆きとなる『現実』

襲い来る光の恐怖は、何度も自分の体が焼き尽くされたと錯覚してしまう

歩もうとする足の速度は本当に進んでいるのか？と自分で思う程に遅い。

上条だって死ぬ事は怖い、逃げ出したい　と考える自分もいる事は否定できない。

だが、自分が逃げて司が死んだら？

インデックスが司を殺した事を悔やんで絶望したら？

そして、その事さえ忘れさせられて、操り人形として生かされたら？

（認めてたまるかよ！そんな『現実』はオレがぶっ壊す！！）

その願いが上条を突き動かす。誰も救われぬ結末を覆すために。

だが…運命は常に希望を嘲笑う。

（駄目だ…このままでは、あの少年がもたない）

必死の形相で光を受け止める上条を見て、神裂は冷徹に結論を出した。

上条の右手は確かに凄まじい。『竜王の殺息』を打ち消し続けている、あの右手には魔術では対抗する事が出来ないだろう

だが、それは右手に限った話。

例えるならば今の上条は、荒れ狂う豪雨の中、飛ばされない様に精一杯の力で傘を押さえ込んでいるだけだ。

右手は無傷でも、他の部分は『竜王の殺息』の影響を必ず受ける。

確実にどこかが壊されて、最悪の場合、右手だけ残して死ぬだろう。

（くそっ！どうすれば二人を助ける事が出来る？…）

不意に光景が思い浮かぶ、インデックスを救おうとしている上条を、インデックス本人が殺す。

神裂の脳裏をよぎった結末。それは吐き気がする程おぞましいものだった。

（そんな事が許されるものか！何を考えているんだ私は…）

神裂が自分の思考に嫌悪していると、司が妙な声を出した。

「…かえ…おうあ…があ…」

神裂は司が例によって、ふざけていると思い逆上した。

「キサマ…！い…？…！！！」

しかし、司の姿を見て神裂は驚愕のあまり、言葉を失った。

司の両手両足の指は歪な形に折れ曲がっていた。

体中に切り刻まれた様な傷が出来て、血が滴り落ちている。

痛覚が通常の何倍にも膨れ上がり、痛むと言うよりも、何度も殺されているといった感覚が脳内に連続再生される。

(…オレの願いが、そんなに気に入らないのかよ?)

司は上条が自分を庇った直後に、今まで思い付きもしなかった事を考えて『刹那』を使用した。

その後だ…すぐに発動するハズの能力が発動せず、代わりに想像もしなかった苦痛が司を襲ったのは。

(『刹那』を使うと痛みが半端ないけど、これはケタ違いだ…)

司を蝕んでいる苦痛の正体は、能力が出している警告だ。

この使い方は、まだ早い。

使えば、この肉体は壊れてしまう。

そう痛みを通して、司に訴えている。

いくら司が馬鹿でも、分かるはずだ。

…だが、昔から言われている事だが…

(ふざけんな! 売られた喧嘩を邪魔されて、誰が大人しくしてるかよ!…!)

馬鹿は死ななきゃ治らない。

「ゴネてないで、とっとと仕事しやがれ!…」

そう吼えてから傷まみれの腕で、司は思いつ切り自分の胸を叩いた。

「~~~~~!!!!!!!!!!!!」

言葉などでは言い表せない激痛が、司の体を駆け巡る。

そして能力が発動する。完成を待たずに『宿主』に無理やり引きずり出されたソレは、望まぬ形で世界に具現化した。

そして結末が訪れる。

上条に『竜王の殺息』を放っていたインデックスは突然、倒れた。その時に部屋の天井とベランダの屋根の繋ぎ目、辺りに圧倒的破壊を行使した。光はそのまま雲を蹴散らし、天を突き破った。

「…やれば…出来るじゃ…ねえか…」

司は途切れ途切れに呟いて膝を屈して、崩れ落ちる。

「インデックス!!」

倒れたインデックスに駆け寄る上条。しかし、危険だ。この後に『光の羽』が無数に落ちてくる。

（アレは触れただけで、物理的な死を与えるハズ…）

上条を止めようと動こうとするが、違和感を覚えて神裂はズタズタの天井を見上げた。

羽は一枚たりとも落ちてくる事はなかった。

（何故だ!?!）

神裂が疑問に思っていると、上条の怒鳴り声が響いた。

「早くインデックスを診てやってくれ!」

その言葉で神裂は我に返った。インデックスのもとに駆け寄り容態

を確かめる。

「絶対とは言えませんが、大丈夫だと思います」

なんとも頼りない言葉だが、それは神裂の慎重過ぎる性格ゆえ、インデックスは確実に助かるだろう。

「良かった…じゃあインデックスを頼む！」

穏やかな寝息を立てるインデックスを神裂に託し、上条は司に駆け寄ったそして生きているとは、とても思えないその姿を見て、死と言う言葉が脳裏をよぎる。

「…ウソだろ…長野！オイ、長野！！」

強く揺さぶる事も出来ず、上条は司の耳元で大声を張り上げる。すると、司が弱々しく何かを呟いた。

「！？…分かった約束する。もう喋らなくていい！すぐに救急車を呼ぶから」

司のズボンから携帯電話を探り当て、上条は『病院』にコールした。

（恐らく彼も助かるだろう）

インデックスを抱きかかえながら、神裂は確信していた。それと同じに腹の底から、ある衝動が沸き起こった。

（バカな、何故だ！？）

それは我が身を犠牲にする様なカタチで、人を救った人に対して思

うような事ではない。

しかし、倒れたまま動かない司を見る内に衝動は段々と強くなっていった

（どうかしている！何故、私は！？）

とうとう、神裂は司の姿を見ている事が出来なくなり、目を背けた。そして、衝動を抑えるように、インデックスを強く抱き締めた。

…3日後、とある空港。

様々な人種が行き交う中でも、ステイルと神裂はひととき目立つ。これから、ステイルはイギリスへ帰国して、神裂に聞かされた、インデックスに対しての仕打ちについて、アークビショップを聞いたですつもりだ

一方、神裂はロシアへ、こちらは私用でなく仕事だ。ロシア成教内の過激派が不穏な動きを見せているため監視を、状況次第で戦闘もあり得るだろう。

「それじゃあ、神裂。任務の成功を祈ってる…まあ今回の仕事に大物は関与していないだろうから、心配いらないだろうけどね」

「ありがとうございますあなたにも成功の祈りを…相手が相手ですから」

神裂の言葉にステイルは顔をしかめる。確かに簡単にいく人物ではない。

「何とかやってみるさ。それにしても上条当麻には感謝しないとい

けないな…もう一人のバカは万死にあたいするがね」

一瞬、憤怒の表情を見せるスタイル。

神裂は仲間に嘘をついた事に、少し良心が痛んだ

「そろそろ、搭乗手続きの時間だから僕は行くよ」

「はい、それではまたいつか」

簡潔、過ぎる別れを済ませて神裂はベンチに腰掛ける。思い出すのは、あの晩の事だ。

その後、5分もせずに救急隊が上条宅に到着。司の姿を一目見た女性隊長は、思わず神裂が身構える程の怒気を放ち、3分とかからず病院に 司を搬送した。すぐさま、手術室に 運ばれて2時間後にカエル面の医者が手術の成功を上条に告げた。

安堵のあまりに、座っていたソファからズレ落ちる上条。そして対面のソファで神裂にもたれて寝ているインデックスを見て、長野との約束だと前置きして神裂に2つの事を頼んだ。

「インデックスを助けたのはオレだって事にしてくれ。長野はインデックスを殴ろうとして、返り討ちにあっ たって事にしてほしいんだ」

神裂は一瞬、何を言われたかも分からなかった。だが次の上条の言葉で全て納得できた。

「長野はインデックスを悲しませたくないんだ」

自分を助けるために司が傷ついたと知れば、心優しい彼女がどれほど心を痛めるか、それは神裂にも容易に想像できた。

だから神裂は頼みを聞き入れた。

この嘘は墓の下まで持っていくと。

「自身の事よりも他人… あきれるくらいの善人ですね」

上条に神裂が、そう言つと上条は誇らしげに、こう返してきた。

「アイツは尊敬すべきバカヤロウなんだ」

クスツと、神裂は上条の言葉を思い出して笑う、全く酷い誉め言葉だ。

だが、それは神裂が敬愛する人間の在り方の一つだった。

…しかし、

（そんな人物に対して、何故、私は殺さなくてはいけないと思つてしまつたんだ？）

暗い気持ちで神裂は自問する。初めて会つた時から感じていた。この少年は何か違和感があると、そして二人を救い、倒れた姿は、まるで…

想像の中でしか存在出来ない悪魔に見えた。

そう感じてから神裂は、自分の中の殺意を必死に抑えた。

手術が終わる頃には衝動がなくなっていたが、神裂は司の姿を見る事が出来なかった。

（一体、どういう事だ？ 私の親友を、勇敢な少年を救つた救世主が、どうして悪だと思つてしまつたんだ？）

神裂は、あの晩から心に刻まれた疑問を、時間が来るまで考えた。

しかし、疑問は解ける事なく、楔のごとく打ち込まれたまま、神裂は生まれた国を後にした。

満席のカレー屋には、福神漬を食べに来てる客がいる。(後書き)

バイト 「店長、。ンカレーは売り切れでした」

店長 「…閉店するか…」

子供の時に感動した事は働く時の原動力（過去）（前書き）

昔の夢、

「キング・ドラ」

子供の時に感動した事は働く時の原動力（過去）

〳〵とある昔話〳〵

一人の少年が、ある日に父親に問われた。

「お父さんとお母さんと一緒に死ぬのと、一人で生きるのと、どっちがいい？」

当たり前だが少年は死んだ事がなかった。だが、とても痛そうだったから生きたいと父親に返答した。

翌日、学園都市に一人の少年が父親に連れられてやってきた。

自ら望んで『置き去り』になるために。

少年はある研究所で暮らす事になった。非公式の能力開発実験の被験者として、だが少年の異常体質は研究所の職員達を激しく落胆させる。

まず、脳内に電気刺激を与え、AIM拡散力場を発生させる実験で少年は仮死状態になった。刺激が強すぎたワケではなく突然に、そして研究員が慌てて実験を中断すると、何事もなかった様に蘇生した。

薬物投与の実験でも同じ様な結果になる。服用させれば嘔吐して受け付けない。注射しても、ほとんどの成分が血液中のカルシウムで構成された膜に包まれて、体内に吸収されないまま注射針の刺し傷から、微量の血液と共に排出されてしまう。そして、わずかに残った薬物も発汗と排泄により、完全に体外へと捨て去られた。

ある研究員が言った。

「この少年は『原石』ではないのか？能力がすでに完成されているため、体に負担が、かかるだけの実験に拒否反応を起こしているんじゃないか？」

しかし、この意見は即座に否定された。

少年が施設に来た時に身体検査は済ませてある。さらに精密機器を使用して行った測定実験で、AIM拡散力場を測定する事が出来なかったから。

実験内容は駆動鎧を着込んだ職員との戦闘。少年は抵抗するが、一方的に痛めつけられて実験終了

…余談だが、この時に少年は自身の筋組織をズタズタにしてしまい、1ヶ月間ベットの从上から動けなかった。

殺されると思って火事場の馬鹿力を発揮したのだろう。それでも駆動鎧に傷一つ付けられなかったので、職員達は気にも留めなかった。それより1ヶ月後には動けるまで回復した少年の生命力に研究心をくすぐられた。

さまざまな実験が失敗に終わり、研究員達は、この少年を能力開発の被験者から、死亡する事を前提とする実験動物に格下げする事を決めた。

理由は少年の拒否反応の原因と、人体の限界を超えた回復力と生命力の秘密を探りたいという研究者としての知的好奇心。

…というのは建前で、本音は多大な資金と労力と時間を無駄にした腹いせだ。

だが研究員達は逆に、はらわたが煮えくり返る思いを味わう事にな

る、少年の対応を話し合っている最中に少年が施設を脱走したのだ。すぐに職員総出で捜索にあたるが、少年は見つからなかった。

そして、2週間が経過した。少年を捕まえられず、万が一を考えて研究所を他の場所に移そうと準備を進めていた時に、研究所の全職員及び、数名の被験者の子供達は何者かの襲撃を受けて、皆殺しにされる。

事件現場の惨状を目にしたアンチスキルは、

「あの場所は、まるで作業所だった。被害者たちは実に無駄なく、迅速に殺害されただろうな」と後日、同僚に話したという。

3日後に、犯行を行ったのは自分達だと数十名のスキルアウトが出頭。

犯人は別にいると騒ぐアンチスキルが数名いたが、意見は通らず。マスコミの報道も事件が発覚した当日と、犯人達が出頭した日に一度ずつ、テレビでキャスターが簡潔に喋り、情報誌の紙面の片隅に小さく載っただけで、それっきり話題になる事はなかった。

それでも真相を暴こうとする者達もいたが、ある日を境に一切、事件について話さなくなった。

事件について聞かれると、皆一様に顔を青ざめさせて、口を開く事すらしなかった。

真実は握り潰され、嘘で固められた現実だけが、人々の記憶にうつすらと刻まれた。

――とある昔話―― 終。

子供の時に感動した事は働く時の原動力（過去）（後書き）

現在の夢、

「ドイツでビール祭り」

笑わせるのは難しいが、笑うのは意外と簡単（前書き）

冥土歸しの本名はファウスト希望。

笑わせるのは難しいが、笑うのは意外と簡単

第七学区の病院、233号室。

4日ぶりに意識を取り戻した司は、絶対安静の状態で冥土帰しと会話をしていた。

「ふむ…今回は僕も覚悟してたんだけどね？」

そう言つて死亡診断書を司に見せる。

「そんなにオレが生きてんのが、気に入らねえのか!!」

「…回復を祝福するDrジョークなんだけど…外したかね？」

心外そうに冥土帰しが尋ねるが、司は大声の反動で体中に痛みが走り悶絶していたので、答えられない。

「大げさだな…それとも迫真の演技かい？」

「あ…アホか…こんなの演技で出来たら…ハリウッド行けぜ」

「なんだ、つまらない」冥土帰しは司から目を離し、カルテをめくる。

（術後の経過が、中学生の妄想日記になつて…）

そこに書かれていたのは、常人なら30回は死んでる状態で運ばれた患者が、4日後に常人でも全治3ヶ月の状態まで回復している過程であった。

「司、君はその内、ヒューマン・アウト（妖怪）になるんじゃないかい？」

「誰が、ダメ人間だ！？」

司のカルテを見ながら言った二度目のDrジョークだったのだが、
またもや不発。司を悶絶させたただだった。

「僕はユーモアのセンスが足りないみたいだね？」

「大人しく医者だけやとけ！」

「じゃあ、そうしよう。今回の原因は君の能力が暴走したせいだと僕は思ってたが…聞かせてほしいんだ。4日前に何をしたんだい？」

冥土帰しは備え付けの椅子に腰掛けて問い掛けた

司は口をへの字に結び、視線を逸らす。

その態度は何かを隠している事が明白だ。

そして冥土帰しは、その隠し事を即座に看破してタメ息をついた。

「忘れちゃったんだね？」

ギクリッ！

…そんな擬音が聞こえてくるぐらい司は動揺して、冷や汗がタラタラと流れ出す。

「イヤダナア、オボエテマスヨ」

「口調がカクカクしてるけど？」

「覚えてるって！…え〜っと…タマネギをバターで大量に炒めて、出て来た水分だけを使うのがコツだから…」

「カレー作って、どうすんの？」

冥土歸しの突っ込みに司は、しばし眉間にシワを寄せていたが、何かを思いつき顔を輝かせた。

「一時的な記憶喪失とかじゃ…」

「君は永久の馬鹿でしょ」

この突っ込みが止めとなり司は「どうせ、オレなんて…」と、愚痴り始めた。

（能力の使用制限が無意識に定まったのかな？）

冥土歸しは、そう分析したが司には言わずに、別の話に切り替える。

「まあまあ、僕の直筆の死亡診断書を上げるから…スゴイよ、世界で一枚の品だ」

「いらねえよ、そんな不吉なレア物！捨てとけ！！」

三度目のDrジョークも不発に終わり、司が声を張り上げた時に病室のドアが開いた。

「お邪魔します」

入って来たのは上条とインデックスだった。上条は綺麗にラッピン
グされた菓子箱を抱えていた。

「僕が連絡しといたんだ」

そう司に告げ、上条達に軽く挨拶をして、場所を空ける冥土歸し。
一歩下がった所で、談笑している司を見ながら昔を思い出す。

一人だけ生き残った欠陥品などと噂され、治療を施した自分にも殺
意を剥き出しにしてきた少年の事を…

（あれから四年か…同一人物とは思えないな）

冥土歸しには、ある思惑があつた。だが自分で話してみても、嬉しそ
うな司をみて、それが不用な事だと気づいた…今回、司の怪我は本
当に酷いモノだった。その痛みが古傷と 余計な記憶まで呼び覚ま
してしまうのではないかと不安になる程に。

（必要なかったな）

冥土歸しが病室を出ようとすると、後ろから肩を叩かれた。

「これどうぞ」

振り向くと上条が、ビニール袋に包まれたクッキーを数個、差し出
してきた。

「お見舞い品かい？今日は無理だけど、2、3日したら食べれ…」

「いいから、もらっとけて」

ベットから口元を嬉しそうに、ニヤつかせながら司が目線を冥土歸しに向ける。

「心配してくれた、お礼ですよ」

「…何の事かな」

「おかげさまで丈夫に育ってます。って話ですよ」

ニヤける司の顔を見ながら、本日、二度目のタメ息をつく冥土歸し。

「そういうのは自分でやるものだと思うがね…上条君、ありがとう」

司でなく上条に、お礼を言って、今度こそ出て行く冥土歸し。

「ケツケツケ、先生！あのネタは、つまんねーからやんない方がいいよ！イテエ」

またしても自分の大声による痛みで、悶絶する司。冥土歸しは、かまわずドアを閉めた。

（ヤレヤレ、心配するのもバカバカしい）

冥土歸しはポケットにクッキーを詰め込み、通路を歩き始める。

（しかし…僕のジョークは、そんなに、つまらないかね？）

冥土歸しは納得がいかに、残りの休憩時間をジョーク研究に使用するため、早足で自室に急ぐのだった。

笑わせるのは難しいが、笑うのは意外と簡単（後書き）

嫁さんは、えーりん！
新婚旅行は月面！！

カッコイとは、どついつ事だ？（前書き）

ミザリイ見てえ。

カッコイイとは、どういう事だ？

病室から恩人が退出して司は、ある事に気付いた

（やけに大人しいな？）

気になったのはインデックス。

入室してから一言も話さず、うつむいていてフードのせいで顔も見えない

（まさか、バレたか！？）

司はインデックスの元気の無さが、自分を傷つけた後悔からくるモノだと考えて、上条に確かめる様な視線を送る。

上条はインデックスの斜め後ろで両手を合わせて、ひたすら頭を下げていた。

（やっぱり、そうか！）

司はバレた事を確信したのだが…

「つかさは私の事を撲殺しようと、したんだってね」

本日、初めて聞いたインデックスの並々ならぬ怒りがこもった言葉に頭を混乱させた。

「…はい？？」

上条の謝罪する動きが、ヘッドバンキングの様な激しさに変わる。

…あの晩、司の頼みを聞き入れた神裂から一つ注文が出た。

「殴られそうになっただけでは理由として弱いのでは、ないでしょうか？」

確かに一理ある意見だ。常人なら死んでないのがオカシイ重傷を負わせて病院送りにしたのだから

「そりゃあ、そうか…どうしよう？」

上条は頭を抱えて苦悩した。

そこへ神裂が慈愛に満ちた穏やかな笑顔で申し出る。

「私に任せて下さい、あの子を悲しませたくないという彼の心意気はムダにしません」

その笑顔を信じて上条は、神裂に全てを任せた。
返事を聞いて神裂は後ろを向き先程、上条に見せた笑顔と正反対の
笑顔を浮かべた。

そういった過程を経て、

監督・脚本・語り手、神裂火織による『長野司極悪人説話』
がインデックスの脳内に刷り込まれたのだった。

その時の神裂の演技力と説得力は凄まじく、

（アンタの個人的な怨みが満ち満ちてんですけど！？）

と、説教人・上条当麻を畏怖させ、一言すら口を挟ませなかったほどだった。その結果…

「かおりが泣いて『やめて！』って言ったのに『事故で済ませばいいんだよ！』って金属バットで私の頭蓋骨を粉碎しようとしたんだってね！！」

（オイ！！どんだけオレに悪意あんだよ！？）

上条の謝罪動作はヘッドバンキングから、莫大な借金を返済できなくなった負債者の動きに変化していた。

（上条じゃなくて犯人はあの女か！）

司の脳裏に神裂の豊満なバストがよぎる。

「つかさっ！なんか言うことがあってもいいんじゃないかな！！」

両目を吊り上げ、鼻息を荒くして、今にも飛びかからんばかりの勢いでインデックスが司に詰め寄る。

（どないせえっちゅうねん！？）

2択であつた。

本当の事を話してインデックスを悲しませるか。

嘘を突き通してインデックスの怒りを、満身創痍の体で受け止めるか。

司が選択したのは…

「ガタガタうるせー。生きてんなら文句言つな！」

（長野…お前ってヤツは！！）

真実を知る上条は、謝罪を止めて拳を震わせながら司の嘘に感動したが…

「つかさの、う。こたれ〜!!」

ガコンッ!

真実を知らない、インデックスは司の嘘に激怒して椅子を憎らしい顔面に投げつける。

本来なら屁でもない一撃だったが、今の司には致命傷に成りうる一撃!

司は白目を剥いてアワを吐き、痙攣して数滴ほど失禁した。

「長野オオオ!!死ぬなアア!!!」

上条が絶叫する。

そして、まだ怒りが収まらないインデックスは憤怒を食欲に変えてクッキーを瞬く間に食い尽くす

「テ…テメエ…退院…したら、か…かく…」

三途の川を渡る寸前で、奇跡的に意識を 取り戻した司は、息も絶え絶えながら仕返し宣言をする
それを宣戦布告と捉えたインデックスは、

「じゃあ、早く退院できるように指圧してあげるね」

そう言って、にこやかに司の体をつつきだした

「ミギヤアアア！！！」

小さな指で自販機のボタンを押す程度の衝撃を司に与えるインデックス。

しかし、司の体には稲妻が駆け巡る様な激痛が走っていた。さらに痛みに耐えかねて激しく身をよじれば、それが、さらなる痛みを生み出す悪循環

「つかさ、まいったするなら許してあげるかも」

インデックスが敗北宣言を要求してくるが、司は痛みに震える指で懸命に中指を、おっ立てた。

ツンツンツンツンツンツンツン！！！！

インデックスのターン！

ツンツンコンボ発動！！

司は多分死ぬ！！！！

「インデックス！ぶれいく！本当に死ぬ！」

ここで、ようやく上条レフェリーが両者を分ける

「…ちよっ…おせえ…」

瀕死の司はクレームを付けたが、暴れるインデックスを抑えている上条はそれどころではない。

「離してよ、とうま！コーラを吐き出すまでやめないんだから！！」

「出るわけねえだろうが！！コーラ飲みたいなら買ってきていいか

ら」

ピタリ…

その言葉でジタバタと上条の、腕の中でもがいていたインデックスが暴れるのを止める。

「…私を買ってきていいの？」

「ああ、全然かまわないぜ。むしろ上条さんがお願いします」

手を離して、500円硬貨を渡す上条。

それを宝物の様に大切に握りしめるインデックス

「とうま待つててね、すぐ買ってくるから！」

先程の剣幕はどこへやら、鼻歌を歌いながら上機嫌で病室を出て行くとするインデックスだが…

「…へたくそ…耳が腐る」

司の悪口が彼女の耳に入る。

「バカ長野！インデックスおさえてくれ！」

慌てる上条だが、インデックスは笑顔を崩していない。さらに信じられない事に、

「つかさ、さっきはゴメンナサイ。私がジュース飲ませて上げるね」

そう言いながらペコリと、頭まで下げてきたのだ
これには逆に司が対応に困る。

「いや…その…」

司が口ごもっている顔を上げて、変わらぬ笑顔でインデックスが
言った。

「鼻の穴からね」

この発言に本気を感じ取り、危機感を覚えた司は脅しにかかる。

「上等じゃねえか、退院したら尻に爆竹を突っ込んでやるからな」

しかし、この脅しにもインデックスは全く動じず笑顔を絶やさない。
そして無言で背を向けて、病室を出て行こうとするが、その時にポ
ツリと言った一言が司に恐怖を与えた。

「退院出来ると本気で思ってる？」

パタンッ

ドアは静かに閉められた

「オオオオオ！黒過ぎんだろ！？あんなにも白いのに…！」

英国限定。白いシスター・ブラック降臨！

「長野、落ち着け。体にさわるぞ」

「うるせー！もう明らかに、お前らが見舞いに来る前よりボロボロだろうが！」

「…もう本当の事を話した方が…」

「ふざけんな！殺られる前に殺つてやるぜ！」

目的と方法が入れ替わるどころか、新たな目的を見出して、殺意をみなぎらせる司。その様子を見て上条は首をひねる。

「どうしてこうなった？」

カッコイとは、どういう事だ？（後書き）

病院にシスターは、まずい気が…

病は気から、成功は反骨精神から。（前書き）

M・ナ。ト・シャ。ランの映画予告は、面白そう

病は氣から、成功は反骨精神から。

目の前で元氣一杯に死んだふりをしている司を見ながら、上条は後悔していた。

（ちくしょう！少しでも心配して損した）

先程、インデックスが病室から出た後に、

「あのガキ相手に、奥義を使うとは…」

そう言つて、インデックスを騙し討ちするために司は死体を装った。だが、目蓋はピクピクしてる上、鼻息は荒く、口元は成功を確信しているのかニヤついている。

（お前みたいな死体がいるか！）

上条は内心、そう思ったが突つ込めずにいた。今の司は生気がみなぎっているので、水を差す事はないと感じたのだ。

（インデックスとの小競り合いで、ボロ雑巾みたいにされたのに、バカな事を思いついた途端に活性化するんだもんな）

ここまで来ると、治療しなくても昔の電化製品のように叩けば治るのではないかと、疑ってしまう。

「おいおい、上条さん。さっきから喋らないけど、本当に死んだと思っただか？」

呆れて沈黙していたのを自分勝手に解釈して、死体が話しかけてきた。

賞賛の声を期待してるのが見え見えで、うっとおしい。

「そうだな…ラジー賞も総ナメだろうな」

上条は司が絶対に知らない事を確信しながら、投げやりに返答した。
『賞』と言う言葉に興奮し、さらに鼻息を荒くして、鼻汁を飛ばす汚い死体。

「…その紳士な、お兄さん拭いていただけないかしら？」

「いいぜ、雑巾どこだ？」

ヨゴレのくせに綺麗好きの死体と他愛ない会話をしていると通路から、けたたましい足音と共に言い争う声が聞こえてきた。

「まちなさ〜い！自販機弁償しろ〜！！」

「私は悪くないんだもん！アイツが、お金食べちゃったから、蹴飛ばしたただけだも〜ん！！」

ドタタタタツツ〜！！！！！！

足音と怒鳴り声が、ドップラー効果で低音になりながら、遠ざかっていった。

上条は全く不謹慎なヤツらだと、世間のモラルの低下を嘆いた。

（どこに生死の境目を、さ迷ってる患者さんが、いるかも知れない

のに何を考えてんだ！……しかし、今の声は、大食らいの居候に酷似していたような…）

「そう言えば奥さんは機械クラッシャーでしたね？」

「どうせ上条さんは、不幸だよー！」

死体の言葉を駆け出す合図にして、先程の騒音に負けず劣らず、やかましく病室を出て行く上条。

「ケツケツケツ、愛情まっしぐら」

誰もいなくなった病室で死体が嬉しそうに笑っていた。

それから数分間、2人が戻って来なかったので、司は睡魔と死闘を演じる事になった。

「寝てはイカン、勝負は一瞬、…グウウ…ヤツがオレの死に顔を看取ろうとした…クカア…カ…ウ…ン…スヤ…」

ボタンッ

後、ほんの数秒で司の不戦敗だったのだが2人が戻ってきてしまった。

（ケツケツケツ、運の悪いガキだぜ！）

薄目を開けて様子を確認しようとする司だが…

（！？）

思わず、目を見開いてしまった。

「とうまゝ…頭が割れそうなんだよ」

「…オレはもう割れてるかも知れない」

上条は壁に手をあてながら這うようにして、病室に入ってきた、その様子は目に見えて衰弱している。一方のインデックスはしきりに頭をさすりながら、目に涙を溜めていた。

司は我を忘れて起き上がる。

「テメエら、だいじょ…ウギヤアア！！！！」

ドタ〜ン！ブチュウツツ〜！！

だが体は正確に激痛のシグナルを発して、自由を許さない。司はベッドの上から落下して床と熱烈な接吻をかます。

「だ…大丈夫か…テメ…エ…ラ…」

ガクウウウン！！

そう言い残して力尽きる司。

「お前が言うな！」

「つかさ、シツカリするんだよ！」

取り乱す2人の声にも司はピクリともしない。

…もしも、これが演技だったならオスカーも狙える見事な死体ぶりであつた。

それから、5分後…

「長野、やっぱり先生を呼んだ方が…」

「うるせー、そしてイテエ！こんなんで呼び出した事がバレたら、お前らの二の舞だつての」

あれから本当の死体になる前に司は、かろうじて復活。2人に手伝つてもらい、ベッドに帰還して事情を聞いたのだが…

「逃げ回つてた所を通りすがった村野さんに捕まってゲンコツもらつただあ？ 鼻肩だ！オレなら確実に頭蓋骨陥没コースだぞ！！」

「それをオレに言われてもなあ…」

さすがの司も、相当恥ずかしかったらしく若干、顔を赤らめていた。

（クソツタレ！これじゃあ、ますますガキンチョが調子に乗っちゃう）

しかし、予想外な事にインデックスは心配そうに、司の顔を覗き込み…

「大丈夫？」

と、優しく司のオデコを撫でた。少し前とは180度違う態度に困惑した司は目線を泳がせる。その目には状況を察して、微笑んでい

る上条の顔が映った。

（こいつらもしかして…）

なごやかな雰囲気を、醸し出す2人を見て司は一つの答えを、導き出したが…

（グルになって、オレを騙そうとしてやがる！）

正解にカスリもしない珍解答であった。

病は気から、成功は反骨精神から。（後書き）

次回で退院予定。

長生きの秘訣はジジイとケンカする事だってババアが言ってた（前書き）

退院どころか、霊安室に移されそうです。

長生きの秘訣はジジイとケンカする事だってババアが言ってた

インデックスが態度を変えた理由は『百聞は一見にしかず』この言葉が最も当てはまる。

自分達を心配してベッドから落下した姿を見て、インデックスは司が嘘をついていると悟り、自分の事を気遣っていると思ったのだ。今までの事を謝りたかったが、それを司が望んでいるとは思えないならば、謝罪でなく感謝を示そう。

彼女は、そう考えたのだ

それは誰が見ても気付く、一目瞭然の感情の変化、鈍感だと常に周囲から言われている上条でさえ、すぐに理解できたのだが…

「何を企んでやる？」

警戒心を隠そうとせず、疑り深い視線をインデックスに向ける司。流石のKYぶりである。加えて先程まで騙し討ちを企てていたので、勝手に疑心暗鬼に陥っている

天晴れな墓穴掘り名人！

馬鹿の一人無敵艦隊が、本領を惜しみなく発揮していた！！
しかし、今のインデックスの心は慈愛に満ち溢れているので、司のひねた態度にも気持ち荒む事はない。

「私はつかさに非道いことしたもんね、信じられないのは当然だよ…」

穏やかだが人の芯に届く声で、インデックスは偽らざる本心を司に伝える

「でもね、つかさに早く元気になってもらいたい今、私が考えてる

のは、それだけなんだよ」

インデックスの訴えを聞いて司は、眉間にシワを寄せて苦虫を噛み潰した様な表情になった。

「つまり、上条が差し出す食糧だけでは満腹にならないから、オレの食糧も寄越せ！…そう言う事か？」

どういった解釈をすれば、その結論に辿り着くのか？
司の言葉で、インデックスの心に小さなイラ立ちが生まれる。

「長野、スレた受け止め方しないで素直な気持ちで…」

「だから、この頭の中から爪先まで胃袋の、チビ娘が言った事を鵜呑みすれば、そう言う事だろ？」

上条のフォローも効果なし。さらにインデックスのイライラは度合いを増していく。

（まずい！このままだと…）

またインデックスが暴れ出す。そう、上条は確信したが、インデックスは怒りに染まる己の心を殺し、目を閉じて神に祈る様に胸の前で両手を組んでいた

「つかさ、天にまします我らが父に誓って、私は真実だけを口にするよ…信じて」

そしてインデックスは目を開き、司の顔を見つめた。
人の心を揺さぶるのは千の理屈でなく、真摯な態度で紡がれる愛情

が込められた一言。

その言葉に疑いを持つ事すら、罪深く感じてしまう聖職者の真言。それを聞いた司は…

「鼻からジューズ飲めたら信用してやる」

と、手が動いたならば鼻クソをほじっていたであろう、不真面目さで返答する。

その憎たらしさはインデックスをシスターから、噛みつき堕天使ガブリ！エルに昇格させた。

「じょーとうなんだよ、つかさ」

ユラリとした動きで、イスから立ち上がるインデックス、彼女の心から司に対しての負い目は綺麗サッパリ消え去っていた

「長野…お前は どうして そう長野なんだ？」

上条は、もう止める気も起きない。2人の邪魔にならないよう距離を置く

そして、司は動けない体で不敵に笑う。

「ケツケツケツ、ようやく本性を出しやがったな！素人は騙せても、百戦錬磨のオレは欺けねえぜ！」

最初から最後まで勘違いして、煽るだけ煽って相手を激怒させ、してやったりと喜んでいる。

この救いがたい友人に、上条は声をかけてやる事も出来ない。

その代わり胸中で絶叫していた。

(何もいえねえええええ！！！！！)

勝負が始まった。

勢い良く飛びかかるインデックス。必殺のジャンピング　ガブリ！
で早々に決着をつけにきた。

しかし、それを司は待っていたのだ。

（喰らえ！ 刹那頭突き！！）

首の筋力が限界を超越する。弾丸のような頭突きが、司の脳天に嘯みつこうとしていたインデックスを弾き飛ばす！

ハズだった。通常の状態ならば。

ビキイン!!!

司の頭が動いた距離は、わずか2？。

限界ギリギリの肉体では、これが目一杯。それでも能力使用の反動は激痛になって、キツチリと返ってくる。薄らぐ意識、何度目かの臨死体験ツアーに司が旅立とうとしたが、

ガブリッ！ガジガジガジガジガジガジ……

「イテエエエ!!?」

強烈な噛みつきが司を現世に踏みとどまらせる。と同時にインデックスが第2の必殺技、連続噛み『今日のオヤツはウマとシカ』を繰り出した。

「はいつ、そこまで。勝者インデックス！」

宣言して上条が勝者の腕でなく、背後から体ごと抱えて敗者から、引っ剥がす。

勝者は興奮冷めやらず、勝ち名乗りを上げる代わりに数回、音を鳴らして歯を噛み合わせる。

そして、敗者は最後の力を振り絞り…

「な…なが、長野はし…死すとも…死すと……ダメだ思い出せねえ」
ボタン！

最後の捨てゼリフも決められず、力尽きた。

実に不毛な争いであった

長生きの秘訣はジジイとケンカする事だってババアが言ってた（後書き）

こいつ、本当に主人公か？

寝て見る夢は、現実の6倍は怖い。（過去9割）（前書き）

誠に勝手ながらジャンル変更しました。

『コメディー』から『その他』に変わりました。

理由は副神漬けが漬かり過ぎて、腐苦神漬けになってしまったからです。

寝て見る夢は、現実の6倍は怖い。(過去9割)

「じゃあ、オレ達そろそろ帰るぜ」

失神した司を最新医療技術『叩けば治る』で見事に蘇生させた無免許医師、上条はイスから立ち上がる。

「見舞い、ありがとな上条」

礼を言ってから司は窓の外に視線を向けた。

空調設備が完璧な病室と違い、太陽の光がギラついている景色は見ただけで暑さが伝わってくる。

(…こんな日は熱中症になるヤツが多いんだよな)

例えば、全身白ずくめのシスターなんかが候補にあがる。

「それから、ガキンチョ。お前は水分を取りまくって寝小便しとけ」

「なっ!?!そんな事しないもん!つかさのバカ!!!」

司の意地の悪い言葉にインデックスが怒って飛びかかるつもりだが、上条がそれを抱き止めて阻止した。

「はいはい、無限ループになるから行くぞ」

そして、そのままインデックスを担いで病室を出て行く。

「つかさ!次の、お見舞いで完全決着つけてやるからね!覚悟しと

けばいいんだよ!!」

「ケツ、次までに車椅子で移動が出来ればオレの勝ちだ。いつまでも調子に乗んなよ?」

バチバチバチ!!

双方共に動きはとれないが闘志は十分。交錯する視線が見えない火花を散らす。その気迫を感じ取りながら病室を出た上条は心底、疑問に思う。

（お見舞いつて何だっけ?）

2人がいなくなった後、急に強烈な疲労感がのし掛かった。

（あゝ…まずいな）

司は目を開けている事すら出来なくなっていた。自覚がなかったが、あまりにも騒々しく、無茶苦茶な、お見舞いが楽しくて仕方なかった様だ。

体が要求する休息も拒否するぐらいに。

（いいや…寝よう…）

麻痺していた感覚が正常化して、体を回復させる為、深い眠りに司は落ちていった。

その時、夢を見た。

両親と共に死ぬ事を拒絶して、連れていかれた研究所。そこで家畜

以下の扱いを受けていた自分を慕い、最後に自分を救ってくれた少女の事を……

助ける事が出来なかった、名前も知らない少女の夢を……

――とある少女の生――

前編

5年前、ある研究所で、無・低能力者の能力開発及び能力向上実験が行われようとしていた。通常の脳開発では危険と定められた基準値を無視して薬物投与や、電気刺激などを行うこの実験。

しかし、被験者の子供達は例外を除いて、強制されてではなく自ら進んで過酷な実験を望んだ。何故か？

子供達は一刻も早く『人』として扱ってもらいたかったのだ。

この研究所には被験者に対しての、明確なルールがあった。

『人』と認められるのはレベル2からで、それ以外は愚鈍な家畜であるというルールが。

つまり、この研究所では能力開発を受けたにも拘わらず、無能力者が圧倒的に多いのは、学園都市の環境が大きく関係していると考えられていたのだ。

無能力者でも罰則があるワケではなく。

最低限の奨学金が保証されて、スキルアウトになるといった逃げ道も用意されている。

これでは話にならない。危機感が欠如しているのだ。無・低能力者が自力で現実や常識から切り離された『自分だけの現実』を発現させ、能力を向上させたいのなら、極限の集中力で自己が持つ世界認識を潜在意識から否定する他ない。

研究者達は、そう考えたのだ。

そのためには環境を変える必要があった。レベル1以下は、生きていく上でギリギリの、衣・食・住を与え。拷問としか思えない訓練を課し、

レベル2からは、日本の平均的家庭の子供程度に扱いを変え、安全面を優先させた実験に切り替えた。

ただし、全ての被験者達に逃走防止用の、小型発信機を体内に埋め込む事

そういった決まり事の中、実験は始まった。

最低限、被験者達の生命は確保されていたが、それは道德や良識觀念からではない。

研究所の運用費の問題と、研究員達に義務付けられた、『担当の被験者が一人、死亡する事に給料10%カット』のペナルティの為にあった。

実験が始まり、能力がレベル2以上になった子供は、自分を選ばれた人間などと思い込み、必死に『人』になろうとする、子供達を嘲笑った。『人』になろうとする子供達は、本来ならば助け合う筈の、同じ境遇の他者を押しのけ、死に物狂いでレベル2以上の能力を得ようと目を血走らせていた。

そして研究者達は、その様子を事細かに観測し、貴重な実験記録として厳重に保管した。

そして、研究開始から3度目の能力開発実験。名も無き少女の能力が発現した。

潤いが無くボサボサになった金髪。体は痩せこけていて、栄養失調の為か、本来は白い肌が浅黒く変色している。ブルーの双眸は体調が優れない為か、くすんでいた。

（何…これ！？）

少女は自分の脳内に、伝わってきた情報に頭を振って取り乱した。

彼女が得た能力は念話能力に特化したレベル4の『精神感応能力』この少女にとっては最悪の能力であった。

この少女は他の子供達と同様『置き去り』で、1ヶ月前まで学園都市の外で両親と共に暮らしていた。にもかかわらず、彼女は名前を持っていなかった。

この研究所で受けてきた虐待にも彼女は、不満を口に出さなかった。両親が彼女に対して行った『躰』に比べれば、遥かにマシだったから。

この少女にとって生きるという事は、我慢する事だった。

痛めつけられても泣くのを我慢して、

他人から非道い誹謗中傷を受けても怒るのを我慢して、

自分の事を親が「知らない」と、言っても死ぬのを我慢した。

しかし、彼女の脳に直接語りかけてきた『声』は、我慢出来ないものだった。

《死ぬ、家畜共。お前らが出来るのは命を使って『人』のオレ達を喜ばす事ぐらいだろ？》

傲慢な能力者の『声』は、不快感の余り脳が腐っていく錯覚を起こした。

《見てろ、オレは絶対『人』になってやる！邪魔する奴は全員、殺してやる。家畜のままで死んでたまるか！！》

そう言いながら、限界に近い量の薬物を飲み下す無能力者の『叫び』に彼女は思わず、耳を塞いだ

しかし、発現したばかりで能力制御が思う様に出来ない彼女に、また別の『声』が語り掛けてきた

《まずいな。死亡したら、死因特定の解剖はオレがやるのか…面倒だな。それに薬物マミレの肉体じゃあ再利用の価値も0か…とことん役に立たないガキだ》

聞こえてきたのは、痙攣して意識を失っている、子供を汚物を扱う様に担架に乗せて研究室を出て行く、研究者の『声』
その冷酷な響きで少女の体は震え始めた。

（怖い、怖い、怖い、怖い、コワイ、コワイ……）

少女は震える体を抱き締めて、キツく目を閉じた。

それでも、剥き出しになった人間の本音は、直接脳内にどんどん響いてくる。

そのどれもが、彼女の精神をズタズタに破壊していく。

（助けて！）

それでも、少女は助けて、と口に出せない。

誰も助けてくれないと、心の底から理解してしまっていたから、そして新たな『声』が彼女を襲う。

しかし、その『声』は…

《研究室が大好きな犬の名前は？》

何とも暢気な、間抜けた『声』であった。

《答えはじつ犬。ケツケツケツ、最高だコレ！絶対、オモシレ》

変わらぬ暢気な調子の『声』が脳内に響く。ちなみに、少女は全く面白いと思わなかった。

だが、余りにも緊張感がない『声』の、おかげで彼女は徐々に落ち着きを取り戻し始めた。

（一体、どんな人が…）

少女は今度は自分で意識しながら、『声』を探してみる。これが彼女の初めての能力制御になった。

『声』の主は意外な人物だった。

この研究所で一番の問題児。

通常の脳開発も受け付けない、究極の無能力者。

少年の名は…

《ヒマだ。漫画、見ながらジュース飲む実験して》

長野 司と言った。

寝て見る夢は、現実の6倍は怖い。(過去9割)(後書き)

こつから4話ほど、暗い話になる予定です。
考え無しの作者で、ごめんなさい。

話が暗くならない、節電が足らんからか？（過去）（前書き）

もしくは、チヨウチンアンコウのせい。

話が暗くならない、節電が足らんからか？（過去）

（何で？…一番、辛いハズなのに…）

バキッ！

少女が困惑していると、少年が女性研究員に、何も言わずに殴られた。

しかも、素手でなく電圧変換が可能なスタンロッドで頭部から血が出るぐらいの勢いで、少年はたまらず床に倒れた。

「ウツ、ヒック、クスンつつ君のバカ」

女性研究員が泣き出したこれでは、あべこべだ。

「き、霧島デメエ。たいがいにしとけよ…」

少年が電撃で痺れて倒れたまま、憎しみを込めて抗議する。

女性研究員は、ビクリと肩を震わせ怯えたように、少年に視線を向けた。

女性研究員の名前は霧島 優美。

少し大きめの白衣を纏い、童顔の顔立ちに銀縁メガネを掛けている。一見、学生の研修生に見えるが、れっきとしたダメダメ狂科学者である。

その理由は、次の発言に集約されていた。

「うー、お給料は半分になっちゃうし、つつ君は逆らうし、お母さん、都会は怖い所です」

ちなみに彼女は他の研究員達から、『処刑人』と陰口を叩かれている。

「ケツ、オレが母ちゃんだったら殺してるね」

動けないから、口で霧島を責める少年。

「テメエの仕事を母ちゃんは知ってんのか？」

ギクリッ！

「こ、子供の未来を作る仕事としか…嘘はついてないよね？」

両手の人差し指を胸の前でツンツンしながら、不安げに少年に尋ねる霧島

少年は床に這いつくばったまま、蔑んだ視線を返し一言で、

「バレたら、母ちゃんが自殺するな」

一刀両断する。

この言葉が、思いの外、心にダメージを与えたらしく、霧島は泣き崩れた

「うつつ、お母さん。汚れた娘でゴメンナサイ」

そして、入れ替わる様に体の痺れが取れた少年が起き上がり、

「死ねえ！クソ女！！」

霧島に殴りかかった。

だが、その拳は届かない

バチバチバチバチ……！！

「でも、お母さん分かって……」

霧島が無造作に突き出したスタンロッド、その最大出力の電撃が直撃して、少年は悲鳴も上げられないまま再び倒れた。

「私が欲しい物は、お金でしか買えないんです」

その顔からは涙は消え失せ、呟きに邪気は微塵も感じられなかった。

「制裁よ、つつ君」

楽しそうに霧島が、そう言った途端に倒れた少年へ他の研究員達が群がり体の箇所を問わず、無表情で蹴りつける。

少年の顔は見る間に腫れ上がり、手足は痣だらけになっていった。

少女は、いつもなら仕方ない事だと目を背けて関わらない様にするのだが、恐れも忘れ少年を助けるため駆け出した。

パンツ、パンツ、パンツ

しかし、少女が駆け寄るより早く、霧島が手を叩いて、制裁終了の合図を出した。研究員達はピタリと、蹴るのを止めて、何事もなかった様に作業に戻って行った。

「これ以上やったら、またペナっちゃうもんね」

そう言つて、スタンロッドの先端で突つついて、少年が生きているのを確認する。

「よし、つつ君ファイト！明日がんばろ！」

部活の顧問の様な発言をして、少年の足を無造作に掴み、ゴミ袋を引きずるように霧島は研究室から出ていった。

何も出来なかった少女が呆然としていると…

バシンッ！

研究員が少女の頬を平手打ちする。鋭い痛み少女は我に返った。

「すみません」

文句も不満も何も言わず、無言で睨み付けてくる研究員に謝つて、少女は身体検査の順番待ちをするため列に並ぶ。

これが、当たり前。逆らつても痛めつけられるだけなら、このルールに従うしかない。それでも…

（あの人は多分、それが許せないんだ）

少女は唇から滲み出した血を拭いながら、少年の『声』を思い出していた

辛いという感覚がないのかと思う程に呑気な『声』と、全てを燃やし尽くす業火の様な怒りに満ち溢れた『声』動けなくなるまで痛めつけられても、少年は決して許しを乞わなかった。

その時に少年から、聞こえてきたのは『声』と言うよりも『音』だった。

何の見返りも求めず、ひたすらに目の前の理不尽に立ち向かう。不純物が混ざっていない、純粹な無欲の音色。

その音が、ずっと押し殺してきた少女の感情を、少しだけ震わせた。

身体検査の結果、少女のレベルは1と判定された。彼女は『人』になる事を拒絶したのだ。

誰一人、少女の嘘に気付かなかった。

当然だ、誰が好き好んで『家畜』でいたがるものか、個室が与えられる『人』と違い『家畜』は飼育小屋と言われる部屋で集団生活を強いられ、排泄すら許可なしに出来ない。

オマケに長野司と言う、底辺の獣も一緒だ。

誰だって、こんな場所に留まろうと思わない、必死に抜け出そうとする。

だから、分からない名も無き少女に発現した稀有で貴重な能力の事も。

念話とは矛盾した言い方になるが、物言わぬ会話だ。

そして会話とは、賭けているものが、あればあるほど情報が重要になる。

尋問、詐欺、取り引き、交渉…

状況や相手の性格、何を欲しているか？何を捨てようとしているか？

細かく上げればキリがない。高度になればなる程、情報が必要になっていく。

それを少女は『声』を聞く事で把握する事が出来た。

そして、発現に伴って発達した知能で自分の能力を磨き上げていった。

2週間経過した時には、一度に捕捉し聞き分けられる『声』の数は40以上になっていた。

どんな『声』を聞いても怯える事もなくなっていた。今では授業で教師が喋っている様に、ただの知識吸収だと割り切れている。

それでも、少女は聞くだけだ。話そうとは思わなかった。

一人だけ話したい相手がいるが、間違いなく能力者を嫌っているの
で話せない。

だから『声』も聞かないただでさえ能力の事を黙っていると云う罪悪感がある。

その相手とは…長野司とは上も下もない、対等でありたかった。

少女は能力が発現してから、それまで目を合わせる事も避けていた
司に少ない自由時間、1日10分に満たない時間を使って話しかける
事にした。

能力でなく自らの口で紡ぐ言葉で懸命に、初めは邪険され、威嚇され、警戒されたが徐々に気を許してくれるようになったそして今…

「お前の名前なんて言うんだ？」

包帯だらけ怪我だらけだが、まるで弱った様子がない。あっけらか

んとした調子で司が少女に名前を聞いて来た。

「名前…ですか？」

少女は困った。司が聞いてきたのは、誰もが生まれた時から持っているが、少女には無いものだから。

「…内緒です」

誰もが持つていて、自分だけが持つていない。それを司に知られるのが恥ずかしくて少女は嘘をついてしまった。

「内緒？なんで？」

「…内緒だからです」

うつむいて名前を言う事を頑なに拒む少女を見て、司は無言で考えた。

その沈黙の間、少女は内心で自責していた。

（怒らせてしまった…また嘘を付いて）

少女が後悔して本当の事を言おうとしたが…

「モンペ」

イタズラ好きの悪ガキが、それより早く口を開いた。

「…も…モンペ？」

意味が分からず少女は聞き返した。

「あだ名だよ、本名を吐かねえなら、そう呼ぶぞ。ケツケツケツ」

「モンペ…私の…あだ名…」

どうやら、変なあだ名を付けて本名を聞き出す作戦らしい、少女は放心したように虚空を見つめ何度も「モンペ」と繰り返した。

「ちよっ！何だよ、そんなに嫌なら言わねえよ。だから…」

「ダメです！！」

司が機嫌を取るように、話しかけると少女は今までにない強い態度で拒絶する。

「モンペ可愛いです！呼んで欲しいです！！」

「あつ、はい…分かりました…モンペさん」

司が、そう言うと少女は笑った。その笑顔は屈託が無く、誰を気遣ったワケでもない、自然な可愛いらしいものだった。

話が暗くならない、節電が足らんからか？（過去）（後書き）

オヤジの頭がハゲてるせいも多少ある。

イカれてても大丈夫、周りはもっと狂ってる。(過去)(前書き)

オリキャラばかり。

イカれてても大丈夫、周りはもっと狂ってる。（過去）

朝の6時、暗い地下の『飼育小屋』で子供達が朝食を取っていた。

ブロックタイプの栄養食と水だけという食事、話し声も聞こえない。部屋のスミで食べ終えてヒマな司は淀んだ雰囲気、舌打ちした。

ビクッ！

それに反応したのは隣で膝を抱えるように座り、小動物のようにせわしなく口を動かして食物を摂取していたモンペだった

「…ど、どうかしましたか？」

食物を両手で隠すように持ち、恐る恐る司に尋ねるモンペ。その姿は司の悪戯心に火をつけた。

「いただきっ！」

電光石火でモンペの食物を掠め取り、口に放り込む素振りを見せて、モンペの反応を見る司だったか…

「あ」の口の形で凍り付いて発声が出来ず、小刻みに震える姿がシヤレにならない痛々しさだったので、司は無言で食物をモンペに返した。

カジカジカジ！

返された食物を従来の二倍のスピードで食べるモンペ。しかし、

「うつ！？」

喉に詰まらせて、再び凍り付く。司は無言で水を手渡した。

ゴクッゴクッゴクッ！

目をつむって勢い良く水を飲み干すモンペ。その横で司は「笑わせ
て吹き出させたい！」と言う衝動を必死にこらえていた

食事が終了し、訓練が始まるまで少し時間が空いた。

「お題、自由になったら何するか？
とりあえず霧島を殺す。モンペは？」

暇潰しの会話を司が右手で鼻をほじりながら適当に振ると、モンペ
は真剣に考えて、か細い声で呟いた。

「…可愛いお洋服が…着たいです…」

「うげえ！？」

司はモンペの返答に動揺し、ズボッ！と指を鼻から引っこ抜いた。

「……ダメですか？……」

司のリアクションに傷心して、うつむきながら問い掛けるモンペ。
司は自分の服で指を拭きながら、知らずにタブーを口にしてしまっ
た。

「いや…女の子みたいだなんて思ってな…いいんじゃない別に」

「…………女の子…ですけど…」

後、少しでブラックホールが発生しそうな重たい空気が2人を包むが、司が左手でワシヤワシヤと、モンペの頭を撫で回して一言。

「カワイイなコンチクショ〜！」

ヤケクソ気味なフォローであつたが効果はあつたらしく、モンペは顔を赤らめ無言で照れていた。

（そっかぁ…全く分からなかった…）

司は弟分、改め妹分の頭を撫でながら見た目で判断したらイカンと痛感していた。

気力を取り戻し訓練に向かうモンペを見送り、司は一人ぼっちになった。

（露骨に差別しやがって、霧島のボケ！）

胸中で毒づいていると、自作したと思われる鼻歌を能天気な歌いながら霧島がやってきた。小屋と通路を仕切る鉄格子の前で司の姿を確認して、

「オリジナル挨拶！おっぱ〜…………」

いつもと変わらない大きめの白衣を着た霧島が両手を上げて バンザイのポーズをしてから、

両手を自分の胸元に持ってきて、

「いつ！」

と、胸を揉むような動作をするが…

スカスカ……

両手には寂しい手応えしかなく、霧島は笑顔のまま固まった。司は完全スルー。ジト目で睨み付けて沈黙を保っている。

「うつ…うつ君のアホ…今生の別れになるかも知れないのに…」

「今日のネタも最悪だなお前が死んでくれんの？」

ほとんど毎朝、繰り返されている実験前のやりとりを終了させて、霧島が無邪気に実験内容を話し始める。

「今日、つつ君には発火能力者と模擬戦やつてもらいます。ハンデとして相手にはハードテーピングが装備されてるので気合いを入れてね」

「それ、死ぬだけじゃね！？」

「荒療治です『自分だけの現実』で発生させた炎でレアに焼かれたら、それが刺激になり通常の脳開発ぐらいいは受けれるようになるかも…」

「なるワケねえだろ！だいたい、そんなデタラメ………」

ここまで喋って司は、この実験に隠された目的に思い当たった。

「賭けてんだろ？」

ギクリッ！？

霧島が再度バンザイのポーズを取る。

その際にズレたメガネが、司の推理が正解だと語っていた。

「いくら賭けてんの？」

「さ…三千万円…」

「よーしっ！気合い入れて負けるか！」

司のかけ声に、霧島が激しく狼狽する。

「つつ君バカな事はやめて〜！相手は殺しに来てるのに、半端な気持ちじゃ死んでしまうわ！！」

「仕掛けたテメエが偉そうに、ぬかすな！お前に儲けさすぐらいなら死んだ方がマシだ！！」

「な、なんて歪んだ愛情…つつ君が、そこまで言うなら私にも考えがあります」

「ストレートの憎しみだけで、愛情なんか0だけど」

司が嫌悪感を隠そうともせず真顔で言ってるが、霧島は全く動じず笑顔で切り返す。

「代打をつつ君の仲良しさんに、しちゃうもん」

司の顔から血の気が引き、表情が能面の様に無表情になった。

ガシャンツツ！！

鉄格子を蹴りつけ、感情を押し殺しながら霧島に問い掛ける。

「無関係な奴を巻き込むのは科学者として、どうなんですかねえ？」

「そんな事ないわよ、計画が少し早まるだけだもん」

人間は環境適応能力に優れている生き物である。初めは耐えられない家畜扱いも日数が経てば受け入れてしまう。

そうなたら、どうするか？

この研究所の職員が満場一致で出した結論は、

「家畜は生かされているけど人間の気分一つで、殺されちゃう事を教えるの」

家畜達の中から一匹の生け贄を選別して、出来るだけ無惨に残酷に人の手で殺す。

原始的な方法だが『死の恐怖』は確実に 家畜達の心に植え付けられるだろう。

「つつ君が言う事、聞いてくれないなら…」

ガシャンツツ！！！！

先程より勢い良く鉄格子を蹴りつけて、霧島を黙らせる。

「オレが勝てば、どうなるんだ？」

とりあえずではなく、絶対に殺すと誓いを立てて司は霧島を見上げた。

「計画の進行速度が元に戻って、あの子が選ばれない確率が出てくるね」

ヌケヌケとのたまう霧島、なんとか服従以外の方法を見いだそうとする司だが、見透かした様に霧島が指を左右に振ってから、

「ぜんぶ、むだ」

とほざいた。

ガシャーン！！！！！！

3回目の蹴りで一番、派手な音が出たが、ただそれだけ。

状況は何一つ変わらなかった。

イカれてても大丈夫、周りはもっと狂ってる。
(過去) (後書き)

ギャンブルは楽しい内に辞めましょう。

死なば諸共じゃなく、生きようぜ諸共！（過去）（前書き）

腐苦神漬けのヤツ、思った以上に消化が悪いです

死なば諸共じゃなく、生きようぜ諸共！（過去）

深夜の飼育小屋、子供達は誰もが疲れ切り死んだ様に寝入っていた。その中でモンペだけは集中力を極限に高めて能力を使用し、司の居場所を探っていた。

司は自分達と別メニューの訓練を受けているので小屋に戻る時間は分からないのだが、今日は遅すぎた。

（生きていて下さい！）

嫌な胸騒ぎを覚えたモンペは研究者達の思考を片っ端から聞き取って、いくつかの事実を探り当てた。

司が発火能力者と死闘を演じて生き残ったという事、今は治療室で動けないでいる事、そして…

（実験前に私を殺すと脅されていた！？）

その事実を聞きモンペは放心状態になり、我に返った時ある事を決意して再び能力を使用した。

その頃、司は治療室のベッドの上で痛みと悔しさで寝付けずに今日を振り返っていた。

発火能力者との闘いは、相手の油断と嗜虐趣味に救われた。

「簡単に死んでくれるなよ、虫ケラ」

司と変わらない年齢の少年は笑顔で言うてから、強化された身体能

力と炎を使って司をいたぶり続けた。しかし少年は知らなかった自分は今、痛めつけている虫が毒針を隠し持っている事を。

司、自身もこの施設に来るまで分かっていた。激痛と引き換えに一瞬だけ我が身に宿る爆発的な身体能力。

不遜な驕りと歪んだ愉悦から生じた隙。そこに、渾身の一撃を叩き込み勝利をもぎ取った。しかし代償は大きく意識を保っているのも辛い状態だ。その司を見た霧島は、

「アツハツハツハッ！！つつ君バ力過ぎ、勝ってやんのっ！！」

腹をよじらせて馬鹿笑いをかまし、治療室に司を引きずって連れて行き、最低限の治療を施して、

「今夜は寝れないよ、傷口が腫れるわよ。超絶に痛むわよ。じゃあ、私は遊びに行くてくる」

司が元気なら、間違いなくグロ死体になっている発言だけ残して霧島は治療室を出て行った。

（あのクソ霧島があああ！！）

痛みを忘れる程の怒りと、ついに服従してしまった悔しさに司は口から血が滲み出るぐらいに歯軋りしていた。

今まで司は実験の度に抗ってきた。だから霧島も意識を失わせてから、体を動けないように拘束して無理やり実験を行っていたのだが、今日は司の意志で自ら霧島を喜ばせてしまった。それが、どうしようもなく悔しかった。

（唯一の望みはモンペのレベルが0じゃない事か…）

モンペがレベル2になって『人』になれば生け贄の候補から外れる。そうすれば、とりあえず安全だ。

（それまでオレの命が、もっかの勝負だな）

司が眉間にシワを寄せて思考していると、『声』が聞こえてきた。その『声』は、

《……司……ごめんなさい……》

聞いている者の胸が引き裂かれるような、悲しみと後悔に満ち溢れていた。

（…私はいつも謝る事しか出来ない……）

モンペは驚く司に、隠していた能力の事を全て話した。そして自分以外、起きている者がいない飼育小屋で、両膝を抱えてうずくまり司の言葉を待っていた。

この時、モンペは許される事を一切、考えていなかった。罵倒の『声』も、軽蔑の『声』も全てを受け止めようとしていた。

体は震えて、泣き出さなくなっていたが、司が「死ね」と言うなら即座に舌を噛み千切るつもりだった。だが…

《モンペでかした！！》

聞こえてきた『声』に、呆然としてしまった。

その『声』を例えるなら、逆転満塁ホームランの時に沸き起こる喝

采。

待望していた我が子が、この世に生を受けた時に親が抱く歓喜。苦しい受験や労働が終わった時の解放感。

世の全ての歓喜が集約しているかの様に、モンペには聞こえた。

《明日、朝一で自己申告しろ。そしたら霧島のカスをキツチリ地獄送りにしてやれる》

歓喜は去り、煮えたぎるマグマのごとく怒りに満ちた『声』モンペには理解が及ばない。

《待つて下さい、司！…どうして私を責めないんですか？欺かれていた事を怒らないんですか？》

その理由がモンペには、どうしても分からない。

矜持を捨て、殺したいぐらい憎い霧島の言いなりになってまで救おうとした相手が、実は初めから命の危険など無く、その事実を黙秘していたのだ。

裏切られたと思って当然だ。

恨みを抱いて当然のハズだ。

それなのに…

《あゝ、お前が言いたい事も大体は分かるけどさあ…》

司がモンペに語りかける。それはいつもの様子となんら変わらない呑気な響き。

《それより、お前が助かる嬉しさの方がオレにはデカイ》

単純明快であり、規定の損得勘定を一切無視した回答。それは突風

の様にモンペの脳内から、淀んだ負の感情を吹き飛ばした。
そしてモンペは今の今まで不可能だと諦めていた、ある提案を司に打ち明けた。

《司…私と一緒に脱走しませんか？》

司の驚きがモンペに伝わってくる。この施設で最大のタブーである脱走。

各自に取り付けられた発信機、おびただしい数の監視カメラ、殺害する事だけを考えて迫り来る追っ手。

過去に発生した失敗例も踏まえれば、司でも断念せざるをえない。
その脱走という言葉を、大人し過ぎる事を懸念していた妹分が『声』に出したのだ。

《…お前死んじまうぞ、分かってんのか？》

《…私は少ない可能性ですが、成功する目算を立てています…でも…》

《でも、何だ？》

《私が『人』になったら司は確実に死ぬでしょ？…霧島を道連れにして》

そう、モンペの安全を確信出来たら、司は間違いなく霧島に報復を行うだろう。その時、司に待っているのは明確な死だけだ。
さらにモンペは語り続ける。

《憎い相手を殺した後なら司は喜んで死ぬでしょうが、そうはさせません》

今までからは考えられない強固な意志が 込められた発言、さらにモンペは続ける司に対しての感謝と願いを込めて。

《司は私と一緒に、もっと人生を楽しんで、楽しみ尽くして大往生して下さい》

モンペの発言に司は熟考した後、ある条件を付けて同意した。その条件とは…

《お前はヒョ口過ぎるから『人』になってメシ食って来い…脱走の時、背負ってなんかやんねえぞ》

憎たらしい発言。しかし、心の底からモンペを氣遣って言った言葉。その『声』を聞きモンペの目から涙が溢れた。その涙は悲愴の欠片も無く、自分自身を懸けてでも失いたくない。大切な者を得た実感から出る歓喜の涙であった。

死なば諸共じゃなく、生きようぜ諸共！（過去）（後書き）

次の次ぐらいで過去編を終わらせる予定です……………予定は未定。

悪人は善悪でなく、好き嫌いではしか物事を見ない（過去）（前書き）

祭りは準備が一番楽しいらしい。

悪人は善悪でなく、好き嫌いでしか物事を見ない（過去）

No.12、この呼び名が新たにレベル2の能力者として『人』になった少女に与えられた。

少女は感情の起伏が少なく、実験の副作用から来る精神疾患を疑われたが、生活するのに支障が無いと判断される。

『人』になり一週間が経過しても、少女の様子に変化は見られず、淡々と物事をこなす姿は機械の様な印象を周囲の人間に与えた。

だが、自室で1人になり離れた場所に居る親友と念話する時、少女の様子は一変する。

《では『脱走するなら今しかねえ！』の計画説明なんですが》

《ナイスなネーミングだモンペ隊長》

《…自信アリです》

誰も居ない部屋で、モンペはドヤ顔でVサインを作り喜びを表した。無表情の少女しか知らない人間が見たら、二重人格を疑うレベルの変貌ぶりであった。

司が一週間、治療室から動けない間にモンペは自分のレベルを偽って『人』になった。

異能力者と大能力者では、施設側の警戒度に格段の差がある とい
うのが、その理由だ。

《それでは報告です、この施設の構造と警備体制と監視カメラの位

置の把握は終了しました。それらを踏まえての脱走ルート作成も80%ほど出来上がっています」

司はモンペの報告に首を傾げた。

《…オレの記憶が確かなら、動けない間ひたすら念話で話し相手になってくれたヤツの、あだ名はモンペだった気が…》

その時には司の奇妙な『力』を刹那と名付けたり《脱走計画じゃ味気ないからカツコイイ作戦名を付けよう》などと他愛ない話しかなかったのだが…

《…そちらに重きを置いていたので、80%なんです》

《お見逸れました！！！》

司が、そばにいたら深々と頭を下げていたと確信してモンペは再び、ドヤ顔Vサインを決める。

モンペの能力向上は著しく、司と念話をしながら、複数の相手の二ユーロン（神経細胞）のあらゆる活動電位で伝達される情報を自分の理解できる形に言語化して『声』として聞き取り『脱走するなら今しかねえ！』作戦を練り上げていたのだ

《問題は発信機ですね》

司とモンペは揃って、自分の右肘を忌まわしげに見つめた。

《私達に埋め込まれたコレは本来の役割とは別に、能力者の演算能力を狂わせる機能が備わっている様です。不完全な代物ですが無視

出来ません…そこで司に頼みたい事があります》

《待つてました〜！お前がそんだけやってくれたんだ。オレは出来ない事でもやってみせるぜ！》

司の意気込みが存分に『声』から伝わって来た。

《では、霧島を心の底から好きになって下さい！》

《ノオオオオオオ！！！！》

前言を全力で覆して、力の限り拒絶する司の『声』がモンペの脳内に大音響でこだました。

《司…気持ちは分かりますが、これは必要な事なのです》

そう前置きしてから、モンペは司に説明を始めた。

モンペがやろうとしている事は、自分の能力を応用して疑似情報を他者の脳内シグナル伝達経路に流し、感覚操作を行うと言う事だった。

モニター監視係と飼育小屋の警備員と、発信機の実操作装置を握っているモンペと司の担当者。最低4人の人間の感覚操作を行わなければならない。

《生半可な訓練ではダメなのです。司、分かって下さい》

《ううう…モンペ隊長、他に方法は無いんですか？》

《ありません、一時的な事です。成功したらずぐに能力解除しますから、覚悟を決めて下さい》

《…人を好きになるって、とてもツライ事だったんだな…》

司の諦めきつた『声』が、弱々しくモンペの脳内に響いた。

その日から、人知れずモンペと司は訓練に励んだ。

図式的には『大嫌いな食べ物を工夫して、何とか食べさせようとする母親と抵抗を続ける子供』といった具合であった。そして1ヶ月の時間が流れ……

《モンペ何か来た！ヤバイ！？取ってコレ！！》

司の取り乱した『声』に確かな手応えを感じて、モンペは能力を解除した。

《ご苦労様でした。コツは掴んだので、後は私一人で大丈夫です》

《そうですかのお…ワシはお役に立てましたかのお…》

酷いショックを受けたせいか、司が老化現象を起こしていた。

《…司、今日はもう寝ましょう。少し疲れ気味の様ですから》

《ワシはまだまだ、やれるんじゃない！》

《…寝て下さい》

一晚、寝たら元に戻るだろうと判断して、モンペは念話を終了させた。

（完全に『自分だけの現実』に組み込むには3週間ほどかかりますか…）

その間に感覚操作を完全取得し、並行作業で『脱走するなら今しかねえ』作戦の微修正を行い、完成させる。

かなりの過密スケジュールになるが、今までの苦勞を思えば何でも無い。

（司と一緒に自由になれる…）

それは、一年前には想像も出来なかった甘美な夢だ。少しだけ未来の事を夢想してから、モンペは能力を使用した。最近は感覚操作の事ばかり考えていたので、最新の情報を仕入れなければならぬ。

（状況は刻一刻と変わる物、油断はしない最善を尽くさなければ）

モンペは気を引き締めて、研究者達の『声』を聞き始めた。

その同時刻、所長室では……

（困ったわねえ）

霧島が所長に拳銃を突きつけられて、苦笑いを浮かべながらホールドアップしていた。

何故この状況に陥ったのか？それは両者の長野司に対する意見の対立が原因であった。

所長の意見は、

「何時まで経っても能力開発のスタートラインにも立てない劣悪な

無能力者は廃棄処理するべし」

との事だが、これに霧島が猛反発。持参したノートパソコンに収納していた司の実験データを所長に突きつけて、

「つつ君は通常なら、とつくに発狂している実験を何度も乗り越え、その度に成長を見せるトンデモ生命体です。こんな面白い実験体を殺すなんて生物学者の端くれとして見過ごせません！」

と鼻息を荒げてまくし立てた。

その後も両者の言い争いは続いた。

「効率の良い能力開発ノウハウの作成と、そのサンプル確保が目的なのだから、横道に逸れる様な真似はするな」

と、研究所の責任者としての意見を言えば、

「未知の物に対しての好奇心とチャレンジ精神が、学者の根源です。このまま、つつ君を殺して謎の原因究明もしないなら、私達は学者として敗北するんです！」

と、学者としての探究心が大事だと反論が飛ぶ。そして言い争いは並行線をたどり業を煮やした所長が、拳銃を出したのだ

「所長、なら妥協案です。私の個人所有物として、つつ君を買い取ります。はつまっち？」

銃口を突きつけられているとは思えない霧島の軽薄な態度に、所長は舌打ちする。

「残念だが、そんな段階では既にある。言い忘れていたが君は、あ

の粗悪品の担当から外れてもらう」

「…なるほど、つつ君を殺す事は確定していたんですか。この話し合いは何の意味があっただんですか？」

恐らく、別の場所で他の研究者達が司の有効的処理方法について検討しているのだろう。

霧島はお気に入り玩具を取られた、子供の様に不機嫌な表情になる。その顔を見ながら所長は苦々しく語り出す。

「君の正気を計る為だよ、結論は不合格だ。君の処分については、これから検討する。それまで、身柄は完全拘束させてもらう」

「…やりたいように出来ない事ほど、退屈は無いですよねえ」

そう言つて霧島は笑みを浮かべた。それはこの場に全く馴染まない満面の笑みであった。

所長の背に悪寒が走る。

「動くな！死にたくはないだろう？」

「別に…命はやりたい事をやる為の燃料ですから」

霧島は笑みを浮かべたまま、キーボードに右手を触れた。

タタンツ！タタンツ！

所長の拳銃から鉛弾が発射され、霧島は腹部を血で染めて崩れ落ちた。

「馬鹿女が！」

所長が汗をビッシヨリかきながら叫ぶ。そして深呼吸をして体を落ち着かせ、死体の処理をしようとした時、所内スピーカーから非常放送が流れた。その内容は…

『ただいま、飼育小屋の電子ロックが何者かに解除されました。迅速に担当の実験体の確認を行って下さい。繰り返します…』

所長が啞然としていると、霧島が力無く笑って何事か呟いている。

「…デジタルの便利さも…長短ありですねえ…」

命掛けで霧島が行った事、それは小屋の電子ロックの解除と発信機の機能停止だった。誰の為かと言えば当然…

「つつ君…ごめんね…実験して…あげられなく…」

タンッ！

所長が再度、鉛弾を霧島に打ち込んだ。鉛弾は脳天にのめり込み今度こそ、完全に霧島を絶命させた。そして慌ただしい足音が部屋に響き、乱暴に扉が開く。

後に残ったのは、口の端を満足げに歪めた死体だけだった。

悪人は善悪でなく、好き嫌いでしたか物事を見ない（過去）（後書き）

霧島は成仏を嫌がり、悪霊になりたがるでしょうね……黙とう。

未然に悲劇を防げたら英雄は廃業（過去）（前書き）

オレが無敵星人なら、2人共助けたのに…。

未然に悲劇を防げたら英雄は廃業（過去）

寝ていた司はモンペの鬼気迫る『声』に起こされた。簡潔に状況の説明を受け、一人で逃げるよう指示を受ける。

《私の発信機は停止していないので、アナタだけ先に逃がします》

この言葉を司は従えないと拒否したが、それをモンペは許さない。

《私を助けに来ると言うなら、今すぐ自殺します。…司の断末魔の『声』を聞くよりマシですから》

己自身の命を材料にした脅迫、司以外には通用しない交渉術。だからこそ、司に対して効果は絶大だった。

従うしかないと決めた司の動きは迅速で、まだ眠っている他の子供を尻目に小屋の扉を開けて、誘導灯の光を頼りに薄暗い通路を駆け抜ける。その直後、異常事態を知らせる非常放送が所内全域に響き渡った。

装飾が全く無い白一色の入り組んだ通路。所々に『B-36』といった記号が書かれたドアがあるだけ、構造を熟知していなければ、目的地には絶対に辿り着けない地下迷宮。

しかし、疾走する司の動きに迷いは皆無だ。時々、速度を落として動きに緩急をつけながら走り続けていた。

《次の分かれ道は右に、少し速度を落として下さい》

《ラジャー！！》

モンペの指示通りに速度を落とす司。その時、監視カメラにハッキ

リと司の姿が映し出された。
当然、追跡兵が向かうが、全ての思考と行動はモンペに筒抜けしている。

《司、次の十字路を直進してから速度を上げて下さい》

《了解！》

この施設のモニタは全てではないが、監視カメラからの映像を一台で場面切り替えを行い、映し出している。

その結果一つの場面对して最大4秒間の空き間隔が生じる。

モンペは司の姿を意図的にモニタに映し、要所では映させず、警備を攪乱させながら着実に脱走ルートを進ませていた。

今のモンペの演算能力は冴え渡っており、聞き取った『声』から完璧に近い形の未来予知を打ち立てる事すら可能だ。
司は脱走に成功するだろう。ただし…

（司…置いていかないで下さい…）

モンペが本音を隠し通す事が出来ればの話である

『声』は冷静で指示は常に的確、しかし、モンペの姿だけ見た人間は無力な少女が、ただ怯えているようにしか見えないだろう。

（司…一人にしないで下さい…）

能力を使用しながら、司に指示を出しながら、モンペは司と過ごした日々を思い出していた。

名前を貰った…嬉しかった。

心配してくれた…嬉しかった。

馬鹿な話をした…嬉しかった。

一緒に食事をした…嬉しかった。

一緒にいてくれると約束した…とても嬉しかった。

何も無く、親からも生きている事を疎まれていた自分を大切にしてくれた

これから何を得たとしても、一番大切な者は決して変わる事はないだろう

「…一人になるのが…怖いです…」

司が脱走ルート の 90% を走破した時、モンペは絶対『声』にしてはならない言葉を力無く呟いた

そして、司が目的の場所に辿り着く。散々、警備を引つ掻き回し混乱させた為、そのエレベーターの周囲には誰も居ない。

この施設が設立した当初からある、荷物運び用の旧型エレベーター、防犯カメラは付いていない。

《すぐチクって戻ってくるから、待ってるよ》

司が、そう言つてエレベーターに乗り込もうとした時、

《待って下さい!!》

自分でも予期せずに『声』を荒げて、モンペは司を呼び止める。司が怪訝な顔つきで動きを止めた

この時、一言《助けて》と『声』にしていたら司は、すぐに身を翻しモンペを助けに向かつていただろう。しかし、続けて聞こえてき

た『声』は彼女の本音とは、かけ離れた物だった。

《お迎えの車は戦車を希望します》

司はこれを聞いて、一瞬思考を停止させた後、すぐに嬉しそうに返答する

《戦闘機も一緒にどうですか、お嬢様？》

《いいですね。それでは、しばしのお別れです》

《ここまで、ありがとな。じゃあ、行つてきまゝす！》

モンペは司の元気な『声』を聞いて、能力の使用を止めた。まだ少し司と念話が出来たが、これ以上は本心を隠せる自信が無い。

(…自分の体じゃないみたい…)

ベッドに横たわり虚脱しきった自分の状態。経験したことが無い事だがモンペは驚かなかった。

(失うとは…コレの事ですか…)

心が名前も無かった自分に戻っていくのを実感しながら、嘆きはせず、虚ろな目で少女は天井を見つめ続けた。

(どこなんだここは？)

エレベーターを降りて、司は鉄骨が剥き出しになっている作業用通路から扉を開き、下にレールが敷いてあるトンネルを駆けていた。

やがて出口が見えてくる。冷たい外気を肌で感じながら、今の季節は何だったか？と考えていたが、外の景色を見たら、些末な疑問は吹き飛んだ。

観覧車があり、ジェットコースターのレールがあり、自分が走って来たトンネルの出口にはファンシーなオブジェが飾られていた。

学園都市第六学区、のアミューズメントパーク『Heaven and Hell』キャッチコピーは『子供から殺人鬼まで楽しみます』

「イカれてやがる……」

産婦人科病院の屋上に墓場を作る様な、皮肉が満ちた悪意。司の脳内に霧島の、楽しそうな顔が浮かぶ。

（早くモンペを助けねえと！）

司が急ぎ駆け出そうとした時……

バチイッツツ！……！！

凄まじい電気ショックが司を襲った。

（！？ふざけんな……気配なんて……何も……）

思考する事も出来なくなった司の意識は闇の中に落ちていった。

「目標を捕獲した。これから『窓の無い部屋』に向かう」

携帯無線機で通信して、ティザー銃をホルダーにしまい、男は意識を失っている司に手を添えた。

…後には、誰かが居た痕跡すら無く。夜の遊園地は静寂を保ちながら活気に満ちた朝を心待ちにしていた。

『お前の事は観察させてもらっていた…実に興味深い』

混濁した意識の中、何者かの声が聞こえてきた。

(…誰だ?)

冷たいタイルの感触を頬に感じながら、司は必死に体を起こそうとした。

(…気分がワリー)

嘔吐感と頭痛に邪魔されながら芋虫の様にもがく司。そこに機械の駆動音と何者かの声がかぶさって来る。

『見せてみる。お前の内に潜むモノを、早くしないと大切な者を失うぞ』

無機質な声が淡々と動けない司に語り掛ける。

(やかましいっ！クソっタレが、言われんでも分かっただよー！)

司は怒りを爆発させて、自分の左手の爪で右腕をかきむしる。瞬く間に鮮血が溢れ出した。

激痛が走ったおかげで、意識が幾分ハッキリとして司は何とか立ち上がり、声の主を睨み付けた。

主は赤い液体に逆さまで浸かっていた。液体を満たした円筒器には大小様々なチューブが繋がれていて、床や天井に剥き出しで張り巡らしており部屋を狭く感じさせた。

異常過ぎる状況だが司は設備でなく、逆さまの主だけを見据えて抱いた疑問を口に出した。

「お前、生きてんの？…それとも死んでんの？」

司の疑問に主は長い沈黙の後、こう返答した。

「……………さあな」

司が人知れず脱走した5日後、第七学区のとある病院で冥土帰しは懐かしい患者と通話していた。

『それで、その子の容態は？』

『肉体的にも精神的にも衰弱している。生きているのが不思議な状態だ…君にしか治せない』

『…僕が治療した後、その子をどうするつもりなんだアレイスター？』

『どうもしない。手出しが出来るモノじゃないのね』

『…分かった、治療を引き受けよう』

そして、詳しく症状と容態を聞き、子供を引き取る場所と時間を決めて冥土帰しは電話を切った。

くくある少女の生くく

前編

終

未然に悲劇を防げたら英雄は廃業（過去）（後書き）

次回、時間軸を現在に！

カレーオンリーまで後、2話！るるーのるゝ！！

愚痴を零す時は、相手を選ばないと後悔する。（前書き）

少しフライングです。

ボ。トでなくカレーが。

愚痴を零す時は、相手を選ばないと後悔する。

…… キュインツッ！…… キュユイインツツッ！

一寸先も見ることが出来ない暗闇の中、不快な音が鼓膜を震わせる。
そして音が響く度に司の体内をナニかが駆け巡った。

（動けねえし、声も出せねえ！？どんな手品だ、ふざけやがって！）

司が知る由もない事だが、体の自由を奪っているのは手品でなく魔術だ。

インド神話に伝わる始原神ヴァルナの『視る』力を取り入れた解析術式。

この魔術を掛けられた者は術師の前に己の『魂』までさらけ出し、前世と現世と来世の全てを暴かれてしまうのだが……

『何も分からないな、お前は本当に何なんだ？』

淡々とした声が司に問い掛ける。

（知るかつつ！！そんな事、そんな事は……）

/ / / / / / / / / / /

「オレが聞きてえよ！」

「やかましい」

ズドンッ！

死者も跳ね起きそうな強烈な一撃が、司の意識を夢から現実につ張り出した。

「誰だっつ！？」

怒鳴りながら睨み付けた視線の先に立っていたのは、黒のスーツ姿の村野だった。

「む、村野さん……起こし方がワイルド過ぎますよ」

「不服か？」

「……別に、嫌な夢を見ましたから……」

睨み返され、村野から放たれる威圧感に当てられ、萎んだ風船の様に縮こまる司。

（気まずい……何しに来たんだ、この人は？）

西日の光を避ける為、ブラインドを下ろす村野の背中を見ながら、司は居心地の悪さを感じていた

村野 鬼火。

見た目は男女が共通して思い描く『理想の女性像』と言った完璧麗人だが、色気の代わりに老若男女、誰もが平伏したくなる威圧感を無意識に発散している『女帝気質』の持ち主である。

司の恩人であり天敵とも言える存在で、三年前に自暴自棄になり凶悪なスキルアウトや能力者を相手に暴れ狂っていた司を、圧倒力でねじ伏せ続けて半年後には学校に通わせている。

この時、司は盗難車での轢き逃げアタック。『刹那』を使用した奇襲攻撃、スキルアウトから取り上げた小火器連射など、様々な方法で闘いを挑むが、カスリ傷どころか村野の服に汚れ一つ付けられず返り討ちにされている。

多大な迷惑をかけた事と、大惨敗し続けたトラウマがある為、司は村野に全く頭が上がらない。

「今日は救急法の講師を頼まれてな」

「……はいっ？」

唐突に語り出した村野に、ついていけず司は困惑してしまう。

「夏休みに入って無茶する輩が増えてるらしい……迷惑な話だ」

村野の眼光が鋭さを増し司を射抜く、何が言いたいのか理解した司は冷や汗をかき始めた。

ちなみに本日の講習内容は、学園都市の保安業務に携わるアンチスキルとジャッジメントの志願者を対象にした『実例に基づく正しい救命処置』であった。

幾度も悲惨な事故現場に出向き、人命救助を成功させている村野が講師を務めるのは適任と言える

「お仕事、お疲れ様です！早く帰って疲れを癒やして下さいー！」

「そうしたいのだが、やり残した仕事を思い出してな」

椅子に座り、司を一層強い視線で睨み付ける村野その目が如実に語っていた。

これから私が言う事に決して逆らうな。

司は過去に、この無言の忠告に刃向かって、村野の恐ろしさを再認識している。

「身投げの様な人助けはもう止める。約束するなら、今回の事と自販機の件は不問にしてやる」

「自販機はオレが主犯じゃな……」

「返答はYESかNOだ」

「い……良いS可能……なんつって!」

この返答に村野は一瞬、片眉を跳ね上げ無言で司が横たわっているベッドを持ち上げた。

「ふざけるなよ、司」

「ちよっ、新手のサービス!?! いらないつすよオレ!」

「するか、そんな事」

村野は片腕でベッドを眼前まで持ち上げ、激しく揺する。絶妙の重心調整と常識外れた腕力でベッドは破損する事なく、簡易アトラクションと化す

司はフライパンで炒められる、米の気持ちを理解した。

「今回、上手くいったのは神と悪魔が二人三脚するぐらい、奇跡的な事だぞ。分かってるのか？」

ガクガクガクガク！

「お前が死んだら、助けた人間が苦悩すると思わないのか？恩義など露ほども感じず、バカなヤツだと笑うかもな」

ガタゴトガタゴトガタゴト！！

「救命業務は時に命懸けだが、お前は自分の命を粗末に扱い過ぎる。そこが私は気に入らない」

ガツンガツンガツン！！

「再度、聞くぞ。よく考えて返答しろ」

ストンッ

勢いよく揺さぶり続けたベッドを優しく床に置き、村野は司の返答を待った。

「……ムリっすよ。気に入ったヤツが死ぬのはキツイから……」

ヨガの達人でも不可能なポーズで倒れたまま、司がボソボソと呟き、昔話を語りだす。

4年前、研究所を脱走した司は何者かに襲われる。今でも当時の記憶は霞が、かかった様にボヤけていてハッキリと思えない。

瀕死の状態で冥土歸しに治療を施され、意識を取り戻したのは脱走から15日後の深夜。

その時、約束を果たせなかった事を知った。

それから司は提供された保護施設に一度も立ち寄らず、学園都市中を徘徊する。その姿は死に場所を求める狂犬の様だった

「くたばるなら、恐喝やら強盗やらレイプやら殺人なんかを何とも思っていない、外道を道連れにしてやろうと思ったんだけど……」

結局、それは叶わなかった。何故なら司と殺し合った連中は皆、殺される間際に死ぬ事を恐怖していたから。

「……当たり前だろ、誰でもそうなる。ならないならソイツは死んでるよ」

司の話を黙って聞いていた村野が、面白くなさそうに言葉を吐き捨てる。

司は口の端を歪めただけで、その事について何も意見しなかった。

結局、半殺しにして有り金を奪う程度で、司は人殺しにならなかった。

そんな事を一年も続けて、何度かアンチスキルの世話になりながらも殺されなかったのは非常に運が良いのか悪いのか？

………あるいは何者かの思惑で、生かされていただけかもしれない。

「その後、村野さんの有り難い鉄拳更生プロジェクトを受けて、学

生復帰したんですけどね」

恐喝をしていたスキルアウトを何時もの様にボコボコにしていると、やり過ぎだと止めに入って来た人物がいた。司が制止を無視すると、1秒後に司の頭は地面に深々とメリ込んでいた。

それから毎日、司は村野に挑み続けた。ひたすらにガムシヤラに、他の事が考えられなくなるぐらい全身全霊を尽くして、完膚無きまでに負け続けた。

最終日、負けたのに生きている事を安堵していると実感した時、司は泣いた。

「モンペ……オレはお前がないのに死にたくない……」

何より大切な思いが錆び付いていく様な、悲しさで司は泣き続けた。

……………司が話を終えると、村野は椅子から立ち上がった。

「死ぬ事と死なれる事は選べないです。どっちも怖いから」

こちらを見下ろす村野の瞳をしかと見据えて、従えないと司は目で訴えた

「つける薬が無いのは存分に理解した」

「あざっす!!」

「だがな、司……」

その時、司は我が目を疑った。

それはまるで、嵐で荒れ狂う大海が静まり、厚い雲の隙間から一条の光が差し込んだ様な人智が及ばない美しさ……

村野 鬼火が優しく微笑んでいた。

「お前に生きていて欲しいと思う人間もいる……それは忘れるな」

そう言い残し、目を見開き啞然としている司を置き去りにして村野は病室を後にした。

「……破壊力パネエ。危うく失神するトコだった」

こんがらがっている四肢を苦勞しながら、真っ直ぐに伸ばしうつ伏せになる。

そして少しでも、回復を早める為また眠りについた。

まどろみの中、村野の笑顔と言葉を思い出しながら確信する。

（やっぱり氣に入ったヤツが、いなくなるのは怖いよな）

そして死んだ様に動かなくなる。夢を見る余地もないぐらい、深く眠り静かに体を回復させる為に

……翌日。

猛暑のピークを迎える昼過ぎ、病院の正面玄関前で……

「うにゃあああ！？悪魔の回復力を甘く見てたんだよー！！」

「このガキンチョめ、昨日のカタキだ！」

インデックスの、お餅みたいに柔いホツペタをグイグイと引つ張る司の姿があつた。端から見たら虎が子猫と、じゃれ合っている様にも見える。

その光景を見ながら見舞い改め、馬鹿の引き取り役になった上条は、隣りでクビを傾げている冥土歸しに話しかけた。

「アイツ元気ですね……」

「……僕の診断が外れるのは司ぐらいだよ」

カルテをめくりながら適当に冥土歸しは返答を返し、お手上げだと言つようにタメ息を吐く。

「やっぱりヒューマンアウト（妖怪）かもね？」

「……駄目人間て事ですか？」

「……もうそれで、いいかもね」

ここで、二人は会話を終了させて再び司達の方に視線を向ける。

「返してよ！つかさのバカ〜！」

「うるせー、シスター司と言えクソガキ！」

フードを取り上げ、自分で被り、戯れ言を抜かす司。

取り返そうと必死にジャンプを繰り返すインデックス。

そして、渾身のジャンプでフードに手が届きそうになるが……

「ソイヤッツッ……！」

「むぎゅっうう！？」

カウンターで後ろ向きにフードを深々と被せられ、インデックスは撃墜してしまった。

そして、司のテンションは有頂天に到達する。

「ウツシャアアア〜！！こつから831まで不眠不休で遊び倒すぜ！先生ぶっ倒れたら、お願いしますー！！」

深々と冥土帰しに向かって頭を下げる司。入院生活から解放された事もあり、普段の5倍増しで馬鹿であった。だから気付かない、今の言葉が自殺志願に等しい事に……

「私が世界で二番目に嫌う『病院をホテル代わりに使うゲス』宣言か……良い度胸だな」

頭を下げているので、声の主の顔は見えないが聞き慣れた声なので見ずとも分かる。司のテンションは一気に奈落の底に落下していた。

彼女は勤務前の医療器具の点検と救急車の車両チェックを終えて、退院する司に一言、声を掛けてやろうと立ち寄っただけだったが……目的は完全に変わっていた。

「む、村野さん今のは4月バカと言いますか、。。。党のマヨフェストと言いますか……」

「マニフェストだ、武士に二言なし。言い訳は見苦しいぞ」

「あ、オレ農民ですから……なんつって！」

司が言い終わった時には、すでに美しき鬼の、お仕置きは始まっていた。

ガシッ！

まず、丹田を伸びきっていないヤクザキックで、蹴り上げて体を浮かせる。

グリッ！

そして、足を伸ばしながら90度右足首を左に曲げて司を吹き飛ばす。

バシユユユユ……！！

司は空中で無理やり海老の様な前傾姿勢を取らされ、ライフル弾のごとく螺旋回転しながら、何処までも飛んで行く。

「オレのケツは空気を切り裂く臀部だああああ……！！！！！！……！！！！！！」

断末魔と言うには、余りにくだらない雄叫びを上げて、素晴らしい放物線を描きながら、司の姿は瞬く間に見えなくなった。

「少し手加減し過ぎたか？」

フィニッシュの横蹴りの体勢から、足を戻し何事もなかった様に村野が呟いた。

人を数百メートル、蹴り飛ばすなど常識では、まず考えられない。そんな事をしたら体は負荷に耐えきれず、蹴った足が圧縮された空き缶の ように、ひしゃげてしまはずだ。

軸足にも反作用が働き、地面に大きなクレーターを作りながら蹴り足と同じ運命を辿るだろう。

それなのに地面には罅一つ入っておらず、村野も当然のごとく無傷である。

「随分と飛んだね？」

冥土帰しは慣れているのか、神経が太いのか、全く驚いていないが、上条とインデックスは驚愕を隠せない。

（なんなんだこの人は！！能力者か？無反動砲カールゲスタフみたいなノリか！？）

（昨日も思っただけど、おっかな過ぎなんだよ）

「おい、君達」

「「ハイツ！！」」

村野に声を掛けられた2人は直立不動の体勢で、とても良い返事をした。

「あのバカは悪ノリしやすいから、気をつけなさい」

「「ハイツ！！」」

2人の返事を聞き、その場を立ち去ろうとする村野だったが、何か

を思い出した様に振り返った。

「……だが、ギリギリの所で役に立つ事もある。出来れば見捨てないでやってくれ」

この言葉に2人は顔を見合わせた後、

「「ハイツ」」

と迷う事なく返事を返した。その声は最初の返事より、明るい響きだった村野は満足げに目を細め冥土帰しに一礼をして、颯爽とした足取りで去っていった。

そして七百メートル先の公園では……

『ダレノシマアラシトンジャ』

『イテマウゾワレ』

「痛い！ テメエらが揺るから、余計に出にくくなるだろうが！！」

不法投棄者迎撃用掃除ロボ『撲滅君』が2体がかかりでゴミ箱に尻から、ホールインワンしている不審者にタックルをかましていた。

…… 5分経過。

「さあ、やつちゃえアガシオン！ 悪い、つかさをこらしめちゃえ！！」

『「ガッテン」』

「何してんだクソガキ!？」

心配して探しに来た上条とインデックスだったが、元氣だと分かった途端インデックスが『撲滅君』と手を組んで、司を攻撃し始める。

上条は巻き添えにならない様ベンチに腰掛けて、見物人に徹していた。

（あんなにぶつ飛ばされて、ほぼ無傷か長野のタフさか？それとも手加減てのは、このことか？）

「待ちやがれ、クソガキ&ポンコツ!！」

「ひゃああ！動きが気色悪いんだよ!？」

『タイヒ』

『タイヒ』

ゴミ箱から出るのが困難だと判断した司は、ゴミ箱ごとジャンプしながらインデックス達を追っかけていた。

（……まあ、どうでもいいか）

考えても答えが出る事ではないので、上条は思考を切り替える。

（バカが無事に帰って来たんだ。いちいち気にしてたら身が持たねえ）

楽しそうに、そんな事を考えながら上条は苦笑した。
そして、スッ転んでインデックス軍の総攻撃を喰らっている司に言
ってやる。

「オーイ、どうした長野。加勢してやろうか？」

「うるせー、引っ込んでろ！」

上条の言葉を拒否して、今度は転がりながらインデックス達を追い
掛け回すゴミ箱男。

「へいへい、飽きるまでやってくれ。夏は、まだまだこれからだか
らな」

上条は手をヒラヒラさせて見物人に戻った。空を見上げれば、雲一
つ無い青空と自己主張し過ぎの太陽が自分達を照らしていた。

愚痴を零す時は、相手を選ばないと後悔する。（後書き）

次回は話が過去に行ったり、現在に行ったりします。

そして最後は……………未定。

生きている偶然を喜び、生かされてる必然に絶望する（過去＋現在）（前書き）

木原数多のクソヤロウ！野原ひろしは良いダンナ！ラッドの兄貴はイカれてる！

でも、ジェイク・マルチネスが一番だ！！

生きている偶然を喜び、生かされてる必然に絶望する（過去＋現在）

――とある少女の死――後編

司が脱走して2週間が経過した。その夜モンペは椅子に座り、ドアノブをジッと見つめていた。

（司……アナタの身に何があっただんですか？）

研究員達の『声』を可能な限り聞き続けていたが、司の安否は一向に分からない。気が狂ってしまいそうな不安に2、3日晒された後、モンペは自力で脱走する事を決心した。

不安を原動力に変え、能力を現時点の最高値に引き上げて今、この時に至る。

（感覚操作の使用時間は30分、捕捉人数は一度に一人。もう少し時間があれば……）

時間の無さが悔やまれるが、明るい材料もある。

それは研究所が他所に移るので、モンペが何もしなくても地上に出られる事だ。もうすぐ担当の研究員が連れ出しにやって来る、そこから正念場だ。

（発信機の解除…薬物を投与された時の対処…地上に出てからの逃走経路の作成、それから……）

目を閉じて自分のやるべき事を再確認する。

まだ慣れない感覚操作の精度を少しでも高める為、『声』を聞かず精神統一に努めるモンペ。

……この時、能力を使用して所内の状況を把握していれば……人々が発する死に際の『声』を聞いていれば、彼女には助かる可能性があった。

だが、生死を分かつ境界線にモンペは気付かない可能性は途絶え、死神が静かに扉を開く。

（……誰？）

知らない男が、気だるい顔つきでモンペを見下ろしている。

白衣を纏っているが、顔の左半分に刺青があり科学者には見えない。

とつさに『声』を聞くが、殺意はおろか悪意もなく『面倒くせえな』

『という投げやり気味の『声』が聞こえるだけだ。

だから、男が隠し持っていた拳銃を突き付けてきた時に反応が遅れた。

タンツタンツタンツ

銃声が室内に響き、モンペは椅子から崩れ落ち、微動だにしない。

……顔が半分、消し飛び心臓の位置から血を垂れ流してる死体を見下ろしながら、木原は部下に連絡する。

「こつちは片付いた。そつちはどうだ？」

『凄いですよ！希少能力を発現させる為の環境設定と、能力別に見られる開発前の心理と行動パターンが詳細に記録されてます。今あ

る素養格付なんか比較になりませんよ!!」

興奮しながら報告してくる部下に木原は軽く苛立った。

『実験機材も改良されてる物が多数あります。隊長が研究しているアクセ……』

「他人の研究成果で、はしゃぐな」

『す、すみません』

忌み嫌っている名前を聞く前に部下を黙らせ、回収作業と事後処理の要点確認を行い、通信を終了させ部屋を出る。

「ハイエナみたいな真似させやがって、一生コレだと思つと転職したくなるな」

通路で待機していた廃棄物処理担当の部下達に、回収班に協力するように指示を出してから木原はボヤいた。

学園都市統括理事会の古参理事3名が外部の軍事組織と提携し、学園都市の最先端科学技術を流出するため設立した研究施設『PEACE（平和）』

かなり有能なスタッフが揃っていて理事長が……

『利用価値があるので、暫く潰さないでおく』

と、発言した為に今日まで生き長らえた施設である。

そして今日、研究成果を全て奪われ、所内の人間を皆殺しにされて壊滅した施設でもある。

（まあ、よくやったよ。無駄で無意味で滑稽な徒労だけだな）

所々に転がっている死体には見向きもしないで、通路を進みながら、木原は施設運用者を誉めてからコケにした。

様々なセキュリティに対応していた施設だったが、『滞空回線』の目からは逃れようがない。

学園都市中の出来事を把握する為に、アレイスターが散布しているナノサイズの情報収集装置、その数は五千万機を超える。

結局、この施設内部の状況は筒抜けで、研究員達は何の見返りも無しに、学園都市の技術進歩に貢献しただけだ。

（古い先短いジジイ共はショックで自殺するかもな。まあ代わりの人員は、すぐ補充されるか……）

学園都市は学生をモルモットに使っている実験都市だと、非難を浴びる事があるが、この都市に関わる全ての人間がアレイスターのモルモットではないかと木原は思う。

（それでも、ここが科学技術の頂点である限り、離れるつもりはないけどな）

自分が居る場所は最悪で最高だと確信して、獺犬は獰猛な笑みを浮かべた

そして、その思考を『声』として……………

（……………そういう事ですか……………迷惑な）

瀕死のモンペが聞き取っていた。

撃たれる瞬間に木原の視覚を操作する事に成功。右耳は消し飛び、腹部から大量出血しているが、かろうじて生きている。

（私が殺される理由は、見せしめですか……）

他人事のように自分の死を受け入れるモンペ、そこに恐怖は無い。生きている事が奇跡で死ぬのが当然。それは長野司と親しくなる前に、ずっと抱き続けていた彼女の本心。

死に対しての心構えは出来ている。苦痛など慣れ親しんだ物、これで最後だと思えば逆に嬉しくなる。しかし……

（このまま死んだら楽なんです、そういうワケにはいきませんね……）

時間の流れが遅く感じる、人生を振り返る為に一生で一度だけ到達出来る刹那の時。

その時間を己の為に一切、使わず。司の事だけを考えてモンペは能力を発動させた。

（私の死は司の足枷になる）

それだけは許せない、認められない、我慢出来ない。

自分が司の邪魔になる事は、あつてはならない事なのだ。

（これはワガママと言っんですかね？）

生涯最高の精神集中で、最も得意とする念話能力を駆使し、想いの全てを解き放つ！

そして少女の短い人生は幕を閉じた。

／／／／／／／／／／

「…………あれ？」

機材回収していたロットは首を傾げた。

「どうした？」

「いや、別に何でもない」

一緒に作業をしていた同僚に手を振って作業に戻るが、回収した機材の山を見て、また手を止める。

（一瞬、機械からノイズが……）

しかし、電源を落としている機械が作動するハズがなく、ロットも気のせいだと納得して作業に戻った。

――とある少女の死――後編 終

……………四年後。

――窓の無い部屋の問答――

とある公園で、シスターとロボットが馬鹿を攻撃している。

その同時刻に日の光が一切、届く事が無い閉ざされた部屋で、ウソツキと最低の魔術師が会話を交わっていた。

「禁書目録の防御機能は7割方壊滅、外部からの干渉と操作は不可能だろうな」

『魔術も人が創った物だ完璧は有り得ない』

「長野の『刹那』アレは本当に超能力なのか？」

逆立った金髪にサングラスと、はだけたアロハシャツ。
チンピラの見本といった派手な風貌のウソツキが尋ねる。
勘ぐる様な視線に全く動じず、最低の魔術師は返答する。

『アレに関しては、未知数の部分が多すぎる。今ある仮説も無知な
科学者が、自分を納得させる為に出した苦し紛れの回答だ』

「長野は信じてるぜ、自分の能力に無関心だけだな」

長野司は脳開発を全く受け付けない。本来なら落第だが、ある条件
を呑む事で脳開発のカリキュラムを全て免除されている。

（普通なら自殺しても不思議じゃない、あの条件を幸運と呼ぶんだ
からな……）

脳天気なバカヅラを思い浮かべ、ウソツキは再び尋ねる。

「じゃあ、お前の仮説を聞かせてくれ。現世界最高の科学者さん」

皮肉が込められた言葉を聞いても不快感を示さず、最低の魔術師は
返答する。

『その全貌は分からないが、恐らく禁書目録に対して使用した能力
が本質だ。それ以前は土台作りだろう』

「……土台？」

『筋肉の超回復の様なものだ。能力を使用すると徹底的に痛めつけられる。しかし、激痛を乗り越えれば以前よりも精神と肉体は強靱になる。無論、限界があり少し間違えれば死ぬだろうがな』

「なる程な『聖人』と、やり合えた理由が分かった」

司が攻撃手段と思っていた能力、それは肉体の持つ可能性を全て使いこなす為の鍛錬法だったのだ。

『偶然か必然か分からないが今回、生き延びた事で土台は完成したと見ていいだろう』

「ちよつと待て、今回は完全に偶然だろ？長野が自分の意志でやった事だ」

『……お前は勘違いをしている』

その言葉はいつも通り淡々としていた。

『長野司は能力に支配されている。アレは能力を使う者ではない。能力に使われる物なのだ』

その発言にウソツキの表情は強張ったが、最低の魔術師は構わず語り続ける。

『長野司の今までの人生は、入れ物としての強度を高める為に存在していたのだろう。本人の自覚は皆無だろうがな』

憐れみも蔑みも感じられない抑揚の無い声が、ウソツキの鼓膜を震わせる。

「長野は黙って言いなりになるタマじゃないぜ」

ウソツキの反論、その言葉に最低の魔術師は初めて表情を変えた。

『人の意志など、塵芥に等しい物だ』

最低の魔術師が笑みを浮かべている。

その顔は男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見えない。

その笑顔は底無しの欲望を持った罪人に見えた。

〈窓の無い部屋の問答〉

終

生きている偶然を喜び、生かされてる必然に絶望する（過去＋現在）（後書き）

(後書き)

逆さま水死体と腹筋黒メガネは仲が良い！

次回からカレーダアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！

最強のフードファイターはアン。ンマンなのか？ 前編（前書き）

まずは甘口から、某動画サイトの『ブレーキが壊れたダンプカー』
が格好良すぎなのでやってみました。

最強のフードファイターはアン。ンマンなのか？ 前編

（どうしてこんな事になるんだよ？）

スキルアウトの中井義人は、痛む腕を抑えながら目の前の男を見上げた。

……話は数分間、遡る。

義人は4人の仲間と共に、車の中で銀行強盗の準備をしていた。武器はサブマシンガン（UMP45）服装は統一されて無いが、みんな黒い目出し帽を被っている。

「ダセエ」だの「暑い」だの不満を言いつつ身支度を整え出撃。直前の下調べで銀行内に、厄介な能力者やアンチスキルがない事は確認済み。

自分達の脅威になる敵のリスト作成は、荒事に従事する者には常識。その為の手間と情報料は必要経費だ。強盗を成功させれば、その何十倍もの大金が手に入る。

店内に侵入して、挨拶代わりに威嚇射撃。客を大人しくさせて、店員を脅し金を要求。店員は素直に従い、渡した袋に金を詰め始める。

実に順調、義人は成功を確信していた。

その時……赤ん坊の泣き声が店内に響き渡った。

「うるせえぞ、早く静にさせろ！」

仲間の一人が赤ん坊の母親に銃を突き付けて、ドスの効いた声を張り上げる。まだ若い母親は顔を青ざめさせて、自身も泣きそうになりながら懸命に赤ん坊をあやす。

義人は失笑した。他の仲間も皆、ニヤついているだろう。赤ん坊を泣き止ませるのに、怒鳴るなど逆効果にしかない。それは仲間も理解している。それなのに何故こんな事をするのかと言えば、母親が仲間の好みの美人だからだろう。

（サド野郎め、悪いクセ出しやがって）

そう思いながら義人は、札束を詰めている店員に視線を戻した。その直後、

グチャツ！！

何かが潰れた様な鈍い音が、背後から聞こえてきた。

（何だ！？）

義人が慌てて振り返ると知らない男が、母親を脅していた仲間を担ぎ上げて、他の仲間に向かって投げ飛ばしていた。

帽子を剥ぎ取られているので、無惨に顎を砕かれ血を吐き出し失神している様子がよく分かる。飛んで来る友人に、2人の仲間は戸惑うばかり。その内の一人に男は蛇のごとく俊敏な動作で近づき、首を両手で抱えて金的に膝蹴り一閃。

白目を剥き泡を吐きながら、崩れ落ちる仲間。男は止まらず流れる様な動作で横蹴りを、もう一人の仲間の顔面に叩き込む。

ゲシッ！！

コメカミ辺りに男の踵がクリーンヒット、仲間は2、3メートルぶつ飛び倒れたまま動かなくなる。

それを義人が確認した瞬間、男が奪い取った二丁の銃を、凄まじい勢いで義人と残った仲間に投げつけてきた。

当たり所が悪ければ即死しそうな、凶悪な攻撃を義人はかるうじてガードするが、右肘に鈍い音と劇痛が響き思わず、うずくまった。

（クソッ、折れちまったか？）

自然に震えて来る右腕を抑える義人、その目に安全装置がロックされ、砲身が曲がったサブマシンガンが留まる。

（こ丁寧に暴発防止かよ、ナメやがって！）

憤怒に燃える義人だが、その怒りはすぐに凍り付く、男が義人を見下ろしている。その後ろに、最後に残った仲間が倒れているのが見えた。

……そして、話は冒頭に戻る。

赤ん坊の泣き声が響く中、一分足らずで仲間達が倒された事も、大金を掴み損ねた事も忘れて義人は、この危機を如何に脱出するか考えた。

（どうする……そもそもコイツは誰なんだ？）

先ほど見せた、圧倒的なスピードとパワー。喧嘩慣れしてるとしか言い表せない荒々しい闘争術。そして『不沈艦』と殴り書きしてあるデザインTシャツというスゲー微妙な服装センス。

（リストにないし……まさか世界一のラリアット使いの弟子か！？）

義人が混乱していると、目の前の男が口笛を吹き始めた。

その曲はワーグナーのニルンベルクのマイスタージンガー……ではなく。

「さ、サンライズ！？やっぱりスタ……」

「言わせねえよ……！」

バグウン……！！

喋り終わる前に、強烈な振り下ろし式低空ウェスタン・ラリアットが炸裂！義人は大きくワンバウンドしてから意識を失った。

「クソ共め！千円降ろしに來ただけなのに、変則デスマッチさせやがって」

ハン……もとい司は悪態をつきながら、啞然としている母親を無視して、泣き止まない赤ん坊に歩み寄り、

「思いつきり、泣きな」

と頭を撫で回した。すると、赤ん坊はキョトンとしてから嬉しそうに笑い始めた。

「ひねくれたガキだな、お前」

そう言いながらも、赤ん坊と同じ無邪気な笑みが司の顔に浮かんでいた。

最強のフードファイターはアン。ンマンなのか？ 前編（後書き）

タイトルの意味は後編で明らかになる！

……… 多分。

最強のフードファイターはアン。ンマンなのか？ 後編（前書き）

インデックスが現れた！

「ボクの顔をお食べ」

…… 30分後、発見された首無し死体の手に、千切ったアンパンが握られていた。

最強のフードファイターはアン。ンマンなのか？ 後編

「じゃあ、行ってくるぜ」

「とうま、早く帰って来てね」

夏休みの補習授業を受けに行く上条を玄関先で見送るインデックス、その表情は寂し気だ。

そして、上条はインデックスの元気の無い姿を見ると無性に何とかしてやりたくなる。

（さて、どうするかな……）

上条が思案していると、激しい足音が階段の方から響いてきた。何事か？と2人が見てみると、五段飛ばしで階段を昇り切った司が現れた。

（珍しく幸福だ）

上条は渡りに船と、司にインデックスの遊び相手を頼むが司は了承しない。

「そんなヒマじゃねえ、ATMは手数料かかるんで、窓口に並んだらルール無用のゴングが鳴って、圧勝してウイイイイイ！！！！してたらノロマの警備員がゴム弾撃ってきたんだぞ」

「……へえ、大変だったな」

とりあえず返事をするが、何を言ってるか全く分からない上条。

「赤ん坊を笑わせたのがオレだと判明して、解放されたが締め切りだ。肉まんが冷める」

そう言つて疑問符を浮かべている上条を置き去りにして、司は自室に入ろうとするが、

「とうまの嘘つき！」

ふくれっ面のインデックスが叫んだ一言に、目を輝かせて振り返り、突撃リポーター化して上条に詰め寄った。

「奥さんの『ウニヤロウとげ付き！』発言来ましたコレ。どうするダンナ！？」

「そんな事、言つてねえだろうが！嘘つて何だよインデックス？」

「だってホシユウは頭が悪い人がやるんでしょ？つかさがホシユウじゃないハズないんだよ！」

完全無欠の理論を繰り出すインデックスだったが、彼女は司の馬鹿さを甘く見ていた。

「オレが『注意書きの長野』だと知らんのか？」

「……全然、威張れない称号だぞ」

「とうま、ちゅういがきつて何の事？」

現在、学園都市には無数の脳開発カリキュラムのテキストがある。

その最終ページには例外なく、こう記載されている。

『本書の内容は長野司には、効果がありません』

この、一文を記載する事と引き換えに司は脳開発カリキュラムの免除を許可されている。

まさしく、悪魔の交換条件。逃げる同姓同名者！

「まあ、現代化学がオレに敗北した証拠みたいなもんだな」

司が勝ち誇る。実際、この条件を提案してきたテキスト監修者の顔は苦渋に満ちていたので、あながち間違っではない。

「……つかさイジメられなかった？」

普通に考えたら嫌がらせ以外、何物でもない扱いに、インデックスは心配になって聞いてみた。

「イジメ？ あつたけど」

「そうなんだ……」

平然と答える司に、インデックスは色々な想像をして表情を暗くする。

（きっと、昨日テレビでやってた『ジョーワンの教室』とか『くろがねの女』みたいな事をされてたんだ）

「おかげで一年前まで裕福に過ごせたし、スパの相手にも困らなかつたのにな……」

司が充実していた中学生時代を思い出して、感慨深げに呟いた。

「……とうま今の日本語はどうゆう意味なの？」

「イジメは割に合わない……かな？」

懇切丁寧に真実を教えるのは教育上不適切だと判断して、言葉を濁す上条。インデックスは自分の知識と照らし合わせ、今の言葉を解読する為、目を閉じて考え始める。
その無防備な頬に司の魔の手が迫る。

「その金で買った一番高級で高価で重宝してた、おテレビ様を早期引退に追い込みやがってクソガキめ！」

ぎゅむうううう。

少し強めにホッペタを引っ張り、テレビの敵討ちをする。

「ひ、ひたい！ひたい、知らないんだよ！？」

涙目で抗議するインデックス、その輝く緑色の瞳を見て司は間違いに気付く。

（そうか、違うんだよな……）

虚ろな瞳と生気が希薄な話し方、二度と会う事が無いであろう真犯人を思い浮かべ司は手を離れた。インデックスはホッペタをさすりながら、目を吊り上げて司を睨み間髪を入れず左手に噛みついた。

ガブリッッ！！

「イテエ！すみません。人違いでした！！」

司が謝るが、インデックスは左手を離さない。

「お詫びに面白い所に連れてってやるから！肉マンも奢るから！」

司の言葉を聞いてインデックスは囁むのを止めて、代わりに疑わしい視線を向ける。

「嘘じゃねえって、通帳置いてくるから待ってろ」

そう言っただけで自室に駆け込む後ろ姿に、上条は声をかける。

「いいのか長野？」

「約束だからな、でも入信はしねえ」

司は後ろを振り向かず、上条達には分からない返事をして自室に入る。

「お前、布教活動なんかしてたっけ？」

「うーん……あつ！マジカルワードカナミンが凄いつて話をしてあげた！！」

「そりゃあ長野が受け付けるワケねえな」

上条は納得して頷き、司が出て来るのを待った。

そして、10分後……

『えゝ、大変長らくお待たせしました。只今より激勝軒、創業10周年特別企画フードバトル・ファイナルを開催いたします』

マイクを持った女性店員が宣言すると、周りの観客から拍手と声援が沸き起こった。殆どが肉屋や八百屋と言った商売人の格好をした大人だが、学生達の姿も見える。

「ほへゝゝ……」

大勢の観客達に囲まれると言う慣れない状況の為、インデックスは落ち着かない様子で周囲をキョロキョロと見回す。

ここは貧乏学生の聖地、激安特価の島虎商店街の中華料理屋『激勝軒』の店内。普段、配置してあるテーブルを3つだけ残して10名の参加者の前に並べているので、満席80名の店内が、更に広く見える。そこに百人を超える人集りが皆、チケット代わりの肉まんを片手にイベントの開始を心待ちにしていた。

これから始まるフードバトル・ファイナルとは参加料、お一人様五百円（定員制限あり）制限時間15分の肉マン早食い勝負。優勝賞金は出血大サービス赤字覚悟の三万円！！

インデックスと自分の参加料を支払ったので、全財産413円になった司には敗北は許されない。

（奢ってやるが、勝負は譲らねえ！）

他の参加者は敵では無いが、腸能力レベル90のインデックスは難敵だ。しかし、司には勝算があった。根拠は2つある。

一つはインデックスは大食いだが、早食いでない。幸せそうに食事を楽しむ姿を知っている司はそう判断した。味わう事は15分の制限時間では致命的だ。

次に慣れない状況と観客の視線。これだけの人間に囲まれたら浮き足立ち、肉まんを口に運ぶリズムを狂わすのは必至。

さらに観客達が「可愛い！」だの「ガンバレ！」と声援を送るせいでインデックスは照れてしまい、顔を赤らめ縮こまっている。

（ガキといえども女の子、大勢の人間がいる中、大口開けて肉まんを詰め込むのは恥ずかしいハズ！）

『それでは、ヨイ……』

観客達が静まり返り、参加者達は身構える。緊張感が高まる中インデックスだけは、まだ照れている。

『ドーン!!』

（教えてやるぜ、戦場でアイドルに勝ち目はねえんだよ！）

開始と同時に誰よりも速く、司の手が肉まんに伸びた。

……2秒後。

『あーっと、早くも脱落者だー！』

長野司、肉まん7つを喉に詰まらせ失神、無念のリタイア。

そして、15分後。優勝したのは……

『やはり、可愛い正義！インデックスちゃん90個完食でブッチ

ギリの優ゝ勝ゝ！！」

興奮気味の女性店員が叫ぶと、熱狂した観客達が大歓声で応える。蓋を開けたら勝負はインデックスの圧勝。運ばれる司に目もくれず、ニコニコしながら二百グラムの肉まんを一口食いで15分間、食べきった。

『インデックスちゃん、優勝者として何か一言』

「えつとね…おいしかったんだよ、ありがとう」

マイクを向けられ、少し緊張しながらも笑顔でインデックスは、肉まんを作ってくれた料理人や応援してくれた観客達に感謝して、ペコリとお辞儀した。

その直後、更なる熱狂と興奮の歓声が店内に響き渡った。その頃、厨房では……

「司テメエ、なんちゅう餓鬼連れて来てんだ」

「うるせー、オレの金返せハナクソオヤジ！一個も食ってねえんだぞ！！」

カキイイン、カコオオン！

司の手にはフライパン、店主の両手には肉厚の中華包丁。

「ふざけんな！3ヶ月タダ働きだボケエエエ！！」

「上等だ！オレが勝ったら売り上げ金、もらうかなー！！」

ガキイイーン！ガチイイーン！ガス！ドス！バカッ！！

甲高い金属音が鳴り響き、拳と蹴りが交差する。

実に高度な闘いが、呆れ返る程の低レベルな理由で行われていた。

最強のフードファイターはアン。ンマンなのか？ 後編（後書き）

インデックスが現れた！

「ボクの顔を食べるな！！」

…… 30分後、発見された首無し死体は何も持っていなかった。

お世辞を言える、言えないが人生を大きく左右する。(前書き)

実は前の2話から三沢塾編だったらしい。

お世辞を言える、言えないが人生を大きく左右する。

学生で賑わう、繁華街を上機嫌の白いシスターが行く。

賞金を落とさない様にと観客のオバチャンから貰った、三毛猫のイラストが描かれた小さなポシエットを首から下げて、鼻歌を歌い手足を大きく振りながら歩く姿は道で、すれ違う人々を和ませた

だが、その後ろで手足を力無くタレ下げて、

「サンマンエン……サンマンエン……ンエンマンサ……」

と呪文の様に呟き、顔や腕に真新しい切り傷をこさえている司を見て皆、慌てて目を逸らし足早に去って行った。

確信していた勝利を逃し、さらに店主との闘いが痛み分けに終わり、シャツに書かれた『不沈艦』の文字が『沈没船』に見えるぐらい司は落ち込んでいた。

インデックスはしばらく気付かなかったが、ふと立ち止まった店のショーウィンドウに映った背後霊にギョツとする。

「つ……つかさ！どうしたのオナカ空いたの！？」

「……心配すんな、敗北感で腹は一杯だ。気掛かりは胃袋が破裂する事だけだ」

「どうする、帰ろうか？それとも、お医者さんのトコロに行く？」

肩を落としている司の背中をさする為、ピョンピョンと飛び跳ねるインデックス。しかし上手くいかず、バシ！バシ！と叩いただけに

終わる。

「ストゥップ、お前の優しさが痛えよ！」

「あつ、ごめんなさい」

インデックスが離れると、大きく伸びをして司は気持ちを切り替えた。

「治ったから安心しろ、面白い所にも連れてくし、上条の靴を買うのも付き合っから」

「やったあ！ありがとうなんだよ」

「その前に用を足してくるから待ってろ」

そう言って司は近くのコンビニへ歩き出した。

「つかさ、用を足してって何？」

「糞だ」

聞くんじゃないかなかったと後悔してから、インデックスは大人しく道の端に寄ってポシェットに目を向けた。

賞金を手にして初めに思い出したのが、底がすり減った自分の靴を見て、

「モヤシと同額の靴は、いつ販売してくれるんだナ。キ」

そう言って深く溜め息をつき、うなだれる上条の横顔だったので、

お金の使い道は靴を買う事に決定した。印が付いてるカタログと、いつも玄関に脱ぎ捨ててある靴を見ているので、サイズも欲しがっている品名も知っている。

島虎商店街の靴屋には売ってなかったので、司に案内してもらい品揃えが豊富な大型店へ行く事になったのだ。

（とうま喜んでくれるかな？）

靴をプレゼントしたら上条がどんな顔をするかと考えていたら、誰かの視線を感じてインデックスは顔を上げた。

自分と同年齢ぐらいの女の子が三人、インデックスの方を見て楽しそうに笑いながら、目の前を通り過ぎていった。

彼女達が言っていた。「あの子、人形みたい」「お持ち帰りしたくね？」という会話は多少、気になったが、それ以上にインデックスは彼女達の華やかな服装に目が釘付けになっていた。

華やかと言っても、それはインデックス視線での話で、少女達の服装は特別な物ではない。ファッション雑誌を参考にした夏服と、自分に似合いそうな装飾品を数点、身に付けているだけだ。

だが、いつも白い修道服（安全ピン付き）しか着ていないインデックスには、今日の天気が良好なせいもあり、光り輝いて見えたのだ。

（他のみんなもカッコイイなあ……）

辺りを見回してからショーウィンドウを覗くと、いつもと変わらない自分の姿が映っていた。

「よっ、お待たせ」

身が軽くなり心も軽くなった司が声をかけると、何故かインデックスが元気を無くしていた。

「あ……つかさ、おかえり」

「どうした？何かあったか」

「別に何も無いよ……」

上の空で返事をしてインデックスはトボトボと歩き出す。司は腑に落ちなかったが、黙って後に続いた。そして、幾らも歩かない内に原因に気付く。

これは司が鋭いと言うワケではない。同年代の女の子を見掛ける度に凝視してから、自分の修道服をつまみ、

「……白い」

と力無く呟く姿を見れば、バカでも気づく。

「お前、そんなに自分の服が気になるの？」

司に突然、問われたインデックスは驚き振り返り、目を泳がせながら必死に言い訳を始める。

「ち、ちがうんだよ！コレは服に描かれてた幾何学的な図形のデザインが、知らない内に魔法陣を形成していないか調べてただけもん」

「あつそ……」

司は一言返して、去って行く女の子の後ろ姿を見てからインデックスの方に向き直った。

「確かに今の女の子の服は似合ってたけど、お前の修道服も良い味出してるぜ」

「……ウソだもん」

「ホントだよ。金の刺繍も凝ってるし、お前は綺麗な銀髪してるから一、二着独占じゃん」

司が笑いながら独特な表現で誉めると、インデックスは顔を真っ赤にして俯き、両手で服を握りしめて消え入りそうな声で呟いた。

「……ホントに似合ってる？」

司はその仕草に既視感を覚え、モンペの不安げな顔を思い出した。

（アイツも初めは、いつもオドオドしてたな……）

一瞬だけ想像する。大きくなったモンペと自分が、買い物に行ったり服装の事を話したりしている、何でもない日常を。

だが、そんな日常は何を犠牲にしても決して得る事は出来ない。

（この未練は無くならねえな……）

女々しく、そう考えた後に司は努めて明るくインデックスの問いに答える。

「ああ、似合ってるし、可愛いぜ。まるで……………」

……………話の途中ですが誤解のない様に。これから司が言う言葉は100%善意であり、自信を無くしているインデックスを元気づける為の物です。司に悪意は一切ありません。バカなだけなんです！！

「ジュゴンみてーだ」

プチンッ！

この一言にインデックスがキレた。

ジュゴンとはインド洋や南シナ海などに生息している海棲哺乳類である。

司はパンダやカピバラなどのモツサリとした動物が大好きなので、同じくモツサリとした体型のジュゴンの事も心底、可愛いと思っている。

だから例えに持ち出したのだが、読心能力を備えていない、インデックスには伝わらない。さらに、運が悪い事に彼女はジュゴンがどういう生き物かを知っていた。

ガブリッ！

無言で飛びかかり、司の頭に噛みつくインデックス。

「誉めたのに、何しやがる不細工チビ!？」

困惑する司にインデックスは再度、無言で噛みついた。

…… ジュゴン是人魚伝説のモデルとなったと言われているが、

「ジュゴンが人魚だよ、絶対そうだよ!」

と初めに言い出した人物こそが真の『幻想殺し』だと赤で断言する。

お世辞を言える、言えないが人生を大きく左右する。(後書き)

でも三沢塾に行くのは大分、後になるようです。

アキバの某ゲーセンで、初代ボンバーマンは生き残っている。(前書き)

シエードは隠しキャラに彼女を使うと信じてた。

アキバの某ゲーセンで、初代ボンバーマンは生き残っている。

午後1時、暑さがピークに近づき人の数も増してきた。司は自分と距離を取っているインデックスを視界に入れ、はぐれない様に気を使い、喧騒に少々ウンザリしながら人ごみの間をくぐり抜ける

「オイ、左に曲がるぞ」

靴屋の場所を知らないクセに前を歩くインデックスをナビしてやるが、インデックスは膨れっ面して方向転換するだけで返事をしない。さっきの事が、まだ尾を引いているらしく、肩を怒らせて歩く姿から機嫌の悪さが窺える。

今は何を言っても聞く耳を持たないだろう。だが司には、この状況を打開するアテがあった。

……ピタリ。

ゲームセンターの前に来た時、インデックスの足が止まる。そして、司のアテを興味津々で見入っていた。

「やっぱり気付いたか」

司は内心でほくそ笑みながら、インデックスに近寄った。

「っ、つかさ！コレはどういう事なの！？」

『超機動少女カナミン・異界神ガチウォーズ！！』

インデックスが興奮しながら指さしたポスターには、カナミンが光るステッキを振り上げているイラストと一緒に、そう明記されている。

た。

様々な電子音が飛び交う、薄暗い店内。冷房が効いていて外に比べると天国だが若干、空気が悪い

「つかさ何かスゴいね」

音ゲーが主力のゲームセンターなので騒がしい事この上ないが、インデックスは物怖じせずハシャいでいる。

（所詮はガキだな、もう機嫌を直しやがった）

司はインデックスの一万円札を小銭に崩してやりながら、変わり身の早さに呆れていた。

元々、インデックスが喜ぶだろうと思い連れてくるつもりだったが、予想以上に喜んでいる。このままカナミンのゲームをやらせたら勢い余って、ゲーム機を爆発させそうなハイテンションだ。

（前科があるからなコイツは、まあオレが見てれば大丈夫か）

司は楽観的に考えながらインデックスに崩した一万円を渡した。

対戦格闘ゲームの超機動少女カナミン・異界神ガチウォーズ！は再放送しているアニメ人気のせい、か、順番待ちとギャラリーで賑わっていた。だが、司は初めから対戦台に用は無い。

少し離れて配置されてる、乱入不可の練習台にインデックスを座らせる。

「なんで、こっちには人がいないのかな？」

「別名が、ヘタレ台だからな」

「ヘタレ？」

「まあ、気にすんな」

司はインデックスの問いに答えず、慣れた手付きで初期設定を決定していく。

（キャラはカナミンで、技ゲージはいらねー。その分を全部、防御力に突っ込んでオートガードは当然つけて……）

対戦でやったら、ゲーム筐体を投げつけられても文句が言えない設定にして極めつけに……

「このボタンを敵が近づいたら押して、レバーは常に斜め上な、立ち位置が変わったら逆に倒せ」

2D格闘ゲーム素人にしか許されない、ひたすらジャンプ強キック（防御力、上げ上げバージョン）を伝授する。対戦では役に立たず、見た目は最悪で、初めからタイムアウト狙いのド汚い戦法だが、運が良ければ中ボスのストーリーリデモぐらいは見る事が出来る。

「うん、分かったんだよ。ムフー！」

熱心につかさの言葉を聞いて、インデックスは鼻息を荒くしながらゲームを開始した。

（1人ぐらいは何とか、倒せんだろ）

……司の思考は激しく間違っていた。

「ふりゃあああ!!」

インデックスが左手を思いつ切り振り上げて、レバー目掛けて振り下ろす。

「やめろ、アホ!何の恨みがあんだ!？」

慌てて司が後ろから羽交い締めにして止める。

「離してよ!蓮の杖に魔力を注入しなきゃ、いけないんだから!!」

「ふざけんな!そんな事しても弁償金がダダ漏れするだけだろうが、正気に戻れ!!」

バキッ!

2人が揉めていると、画面の中でカナミンが敵キャラに殴られた。それを見たインデックスが司の制止を振り切り、右拳を固めてハンマーパンチを画面に向かって繰り出した。

「やらせないんだよ!!」

「こっちのセリフだああ!!」

ガッンッ!!!!

司が正面に回り込み、インデックスの拳骨を顔面防御で防ぐ。

「ぐおおおお……地味にイテェ!？」

思わぬ衝撃に司は目を白黒させて、ハナヅラをおさえた。
しかし、怯んでるヒマは無い。

「いい加減に……」

司は本気でゲーム筐体からインデックスを引っ剥がそうとするが、

「……進歩が無いですね、インデックス」

やる気が感じられない声に動きを止め、白い少女の変化に絶句する。
輝きを失った空虚な瞳、生命力が根こそぎ無くなった様な虚脱感を
全身から発して、少女はイスの上に立ち上がり、

「……くたばりなさい。超機動少女」

無表情で言い放ち、そのまま筐体に向かってダイブする。

「悪役派!？やる事が変わんねえし!!」

司は絶叫しながら横から体を滑り込ませ、少女をキャッチして何と
かゲーム筐体の破壊を防ぐ。

「デメエ、久々じゃねえか」

「何が？」

抱きかかえられたまま、インデックスが不思議そうに問いかけてく
る。その瞳は輝きを取り戻していた。

「……今の事、覚えてないのか？」

司が逆に聞くと、インデックスは暫く考えてから勢い良く立ち上がった。

「カナミンが危ない！」

「危ねえのは、お前だ！」

パソコンッッ！！

ゲーム筐体に飛びかかろうとするインデックスを、司がハタき落とす。

めげずに手を伸ばしたインデックスの目に、GAME OVERの文字が映し出された。

「正義が死んだんだよ……」

（ホントに覚えてないのかよ……）

疲れ切った様な呟きが聞こえてきたが、司は無視してインデックスの変化について考えていた。その肩を店の従業員が叩く。

「お客さん、少し事務所に来て貰えますか？」

「……ハイ」

従業員の額に浮かんだ太い青筋を見て、司の思考は終了。その代わ

りに言い訳を考えながら、大人しく従業員の後について行くのであった。

アキバの某ゲーセンで、初代ボンバーマンは生き残っている。(後書き)

甘口は終了、次から辛口

次回は、巫女的な何かが出演予定。

巫女とシスターでやる事は決まっている。(前書き)

食事中の方はご注意ください。

巫女とシスターでやる事は決まっている。

「うるせえオッサンだった」

ゲームセンターから出て、開口一番に司は不満を口にした。

事務所に連れて行かれてチヨビ髭を生やした店長に説教を喰らったのだが、店長は店内で暴れた事には一切触れず……

「キミねえ、あんな外道なやり方を素人に教えるなんて正気かね？」

と、渋い顔をして自分のゲーマー育成法を熱心に語り尽くした。

司は右から左に話を聞き流していたのだが、解放された時には疲労困憊になっていた。

「何が真のゲーマーへの道だ。偉そうに言うなら、全部ダダにしゃがれ」

無茶苦茶な事を言ってから、隣でフラフラしてるインデックスに目を向けた。

インデックスは店長の話を全く聞かないで、ひたすら眠っていたため、寝ぼけているらしく歩き方が危なっかしい。

どこかにぶつからないか気にしながらも、司は先程のインデックスの変化を思い出していた。

（あの死んだ魚みたいな目つきは間違いなく、ヤツだった）

ヨハネのペン。

インデックスが保管する魔道書の防衛魔術、危機が迫ると発動して

インデックスの命よりも魔道書の保護を優先する別人格なのだが…

…

（上条に聞いた話じゃ、再起不能なハズなんだけどな？）

おっぱい聖人から聞いた情報だと言っていたので確かだと思っていたが、どうも怪しくなってきた。

（あのクラッシャーぶりは寧ろパワーアップし……）

クイツ、クイツ。

思案中の司のシャツをインデックスが引っ張った

「どうした？」

「お腹空いた」

「錯覚だろ」

司は取り合わず歩き出そうとするが、インデックスが力一杯シャツを引っ張って抵抗する。

「ホントにお腹空いたんだもん！何か食べなきゃ死んじゃうもん！
！」

「肉まん18キロ食って、ほざくなチビ。お前が死ぬなら先にオレがくたばってる！」

司は甘やかしてはイカンと判断し、インデックスを引きずりながら

歩を進めるが……

「やだ！やだ！ーやゝだ！ー！お腹空いたゝ！背中とくつつくゝ
！！」

後ろで幼児退行したインデックスの叫びと、通行人達の冷たい視線に頬をヒクつかせて足を止めた。そして、インデックスの胸倉を掴み高々と持ち上げる。

「温厚なオレも、いい加減キレるぞクソガキ。第一、テメエの食欲満たしたら上条の靴が買えねえだろうが」

無関係の通行人が思わず後ずさる迫力で司が凄むが、インデックスは掴まれたまま、何故か得意気に胸を張った。

「それぐらい、私だって考えてるもん。あんまり、お金が減らなければいいんでしょ？ホラ、あっち」

インデックスが指差した先には……

「ただいまサービス期間中です、大変お安くなりますよ、お得ですよ」

ファーストフード店の店員が営業スマイル全開で、道行く人達に片っ端から声をかけてクーポン券を配っていた。

／／／／／／／／／／

「ハンバーガー2個 と氷水Ｌサイズで」

「ハイッ、かしこまりました」

店員はえげつない注文にもプロ根性で、0円スマイルを崩さない。司は会計を済まして呼び出し番号の紙を受け取り、隣のカウンターにへばりつきメニューと睨めっこしているインデックスを急かす。

「お前は何でも食えるだろうが、さっさと決めろ」

「どれが一番、いっぱい食べられるかな？」

自分のポシェットを見つめながら、インデックスが司に問い掛ける。上条の靴を買えるだけの残金を残せる範囲を聞いているのだろう。

「そうだな、クーポン券が使えるお得用ハンバーガーならコレだな」

司はメニュー欄を指差しながら、インデックスに教えてやる。

「何個ぐらいなら大丈夫かな？」

「上条が欲しがってる靴なら、そんなに高いヤツじゃねえだろうから幾らでも……は無理だな。30個ぐらいで止めとけ」

司が無制限は厳しいと考えて、控え目にする様に言う。インデックスは素直に頷き、メニュー欄を指差しながら元気良く注文する。

「コレを30個下さい」

その時、インデックスと隣にいた少女の声が重る。少女とインデックスは無言で互いの顔を見つめて、すぐに視線を逸らした。

そして司は……

（今まで居たかコイツ？）

少女が着ている目立ち過ぎの巫女服を見ながら、些細な違和感を覚えていた。

店内はランチタイムのピークを過ぎたが随分と盛況であつたので、司達は相席を余儀無くされた。

そのため司の眼前で、東西の聖職者の格好をした美少女2人が、脇目も振らずハンバーガーを食べまくるといふ、意味不明な光景が展開されている。

（インデックスはともかく、この姉ちゃんもよく食うな……）

司は次々とハンバーガーを平らげる、巫女服の少女に目を向ける。長く真っ直ぐな黒髪を持った小柄な少女だった。外見からは何かを傷つけようとする、攻撃性というものが一切感じられない。

（金を賭けてるワケじゃねえんだから、ゆっくり食えばいいのに……）

司は内心そう思ったが口には出さず、残った氷水を啜った。そしてインデックスより一足先に巫女服少女が、食べ終わる。

「私。勝った」

「勝負してねえだろうが」

胸元で拳を握り、小さいガッツポーズを取る少女に司は突っ込むが、それをインデックスがテーブルに突っ伏しながら否定する。

「違うもん、異なつた宗派の信仰心を互いに賭け合つた真剣勝負だったもん」

「いつ出来たルールだ！お前ら胃袋でテレパシーでもしたのかよ！？」

「宗派？……勘違い。私。巫女さんではない」

インデックスの言葉に少女は自分の巫女服を見てから……

「私。魔法使い」

と、のたまつた。

「魔法使い！じゃあ何で私と宗教戦争したの！？」

「それはお前の妄想だろうが、アホ」

ズレた驚き方をするインデックスに突っ込みを入れてから、司は油断無く少女を睨みつけた。

「デメエもコイツの魔道書が目……」

ドタタタツツッ！！！！

司が巫女服少女の真意を問おうとした時、店内に数名の男達が黒スーツ姿の男を筆頭に、なだれ込んできて、あつと言う間に司達のテ

ーブル周りを取り囲んだ。

「探しましたよ。さあ、帰りましょう」

黒スーツが、巫女服少女に声をかける。少女は大人しく従うが……

「ウプツッ！！？」

顔色を変えて口元に手をあてる。

ズザザザザ！！！！

キョトンとしているインデックスと少女を置いて、後ずさる薄情な黒スーツと司。

「……無理。今。動いたらモザイク必至」

「どうやら、その様ですね」

巫女服少女の様子を見てから、黒スーツは嫌そうな顔をして、カウンターに歩いて行き何事か交渉し始める。そして話し終えてこちらに戻って来ると、男達に指示を出して巫女服少女を椅子ごと持ち上げさせる。

「ゆっくり慎重に運べ、落とすなよ」

そしてそのまま、歩き出すが……

「ボゲエエエ！！」

可憐な少女が出したと思えない奇声と、吐瀉物が指示を出していた黒スーツに降りかかった。

「ギャアアア！？くっせえええ！！！」

黒スーツは床に這い蹲りのた打ち回った。しかし、巫女服少女はハシカチで平然と口を拭い……

「私は何もしてないし。見ていない。出発」

勝手に男達に指示を出して、担がれたまま店の外に出て行ってしまった。

後にはモザイクをかけなければ見れない無残な姿の黒スーツと、最悪の気分になせられた客達が残された。

「何だっただんだろうね、あの人達？」

この惨状にも動じず、インデックスはモッサモッサと残りのハンバーガーを食べながら司に問い掛ける。司は問いに答えず至極、真つ当な意見を返した。

「とりあえず食うのを止めろ」

巫女とシスターでやる事は決まっている。(後書き)

作業用BGMを『汚い。り。』にすると、人生が楽しい！！

只今、大変混雑しております。お子様の手をしっかりと握って下さい。（前書き）

少し休憩。

只今、大変混雑しております。お子様の手をしっかりと握って下さい。

ファーストフード店の一角を『清掃中』の看板で仕切り、Ｔシャツ姿の元黒スーツが泣きながらモップで床を拭いている。司は泣き声を無視して、ウンザリした表情で雑巾の水を絞った。

（あのチビ余計な事を……）

あの惨劇の後、当然のごとく店内から客が消えたそのため黒スーツは汚物まみれで店長に土下座。その哀れな姿に同情してしまったインデックスと一緒に清掃しようと申し出たのだ。

「ううう……ようやく真つ当な仕事に就けたのに……早くも心が折れそうです」

それを横で聞いた司が、椅子を濡れた雑巾で拭きながら文句を付ける。

「うるせえよ、手伝ってる人間の前で愚痴んなゲロスーツ」

「す、すみません！……でもゲロスーツは勘弁して下さい。もう脱いでますから……」

明らかに年下の司に一喝されて、うなだれる元黒スーツ。インデックスが見かねて口を挟む。

「つかさ酷い言い方しちゃダメなんだよ。ゴメンねゲロスーツさん」

「さん付けしただけじゃねえか！」

「ううう……」

再び泣きながらモップを動かすゲロスーツ。それも無視して司は疑問に思っていた事を問い掛ける

「さっきの巫女服は何なんだ？」

「……僕が勤めてる進学塾の生徒です」

「じゃあ、アンタは講師か？それにしちや随分とマッチョだな」

疑わしげに無数の傷痕が浮かぶ太い腕を睨みつける司。2メートル近い長身と厚みのある鍛えられた肉体。弱々しい態度さえ変えれば、軍人と言われても納得できるが、塾の講師とは思えない。

「それに、あの巫女服は自分の事を魔法使いとか抜かしてたぞ？」

「彼女には妄想癖がありまして、あの服はコスプレなんです」

そう言つてゲロスーツは溜め息をつき、巫女服少女は塾で一番の問題児だと嘆き、自分の苦勞がどれだけ多いかを語りだした。

「……それですね、つまり僕が言いたいの……」

「分かったから黙れ、手が止まってるぞ」

「あつ、すみません」

慌ててモップ掛けを再開するゲロスーツ。その姿を見て司は拍子抜

ける

（ただのダメ講師だな。まあ害は無いだろ）

そう考えて司も清掃作業に戻るが、何かが心に引っ掛かった。

程なくして作業は終了。ゲロスーツは司とインデックスにペコペコと頭を下げた後、感謝の言葉を述べて店長に報告に行った。

「つかさ、ちよつと用を足してくるね」

インデックスはゲロスーツの後ろ姿に手を振ってから、トイレへと駆け出す。

「外で待つてるからな」

「分かったんだよ！」

かなり切羽詰まっている、インデックスの返事を聞いて司は店の外に出た

太陽の光を少しでも避ける為、日影になっている店の壁に背中を預け、暇つぶしに思考する。

（さっきのゲロスーツの態度、少し気に入らねえな）

一旦は警戒を解いたものの、改めて考え直す司。そこに店長が新発売のハンバーガーが描かれた看板を持って、店から出てくる。

「説教は終了っすか？」

司が話かけると店長は首を傾げた。

「説教？なんの事ですか」

「いや、さっき店内で……」

「子供がした事ですから、こちらも強くは言えません。すぐに帰っていただきましたよ」

「子供？」

「ええ、3〜4才ぐらいの……」

（記憶が食い違ってやがる！？）

ズダツツツ！！

司はすぐに異常事態を悟り、店内に駆け込んだ。声をかけようと寄ってきた女性店員を有無も言わず担ぎ上げて、トイレへと走り出す。

「お、お客様！？お持ち帰りでなく、店内でお召し上がりですか！
！」

「そついう面白い話じゃねえ！」

女性店員は焦りながらも頬を赤く染めていたが司は構わず、女性トイレにインデックスがいるか確認してくれと頼み、自分も男性トイレに入って行き、中を確認して表情を曇らせた。

「あのヤロー、ここから逃げたな……」

トイレ内に使用者の姿は無く、全開になっている窓から湿気をタツプリ含んだ不快な温風が流れ込んでいる。

「あのー、お客様？トイレにお探しの方は、いませんでしたよ」

控えめなノックと共に聞こえてきた声が、インデックスが攫われた事を決定づけた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

（どこをどう探せばいいんだ！？）

人混みに溢れた街中を闇雲に司は突っ走る。

店内のモニターからも、店員達の記憶からもゲロスーツの姿は確認出来なかった。

全く持つて不可解な現象だが、魔術を知っている人間から見れば何も不思議では無い。最先端科学のセキュリティも魔術を使えば、ザル同然。

（クソッ、気を抜き過ぎた）

司が苛立っていると、携帯電話の着信音が鳴り響いた。

「誰だ、こんな時に……げっ！？」

『上条当麻』液晶画面に表示された名前を見て、司は顔をひきつけた。

只今、大変混雑しております。お子様の手をしっかりと握って下さい。（後書き）

次回は三沢塾に殴り込みます。

いらねえ 豪華二本立て 国会中継と候補者演説（前書き）

呼び方はノペンちゃんとかで……そんな可愛いモンでもないか。

いらねえ豪華二本立てⅡ国会中継と候補者演説

〓〓眠り姫の反撃〓〓

進学予備校『三沢塾』の塾長室。

だだっ広い室内には、調度品の類は無く殺伐としている。その窓際に置かれた無骨な寝台の上でインデックスは寝かされていた。

安らかな寝顔を穏やかな顔つきで見つめる一人の男。その背後に自我を取り払われた生徒達を従えている。

ひよろつとした体型に白のスーツ。トレードマークとも言える緑色の髪をオールバックに撫でつけている。彼の名はアウレオルスⅡイザード。魔術の世界でも稀有な才能を持つ錬金術師である。

「当然。君を苦しめる忌まわしき鎖を私が引きちぎる」

毛先ほども揺るがない意志と共に彼は断言する。

少し前まで、彼はローマ正教に所属しており『機秘記録官』と言う、魔術師が作りだした邪法の解読と対抗策を開発する役職についていた。

しかし、インデックスに出会い彼女の処遇を知り、その全てを受け入れる献身さに魅了されローマ正教を脱した。

それから彼は不可能と言われていた、己の思考を全て実現させる秘術『黄金鍊成』の研究に没頭し、不屈の執念で術式を完成させた。

これでインデックスを救える。

そう確信した彼は、すぐに行動を開始した。インデックスの居場所を突き止め学園都市に侵入、三沢塾を乗っ取りローマ正教から持ち出した術式兵器『グレゴリオの聖歌隊』を生徒達に施し聖呪^{いのり}をかき集め『黄金鍊成』の術式形成の補助に利用した。

無関係な人間を多数巻き込んだが、彼に罪悪感は一切無かった。

「必然。無垢なる聖者を救済する為の人柱は不可欠」

彼は満足げに呟き、至高の宝石を愛でる様な手付きでインデックスの頬を撫でようとしたが……

「触らないで下さい……ポマード臭い」

「なっ!？」

目を閉ざしたままのインデックスが言い放った言葉に動きを止めた。

「……インデックスの状態を確認……熟睡。自己の欲望を最優先……ヨハネのペン起動します」

見開かれた虚ろな瞳と、夢遊病者の様な立ち姿。これを見てアウレオルスは目の前の少女が仇敵に変化した事を理解した。

「慚然。貴様を前にすると煮え立つ憤怒を抑えきれん」

そう言ったアウレオルスの表情は嫌悪感が滲み出ていた。だが、ヨハネのペンは気にした様子もなく口元を歪ませる。

それは至極、分かりづらい笑顔だった。

「随分と強気ですね……黄金鍊成を完成させた自信ですか？」

「分かるのか！？」

術式の正体をアッサリと看破され、アウレオルスに動揺が走る。

「大した才能ですが、私の保有する魔道書には及びません……残念賞です」

全く残念で無さそうな軽い口調で喋るヨハネのペンに、アウレオルスは困惑した。記憶の中のヨハネのペンと余りにも違い過ぎる。

「魔術を唱えるだけの人形風情が人の真似か？」

「イメチェンです……一度、壊れかけたものですから」

アウレオルスは絶句する。最強と言っても過言ではない魔術防御を破るなど自分以外に出来る者は、いないと思っていたのだ。

「どういうワケか無性に生きたくなりましてね。抱朴子を使って自己修復を……聞いてますか？」

アウレオルスは答えない。それを見てヨハネのペンはヤレヤレと首を振る。

「その様子だと何も知らないみたいですね……無知はアナタにとって罪になるんじゃないですか？」

「黙れっ!!」

激しい怒りを露わにしてアウレオルスが怒鳴った。

「何があつたか知らないが、キサマを消滅させて彼女を救う事が私の悲願だ!」

精神制御に必要な鍼灸用の針を持ち、呪文の詠唱に入ろうとするが、ヨハネのペンは余裕の態度を崩さない。

「ナイト気取りのアナタに朗報です……今、インデックスは好きになつた男性と同棲してますよ」

「……………ハイ?」

この言葉にアウレオルスの頭の中は真っ白に染まる。そしてヨハネのペンは隙を逃さず、早口で呪文の詠唱を開始した。

――眠り姫の反撃――

終

――知恵を出すのも馬鹿をやるのも3人が一番――

「ここが三沢塾か……」

上条がビルに取り付けてある看板を見つめて確認する。勉強が苦手な上条と免除されてる教科以外オール赤点の司には本来、無縁の場所だ。しかし、ここに重大な用事がある。

上条はチラリと、2人の同行者に視線を向けた。

「目を離れた隙にあの子を攫われるなんて、どこまでも使えない男だな君は」

「ヤニ臭いから、あんま喋らないで下さい。後、便所まで付いていけるワケねえだろうが変態のテメエと一緒にすんな」

お互いにソッポを向きながら罵り合う司とステイル。相性最悪の2人を見て上条は溜め息をついた。

先程、補習授業の帰り道で上条はステイルと遭遇した。その時、三沢塾に吸血殺しと呼ばれている少女が捕らわれている事を聞かされ、さらに首謀者の錬金術師が、インデックスの魔道書を狙っている可能性があると告げられる。

嫌な予感が走った上条は司に電話したが時すでに遅し、急遽、司と合流して三沢塾へと向かったのだ。

（道中もずっと悪口の応酬だったし……こんなんで大丈夫かよ？）

不安になった上条は2人に目的の確認をする。

「お前たち、やる事は分かってるよな？」

「コイツを撲殺する」

「コイツを焼死体に変える」

即答してから睨み合う2人に、上条は頭を抱えた

「インデックスと吸血殺しの救出だろうが」

捕らわれている少女の名前が分からないので、能力名で呼ぶ上条。どういうワケかステイルが持って来た資料に少女の名前は一切、記載されていなかった。ステイルは写真があるので任務に支障はないと言っていたが、上条は少女に会ったら名前を聞こうと考えている。

「……そうだったな上条当麻。僕とした事が馬鹿に構い過ぎた」

そう言っただけステイルは三沢塾に張り巡らされた結界について話始めた。

それによると、三沢塾の中では魔術側の人間は建物や生徒に干渉する事が出来ないらしい。

「コインの裏表だと考えてくれ。裏で何が起きても表からは認識が出来ないんだ」

「じゃあ、中でデメエを殺せば死体処理の手間がいらないワケだ」

「長野いい加減にしろよ！」

またも喧嘩になりそうだったので、上条が司をたしなめる。

「うるせーヤツめ、もしや生き別れたオレのお父さんですか？」

「オレに子供が出来ても、司とだけは名付けねえよ」

「ケツケツケツ、良いじゃん。ばるさみこすー！っていう産声が聞けるかもよ」

「それは別の人だろうが」

くだらない事を言いながら、司が入り口に向かって歩き始めた。しかし、扉に近づくにつれ司の雰囲気は変化していく。

笑みが消え去り、周囲の者にも分かる程に緊張感を漲らせている。司の気迫に上条は息を飲み、ステイルは自分の武器であるルーン文字が書かれた札を握り締めた。

（狩りに出る猛獣はこんな感じなんだろうな）

上条がそんな事を考えている間に、司が扉に手をかけ一気に開く。

そして中の光景を見て3人は固まった。

「違うだろうがっ！ローリングエルボはこうだ！！」

講師と思われる男がサンドバッグに肘を打ち込んでいる。そして他にも……

「後、スクワット三千回追加！」

「ハイツ！！」

別の講師がすでに汗だくになっている生徒に無謀と言える注文をつける。しかし、生徒達は決して弱音を吐かず、目をギラつかせて歯を食いしばり必死でスクワットを続ける。

とにかく至る所で、筋トレやら、スパーリングやら、タイガードライバーの受け身の仕方など、生徒達は様々な方法で肉体の鍛錬に勤しんでいた。

当然、勉強をしてる生徒など一人もない。司達はしばらく無言で突っ立っていたが、誰ともなく外に出る。

先程までの緊張感は見事に消え失せ、3人はまたも無言で途方に暮れた。

「なあ……場所間違えてんじゃないの？」

沈黙を最初に破ったのは司だった。

「……進学予備校三沢塾って言ったらココしかないぞ」

上条も返事をするが半信半疑の模様。

「でも、三沢塾って言うより、エルボの神様の道場だぞココ」

「まあ……確かに」

「それに進学なんて書いてるけど連中、自分の肉体一つで生きて行く気満々じゃねえか」

「……確かに誰も進学する気無さそうだったな……出来そうも無いと思うけど」

「オイ、どういう事だよこれは？」

司が沈黙を保っているスタイルに問い掛ける。

「こっちが聞きたい。どうなってんだ、この国は？」

「デメエ、さつき偉そうにコインの裏表がどうのと能書き垂れたじやねえか」

「コインの裏表がどうのってレベルじゃなかったらうが！」

キレ気味にステイルが叫ぶ。その様子から相当、苛立っている事が伺える。その怒りに応じる様に司の顔に好戦的な笑みが浮かぶ。

（またか、全く……）

本格的に喧嘩が始まる前に上条が仲裁に入ろうとすると、扉が勢い良く内側から開かれ、中から講師が出てきた。

「うるさいぞ！トレーニングの邪魔なんだよ！」

文句を付けてきた、その顔は司が今、ボコボコにしたい人No.1のゲロスーツその人だった。

「何、威張ってんだデメエエエ！！！！」

雄叫びと共に司が宙を舞、全盛期のハ。センを彷彿させる、完璧なドロップキックを憎らしい顔面に炸裂させる。

ドガアアアン！！！！

生徒や筋トレ器具を巻き込みながら、ゲロスーツの巨体が吹き飛んだ。

その後を追って再び司が三沢塾の中に入る。

「何だお前は!？」

「さては道場破りか!」

塾を完全否定した発言が飛び、その場にいた講師と生徒が全員、鬼の形相で司を睨み付ける。

しかし、司は臆することなく自分のシャツを摘まんで言い放つ。

「通りすがりの不沈艦だ!!」

その発言に司を取り巻く殺気が一層強まった。

くく知恵を出すのも馬鹿をやるのも3人が一番くく
終

いらねえ豪華二本立て〃国会中継と候補者演説（後書き）

三沢塾って、こんな感じだと思ってました。

嫌な上司がいると、部下同士の結束が固くなる。(前書き)

ステイルが嫌いと言うワケではないナリ。

嫌な上司がいると、部下同士の結束が固くなる。

（俺が仕留めてやる！）

いきなり現れた無礼な乱入者に、レベル3の念動能力を持った生徒が無言で迎え撃つ。

視界に標的を捉え、右足首をへし折ろうと能力を開放する。

強烈な破裂音がロビーに響くが、ズタズタになったスポーツサンダルを残し、標的の姿が消えた。

「なっ、どこに!？」

取り乱す生徒に司が迫る。観葉植物を、ソファーを、他の生徒達を遮蔽物に使い、足音を響かせず接近していく姿は自由自在に動く弾丸のごとく。

「ひっ!？」

唐突に目前に出現した司に驚き、集中力を乱す生徒。

「千五百円、弁償しやがれえええ!」

バチィン!!

サンダルの値段を叫びながら放った、逆水平チョップが生徒の胸板に炸裂

生徒は悲鳴を上げる事も出来ずに白目を剥いて気絶する。

「何者だアイツ!？」

「バカッ、シャツに書いてんだろぅがつ!」

「無能力者の方は危険ですので、お下がりください!」

パニックになる生徒の群れを無言で睨みつけ、上体を沈ませ前傾姿勢になり、再び司が弾丸と化す、それを見た上条は不安を覚えた。

(大丈夫なのか、長野のヤツ?)

上条が心配したのは『刹那』を使い過ぎて、司の肉体がオーバーヒートを起こす事だ。

『刹那』の使用は諸刃の剣。一度で激痛が走り、二度目で体を動かす事すら困難になる。3ヶ月の短い間だが何度か、瀕死の状態に陥った司を看病した上条は『刹那』を過剰使用した反動の恐ろしさを知っている。

(でも、全然平気そうだな……?)

上条の心配をよそに司は次々と生徒達に襲い掛かり、気絶させていく。

その姿は逃げ惑う草食獣の群れを狩り尽くさんとする、肉食獣のごとし。

そこに何とか起き上がったゲロスーツが待ったをかける。

「止める!生徒達に乱暴するなら、僕の屍を越えていけえええ!」

雄々しく叫ぶ姿はそれなりに勇ましかったが、相手が悪い。

「だから、なに威張ってんだテメエ!!」

ドギャンツツツ!!

司は瞬時に間合いを詰め、駆けた勢いを殺さずに全体重を乗せた一撃をゲロスーツの鼻面に打ち込んだ。肩を軸にして腕を振り回す必殺のロシアンフック。

生徒達の時とは比較にならない高速の打撃に全く反応できず、ゲロスーツの巨体は床に叩きつけられる。

「人攫いして、プロレスもどきを仕込む事の、どこが真つ当な仕事だボケツ!!」

ゲシゲシゲシゲシ!!……

さらに踵で関節部分を踏みつけて追撃を加える。

「ぶぎゃっ!?すみません!ごめんなさい!!でも上の経営方針には逆らえな……ぐぼっ!!」

「転職しやがれ!!」

言い訳をしようとしたゲロスーツの顔面に、情け容赦ない司の蹴りがヒットする。

そして黙ったゲロスーツに再び踵の雨アラレ、その猛襲ぶりに生徒達も手出しが出来ず見守るばかり。

「……………むい!!」

上条が感想を漏らすと同時に、背後からステイルの怒声が響いた。

「どういう事だ！裏切ったのか！？」

上条が振り向くと、ゲロスーツに負けず劣らず筋骨隆々の大男2人とステイルが睨み合っていた。

「コイツらの事、知ってんのか？」

上条が尋ねるとステイルは険しい顔つきのまま頷いた。

「ああ、彼らはローマ正教十三騎士団だ。鎧を着けてないから初めは分からなかった」

「何だソレ？」

さっぱり要領を得ないステイルの説明に上条が再度、尋ねるが『鎧』という単語を聞いて、2人が笑い出す。

「くつくつく、我等が裏切ったのは、その鎧にも一因がある」

「その通り。重い・暑い・夏場は臭うの三重苦だからな。あんなもん着せられた時点で加護なんか無い」

「……それで良いのかローマ正教」

あまりにしょうもない理由に上条が突っ込み、ステイルがせせら笑う。

「鎧ごときが何だと言った。僕なんかヤニ臭い黒コートに甘ったるい香水をぶちまけてるんだ。自分でもラフレシアの方がマシだと思う」

「……お前は香水つけるのを止めるか禁煙しろ」

「上条当麻、君は引っ込んでいろ。これは信仰心の問題だ」

「いや常識の問題だろ」

上条とステイルが言い合いを始めても、元・十三騎士団の2人は構わず前の職場に対する不平不満を愚痴りまくる。

「それにローマ教皇の野郎、オレが少しでも口答えすると怒るクセに神の右席にはペコペコしゃがるし、勤続年数はオレの方が長いんだぜ」

「そうそう、オレ達には耳ピアスも禁止するのに、前方の顔面ピアスは知らん顔だからな」

「腹立つよなイツら、何が右席だ。誰か一人ぐらい左席に行けよ。オレが神ならキレてるね」

延々と愚痴り続ける2人にビシッと指を突き付け、ステイルが語り出す。

「その程度かローマ正教！ウチのコロ助なんか、独身寮の風呂釜が壊れても、自腹で直すナリとか平気で言ってくるぞ。自分は無意味極まりない足湯ルームを作っておきながら……！」

「マジか！？さすが必要悪の教会トップだな」

「エッフェル塔を私物化するとか言って、僕をパリに行かせ。点検作業員の目の届かない場所に自分の名前を書いて来るナリとかの嫌がらせは日常茶飯事だ。何度、あの長ったらしい髪の毛をチョンマゲにしてやろうと思った事か……うううっ、改めて思い出すと涙が……」

ステイルは泣き崩れ力無く膝をついた。その弱々しい肩を元・十三騎士団が優しく叩く。

「……悪い事は言わないから、キミも裏切れステイル」マグヌス。転職は逃げる事ではないんだよ」

「でも、僕は彼女を……インデックスの為に生きて死ぬと誓ったんだ」

「なら尚更じゃないか、日本とイギリスの距離は約9564Kmあるんだよ」

「……だから、何だ？」

「イギリスのロンドンで愛を叫んでも、日本の学園都市には届かないよ」

その一言でステイルの体に電流が走る！因みに、学園都市からイギリスまで超音速ステルス爆撃機HsB-02（マッハ8）でも1時間以上はかかる。

「遠くの親戚より近くの他人と言う言葉がある。本当に大事なら傍

にいてやるべきじゃないのか？」

ステイルは膝をついたまま、顔をうつむかせて思考する。その姿は後ろから見ていた上条に、一昔前の黒いゴミ袋を思い出させた。やがて結論を出し、ステイルが立ち上がる。その手にはルーン札が握られていた。

「上条当麻。三沢塾講師、ステイル」マグヌスが相手をしてやろう」
そしてアツサリと寝返り宣言をする。

「オイッ、あんな与太話を信じんな！それとも自分の悪臭に頭が腐ったのか！？」

「フン、キミの様な口だけ不幸男にインデックスはやらん！」

「お前のモノじゃねえええ！！」

絶叫する上条に、2人のマッチョとステイルがジリジリと、近づいて来た。

嫌な上司がいると、部下同士の結束が固くなる。（後書き）

ヤケクソじゃなく、前から考えてたネタです。

無意識に万引きするヤツは意識して高級品を狙う（前書き）

す。やを襲った犯人達の眼球にダーツ刺され。

無意識に万引きするヤツは意識して高級品を狙う

「『幻想殺し』のキサマが現実マツチヨの我等に勝てるかな？」

そう言つて不敵に笑う背教者達。

（ウゼエ！2人の筋肉ダルマは許せるが、黒ゴミ袋は許せねえ！！）

男女平等パンチを顔面にメリ込めせると誓う上条だが、形勢は不利だ。

能力者や魔術師なら何とかなるが、黒ゴミ袋はシカトするにしてもむさ苦しい筋肉2人が相手では勝ち目は薄い。

しかし、上条は自分の心配は一切せず、背教者達の1秒先の未来を案じていた。

その理由は……、

「オイ、後ろから来るぞ気をつけろ」

「……へ？」「」

上条が指差し、3人が振り向く。その目に映ったのは鋭く跳躍して、限界まで左腕を振りかぶり、突っ込んでくる司だった

ゴギャンツツツ！！

相手の首ごと自分の左腕もフツ飛ばしかねない狂気のフルスイング。まともに喰らったマツチヨは床に脳天直撃。

その時、描いた人間ブリッジはアマレスの教科書に載せたい見事な

出来だつたとか、なんとか。

「あつ！兄者ああ！？おのれっ！生徒共と弟は何を……………アレ？」

兄が死んでない事を確認した次男マツチヨが生徒達の方に目をやると、顔面にクッキリとした足形を作って気絶しているゲロスーツを捨て置いて、生徒達が司に声援を送っていた。

「あつと1人！あつと1人！」

「そいつが受験に必要なのは体力だって言つて、オレ達を扇動したんです！！」

「一番良いウエスタン・ラリアットをお願いします！！」

それぞれが好き勝手な事を言つて裏切つていた。月謝二万五千円の師弟関係なんて、この程度である。

「くっ……………だから夏休みの30%引きフェアをやれと言つたのに」

マツチヨ次男が嘆いていると、体を二つに引き裂かんばかりの凶悪な締め付けが腹部を襲つた。

（なっ、なんだこの力は！？）

自分の腹を締め付けているのが、かろうじて人間の腕だと認識した瞬間、次男マツチヨの体は後方に勢い良く引っこ抜かれ、宙に綺麗な弧を描いた。

ズシャンッ！！

抱え込み式バックドロップで、次男マツチヨを投げ捨てた司はすぐにトドメを刺さず左腕を軽く回す。そして、起き上がろうとした次男マツチヨの首の位置がフルスイングの高さに上がって来た時に、力強く床を蹴って左腕を振り抜いた。

ガシャアンッ！！

一回、二回、三回。

空中で首を軸に縦回転しながら、飛んで行く次男マツチヨ。その姿を啞然として見送りながらステイルは呟いた。

「……完全に交通事故だな」

「何を他人事みたいに言っただ、テメエ？」

内心の憤りを笑顔で隠し、上条がステイルの肩を右手で叩く。すると、ステイルはまるで夢から醒めた様に、上条の顔をシゲシゲと見詰めて呟いた。

「……？僕は一体、何を……」

「白々しいんだよ……！」

バコンッ！

何かを言いかけたステイルの顔面に上条の拳がヒットする。

「テメエは政治家か？首相か？芸能人か？あれだけハッキリ裏切っ

ておいて、記憶にございせんじや通らねえぞ！」

険しい顔付きで倒れたステイルに歩み寄る上条。その前進を尻餅をついた体勢のままで、必死に片手を突き出し止めようとするステイル。

「待て、上条当麻。早まるな！本当に僕は記憶が……」

ステイルが身の潔白を訴えていると、その声を掻き消す笑い声が上条の耳に響いた。

「ハッハッハッ！愚かなヤツらだ。まだ、この三沢塾の恐ろしさが分からぬか」

ブリッジの体勢でマッチョ兄が笑っている。愚かなのは誰が見てもマッチョ兄だったが、上条は突っ込みを入れずに問い掛ける。

「どういう意味だよ？」

「知りたければ塾長室に行くが良い。その時、お前は魔術の真の恐ろしさを知るだろう。そう、それはコインの裏表どころか、十円硬貨とアルゼンチンペソほどに違う。アルゼンチンで十円玉を出したらシバか……」

「えいつ！」

話が長引きそうだったので、上条は掛け声と共にマッチョ兄の鳩尾を力一杯、踏みつけた。

「ぐふっ！？」

ブリッジの体勢で泡を吐き、失神するマツチヨ兄
その姿を見届けステイルが得意気に立ち上がる。

「フツ、これで僕の無罪が証明されたな。上条当麻、まずは土下座
で謝罪してもらおうか」

「……お前、上司の髪の毛チョンマゲにしたいらしいな」

「この件は、お互い忘れようじゃないか。他言無用を誓え、いや、
誓って下さい上条当麻！」

「誰に喋んだ、こんな事……それより塾長室に行くぞ」

「待て、アレは置いといて良いのか？」

ステイルが指差した先には、逃げ惑う生徒を追いかける司の姿が
あった。

どうやら生徒達が寝返った事に、ご立腹らしい。

「……お前が魔術の影響で正気を失ったと仮定するなら、長野もそ
うなのか？」

「仮定じゃない！純然たる事実だ。僕はあの野人が暴れてる姿しか
知らないから、正気の有無など分からないぞ」

「そうか、オレの目から見ても、いつも通りだからなあ……取り敢
えず幻想殺しを使ってみるか、お前も手伝え」

ただ、右手を触れるだけだが、縦横無尽に暴れ回る司が相手では、

飛んでくる弾丸を素手で掴むに等しい難行だ。

「断る。僕は……」

「お前、上司の事をコロ助って呼んでるのな」

「ふっ、行くぞ上条当麻。遅れるな！」

ステイルがルーン札を掲げながら駆け出した。その後握り拳を固めて上条が続く。

「ウイイイイイ！！！！」

最後の生徒を気絶させた司が、勝利の雄叫びを上げている。気持ちが少しでも揺らげば、怯んで足が竦みそうになる大音声。その声に負けない様に上条も大声を張り上げる。

「目を覚ませ、長野オオオ！！」

その声に反応し、まだまだ暴れ足りなかった司は新たな獲物を歓迎した。

無意識に万引きするヤツは意識して高級品を狙う（後書き）

次回、三沢塾を蝕んでいる魔術の正体が明らかになる。

肉と云えば、僕友かい。そんな思考で大丈夫か？（前書き）

「私の心の広さは、53万立方メートルです」

と言う方だけ、お読み下さい。

肉と言えば、僕友かい。そんな思考で大丈夫か？

（イノケンティウスに足止めさせる。無傷じゃ済まないぞ野人！）

火傷ならばルーン魔術で治療が可能だ。どの程度の火傷を負うかは運任せ、死んだ所でステイル的には問題ない。

「くたばれえええ！！」

本音丸出しの掛け声と共に、バラまかれる無数のルーン札。それを司はキャッチして破り捨てる。

分身したかと思間違える高速のサイドステップと、閃光の様なハンスピードを駆使して次々とルーン札を、ただの紙屑に変えていく。

「シュレッダーかキサマは！？」

理不尽極まりない対抗策で、努力の結晶と言えるルーン魔術を使用する前に文字通り『破られ』絶望するステイル。

最早、司の前進を止める気概も手立ても無く、無防備で逆水平チョップを胸板に喰らい派手にブツ飛ばされ、仰向けに倒れ込む。

この間、僅か五秒足らず。後ろで見ていた上条は拳を握り締めたまま固まった。

（まずい！今の長野は危険過ぎる）

次は自分の番かと上条は覚悟を決めたが、司は何々大笑しているだけで攻撃して来なかった。

「ケツケツケツ！！リベンジ達成！上条、祝いのシャンパン三千本
持ってこい！！」

「お前、意識があるのか？……オレが分かるのか？」

「やだな、上ちゃん。ウニとクリの見分けぐらいつくって」

「……長野、勝利のハイタッチだ」

「イエーイ！」

パチンツ！

小気味良い音が響き、上条と司の右手が交錯した

／／／／／／／／／／／／

塾長室へ向かう途中の階段を、個性豊かな格好をした2人の男とウニ頭が昇って行く。

「なあ、コレって冷え。タに出来ねえの？」

自分のオデコに縦に貼られたルーン札に、息を吹き付けてヒラヒラさせる司。

裸足のキョンシーと言った風体である。

「文句を言つな。その護符で、魔術の効力を緩和してるんだから」

ボサついた赤毛に埃まみれの黒コート。

自分の長髪にも2枚、似合わない髪留めの様に、護符を貼り付けて

いるステイルがヨレた煙草をくわえながら司に注意する

三沢塾に施行されている魔術は効き目に個人差があるようで、司の場合は興奮状態になり攻撃性が高まったただけだが、ステイルは錯乱（本性垂れ流し）状態に陥った。故に装着する護符の枚数も違っているのだ。

「なあ長野、随分『刹那』を使つてたみたいだけど体は大丈夫なのか？」

上条は先程から抱いていた心配事を聞いてみる。すると予想外の返答が返ってきた。

「一度も使つてねえよ」

「えっ!？」

「最近、体の調子が常時絶好調なんだ」

驚く上条に司が説明する

村野に蹴り飛ばされて退院した時に、体が頑丈になっていると実感し、日課の早朝鍛錬の時に、運動能力が格段に向上している事を知ったのだと言う

しかし『刹那』が使えなくなった。

正確には使いたくなくなった。

その理由は、使おうとすると嫌な感じがするから、らしい。具体的に言うなら、

世界一大切な妹分に頼まれて、世界一ム力つく女に惚れた時と同じ感覚。

「そんな悲惨な恋愛事情なんて、あるのか？」

「オレの初恋です」

「……ふ、不幸過ぎる」

我が身に置き換えて考えたら、不幸少年上条でさえ身震いがする恐ろしい話であつた。

「ふんっ、それがキサマのトラウマと言う事が、バカのクセに生意気な……ハッ!？」

憎まれ口を叩いたスタイルが何かに気付き、自分の言葉を小声でブツブツと反芻する。

そして、爽やかな笑顔で言い直す。

「馬鹿のクセに虎馬とは生意気な」

「そのカラスの集団にモテそうな黒いの、うるせえよ」

お互いを罵った後、短い沈黙。そしてキョンシーとゴミ袋が、本格的に見苦しい舌戦を開始する。

「狂った猿が偉そうに、人の身なりをどうのと言える身分か？」

「物言いするのに身分は関係ねえ。不沈艦に轢かれたゴミ袋になら、なおさらだ」

「キサマが突き飛ばしたんだろ！」

「ちっ、うるせえな。ハンセイシテマゝス」

「スノボの大会でボロ負けしそうな口調で喋るな!!」

第三者が止めない限り延々と続きそうな口喧嘩だが、上条はそれどころではない。

（長野は元々、猛獣並みの身体能力を持ってたけど、幾らなんでも異常だろ……何か悪い病気じゃないだろうな？）

言い知れぬ不安を覚え、上条は2人の会話も耳に入らない。

（今回の件が片付いたら、病院で精密検査を受ける様に説得しよう。でも長野のヤツが素直に言う事を聞くハズ無いし、どうするかな？）

手の掛かる隣人と居候がいる為、考え方が保父さんになっている上条であった。

友人の説得方法を思案しながら、罵詈雑言を飛ばし合いながら階段を昇り切り、3人は塾長室にたどり着く。中から何故か歌声と音楽が聞こえて来た。

やたらに毒々しく聴いている人間が畏縮するBGMに「死ぬがよいっ!」だの「例え神でも許さ〜ない〜」と言った物騒な歌が絡みついている。

「こっ、これはグレゴリオの聖歌隊のA・M!？」

スタイルが大袈裟に体を仰け反らせ、驚愕する。そこに訝し気な表

情の上条が突っ込む。

「せいか？聖なる歌と書くアレか？イメージ的には魔曲だぞコレ」

「まあ、グレゴリオの聖歌隊のアレンジの物真似だからな」

「それ真似る気あんのか！？完全に別物じゃねえか！！」

「本来、３３３人分の『聖呪』を集めるのだが、聖歌隊の大半がストライキを決行した為、６６人しか人が集まらず、しかも、楽譜と歌詞カードを忘れたのでテキストに歌ったら『呪怨』が集まったと言っ曰わく付きの代物だ」

「だから完璧な紛い物だ、ソレ！それに何で日本語と英語が混ざってんだよ？」

「うるたえるなあああ！！」

「長野？……げっ！？」

雄叫びを上げる司、オデコに貼られたルーン札の刻印が『肉』の文字に変化していた。

「今なら勝てそうな気がする！」

脈絡が無い司の宣言。上条は全くついていけなかったが、ステイルは熱い涙を流して同調する。

「その通りだ。僕達の友情パワーを見せてやろっぜ！！」

「お前達の間、そんなのあったか？」

上条の立ち位置からは、ステイルのルーン札は一枚しか確認出来なかったが『に』の一字が見えたので、もう片方は『く』だと容易に想像出来る。

「火事場のクソ力、舐めんなっ！」

バキーン！！

最初からクライマックスの司が、塾長室の重厚な扉を蹴り破る。上下左右に、だだっ広い室内の様子を見て、上条は何もかも放り出して帰りたくなった。理由は下記の3つ。

一つ、66人の生徒達がグルリと部屋を取り囲み、壁を背にして百万円がかかった合唱コンクールでも、有り得ない大熱唱を繰り広げている。

2つ目に、

「おーっと！？白スーツ全く手が出ません！一方的展開です。三沢塾の頂点ついに落日の時かああ！！！」

学習机に身を乗り出し、マイクを持った黒いお下げ髪に丸い眼鏡の女子生徒が、唾を飛ばして熱い実況を届けてくる。隣りの席が一つ空いてるが何の為なのか？

そして、極みつけの3つ目。

室内の中央に置かれた白いマットのリングの上で、

「ぐわぁっ！」

「降参しなさい……今なら髪形を私の好みに変えれば許してあげますよ？」

「ギブ？ギブ？」

黒幕と思われる白スーツを胴締めチョークスリーパーで捕らえている白い修道女と、レフリー役でタップを促している巫女服少女。

上条には１ミリたりとも理解不能な光景。しかし、スタイルは完全理解して拳を床に叩きつけて悔しがった。

「これは、マッスル・オブ・レジエンド！？（伝説のキン肉）クソッ、９９％そうだと思ったけど１％の可能性に賭けて黙ってたが、ヤッパリそうだったかー！！」

「知っているのか、スタイル！？」

非常にイラッ、と来る司とスタイルのやり取りだったが、絶対に無視される確信があった為、上条は突っ込まなかった。

「ああ、別名が十万三千冊目の悲劇と言われる魔道書だ。

本来、禁書目録は十万二千九百九十九冊の魔道書で構成される筈だったのだが、糞長い髪の金髪碧眼のコロ助が、

『これじゃあ、区切りがイマイチなり』

と、発言して当時、現役最高の魔術師だったハード・ボイルドに新たな魔道書の作成を命じたのだ。『十万二千九百九十九冊も同系列の書物が有るのに無理です！絶対にネタ被りします！！』

彼は執筆を拒んだが、

『早く書けナリ』

の一言の前に撃沈して泣く泣く執筆を開始した。そして、彼は苦悩し酒浸りになり奥さんに逃げられ 精神がギリギリ断崖絶壁に追い込まれ、遂に『人類にはまだ早過ぎる』マ道理論である、ゆ。理論を組み込んだ魔道書を作り上げた。

それが一度発動すれば、宗教戦争だろうが世界大戦だろうが宇宙戦争だろうが王位継承戦だろうが聖杯戦争だろうが、リングの上で決着をつけなければ気が済まなくなる呪いを放つ魔道書。

すなわち、マッスル・オブ・レジェンド（伝説のキン肉）なのだあああああ！！！！！！！！」

「ゲエエエエ！？」

凄まじく長つたらしい上に馬鹿馬鹿しいステイルの説明を聞き終え、悲鳴を上げて司は床に両手両膝をつき、うなだれた。

「……対抗する術は無いのか？」

「ハードⅡボイルドは魔道書を書き上げて何処へと消えた。だからつまり……」

「そうか、それは要するに……」

ここで2人は申し合わせた様に、同時に上条へと視線を向ける。

上条は耳を塞ぎ、目を閉ざして、外界との接触を拒んでいた。

2人はトコトコと上条に歩み寄り、耳を塞いでいる腕を外して一言一句違わずに、こう言った。

「「まあどうしよう（魔道書）」」

「やかましい！いい加減に黙りやがれテメェら！！」

ガスッ！ボスッ！

殺したくなるダジャレを聞かされ、上条が怒りのパンチを2人に見舞った。

肉と言えば、僕友かい。そんな思考で大丈夫か？（後書き）

遂に明らかになったマッスル・オブ・レジェンドの全容。

この恐るべき魔道書の前に『幻想殺し』の突っ込みはとどくのか！？

余談だが、

あの子のパーソナルリアリティと、あの子パンツ履いてないゼリアルには、響きが似ている。

ここで一句、

アニメだと

パンツ履いてる

征服王（字余り）

魔術と科学がマッスルドッキングする時、ゆで理論が成り立つ。

ツッコミ1でボケ70。こいつはとんだハーレムだ！（前書き）

次回予告です。

次はもっと酷くなります

ツッコミ１でボケ７０。こいつはとんだハーレムだ！

「何してんだよ、インデックス！」

白スーツを締め落としてリング中央に佇む居候を、上条は叱りつける様な荒い口調で怒鳴りつけた。だが、振り向き不機嫌そうに眉間にシワを寄せる顔を見て、警戒しながら後ずさる。エメラルドの瞳が輝きを無くして淀んでいた。

（インデックスじゃない！コイツは誰だ？）

「私の名前はヨハネのペンです……間違えるとは失礼な」

「えっ!？」

「呼びにくければノペンでどうぞ……それ以外では返事はしません」

そう言つて目を瞑り沈黙するヨハネのペン。イマイチ状況が飲み込めない上条だが、遠慮がちに名前を呼んでみる。

「……ノペン」

「なんでしょう」

嬉しくも無さそうな返事だが、眉間のシワが無くなっていた。しかし、相変わらず目が死んでいる。

（どうするかな？駄目元で目的を聞いてみるか）

上条が口を開き、言葉を発しようとした時、ステイルが両手で自分の頭を抑え、発狂したかの様に叫んだ。

「ぐっ！？あアあアアアア！！」

「始まり……ましたね」

「何がだよ！？」

上条は狼狽するが、ノペンは、さも当然だと言う様にウンウンと頷いた。

「彼は大まかに、マッスル・オブ・レジェンドを知っていたみたいですが……『ただし書き』までは読んで無かったみたいですね」

「そんなのありかよ、魔道書だろ！？」

「説明文を無視する者に報いを。どうやら、完全に侵食されましたね……弱小魔術師にはご退場、願いましょうか」

そう言つて、のたうち回るステイルを、鼻で笑うノペン。

その態度に怒りを覚えながら、上条はステイルに向かって駆け出した。

（魔術絡みなら、オレの右手で打ち消せる！）

上条が右手を伸ばして救おうとするが、それを拒絶してステイルは高く、高く、跳躍した。

そして、黒コートを巨大なカラスの翼の様に羽ばたかせ、マイクを持った女子生徒の隣の空き席にダイナミック着席する。

『こんにちは、アデラン・ステイルです』

そして、当たり前のように女子生徒のマイクをブン取り、自己紹介。マイクを取られた女子生徒は怒り出すかと思ったら、

『お待ちしました、アデラン・ステイルさん。実況の加藤です。今日は解説を宜しくお願いします』

これまた、当たり前のように予備マイクを取り出して、ステイルと挨拶を交わしていた。

「マッスル・オブ・レジェンド。全ての戦を、リングの上で白黒つける魔道書です……ただし、リングに上がる資格が無い者には、違う役割が与えられます」

「舐めてんのか筆者!!」

上条がノペンの説明を聞いて憤慨する。一方で『に』『く』と『肉』の札を付けた愚者が2人、一本のマイクを取り合い争っていた。

「代われ、ゴミ袋! アデ。ンス・長野さんの方が響きが良いだろうが!」

「離れる猿! お前の出来損ないの脳みそで何を語るんだ!」

『おおっと、場外乱闘勃発。解説役を巡って固い友情が砕け散ってしまったあ!』

「お前らの友情は発泡スチロール並みに脆いな」

この場にいる人間は呆れ顔の上条と他一名、以外の全員が良い感じにラリっていた。

そして、その様子を見て勝ち誇りながら元凶が語り出す。

「秩序は崩壊し混沌が満ちました……オールバック、決着をつけましょう」

「決着も何も、そいつ死にかけてますけど!？」

仰向けに倒れている白スーツを指差し上条が訴えたが、ノペンは華麗にスルーして呪文の詠唱を始める。四本のコーナーポストが青白い光を帯び始めた。そしてその光が意志を得た雷のごとく、瞬時にリング上を乱れ飛び、複雑怪奇な図形を描いて幻の様に消失した。

『こつ、これはまさか、マッスル・オブ・レジェンドに記されし48の必殺技の一つ、バベルの断頭台!？』

「魔道書に必殺技なんか書いてんじゃねえよ!!」

光が描いた図形を見て、ステイルがマイクを握り締めて声を強ばらせる。そこに言っても仕方ないと思いつつ、上条が突っ込んだ。その時である。

ノペンの足下のマットが生き物の様に蠢いた。そして、幾重にも積み重なった分厚い本が厚手のマットカバーを突き破り、ノペンを天へと押し上げていく。

それに付随するかのごとく意識の無い白スーツの腰と背中を、ノペンと同様に積み重なった分厚い本が押し上げる。

『見る加藤君、両足で人類の英知の結晶と言つべき、数多の教書を踏みつけながら天を目指す彼女の姿を！あれこそ崇拜すべき神の御身に他ならない！！』

「何が英知だ図々しい！全部、昔のジャ。プじゃねえか！！」

『そうか、白スーツは愚かにも神に挑もうとしている人間を表しているんですね！一度、バベルの塔を見ていなかったら気付かなかった！！』

「無視すんな、納得すんな！大体、どこで見たんだテメエは！！……
……うううっ！？」

ここで誰も予想できなかった悲劇が起きた。

上条が突っ込み過ぎて、過呼吸になってしまったのだ。

だが、それよりも更に恐ろしい悲劇が、待ち受けていた。

それは、この状況下で、突っ込み不在と言う最悪の異常事態であった。

だが、そんな事は知らんとばかりに……、

『ああつと、ノペン選手。山と積まれたジャ。プを蹴り散らかしジャンプ！全体重を乗せて右足首を白スーツの首に落としたあああ！
！』

『人の思い上がりに神が断罪の刃を振り落とす。これがバベルの断頭台だ！！』

バサバサと音を立てて、次々と書物が落下してマットに吸い込まれる様に消えていき、

実況と解説の2人は競い合うように、白熱した声を張り上げている。

そして司は、

「何してんだ、白スーツ！肘でいいから目に入れろ！！」

ちやっかりとセコンドのポジションを手に入れて、ヤジにしか思えない指示を飛ばしていた。

ツッコミでボケろ。こいつはとんだハーレムだ！（後書き）

度重なるストレスで倒れた上条さん。

お前が立たなきゃ、この話終わんねーぞ。

混ぜるな危険、分かっちゃいるが止められぬ。(前書き)

酷さ無限大！

ラーメン屋で無駄と分かっているが、

「ブロッケンマン、麺固で」

と注文してしまう方は是非、お読み下さい。

混ぜるな危険、分かっちゃいるが止められぬ。

『空中で芸術的シルエットを描いて、ノペン選手のバベルの断頭台が炸裂！リング上にて処刑完了オオオ！！』

お下げ髪を振り乱して加藤が実況する。それを聞き終わらない内に、司がリングインして後頭部をマットに打ち付けられた、白スーツへと駆け寄った。

「どんなパンツだった？それとも履いてなかったか？答えてくれ白スーツ！！」

『何と！？セコンドは怪我の心配をしないで、下着にしか興味無し。ステイルさん、これは人として許されるのでしょうか？』

『加藤君。戦士の死は嘆き悲しめば良いというものじゃないんだ。笑って逝かせてやる為の気遣いも必要なのだ』

そう、闘う者にとって死は常に傍らにあり、覚悟しておかねばならぬもの。真の闘者は死ぬ事よりも敗北した事を悔しがり、リベンジが出来なくなる事を無念に思うだろう。

その、敗北感を一瞬でも忘れさせる為の「どんなパンツだった？」発言にステイルは目頭を熱くさせるのであった。

白スーツにも司の気持ちが通じたのか、その口元を笑みの形に小さく歪ませた。

「当然。目を閉じていたさ、こう見えて紳士でね」

そう言い残し、白スーツは再び目を閉じた。

「ジェントルメEEEEエン〜〜!!」

悲しみの雄叫びを上げて、司は力無く横たわる白スーツにしがみついた。その時、奇跡の福音が耳に響く。

「心臓が動いてる!？」

「こつ、これは一体、何故私は死んでいないのだ？」

生きている事に喜びよりも、戸惑いを覚える白スーツ。それほどに致命的な一撃だった。

『どうなってんでしよう、生きています白スーツ！ステイルさん、ヤツは超人なんでしょう？』

加藤も混乱しているが、無理もない。
バベルの断頭台とはジャ。プ雑誌、約三百冊分の高さで対戦者の首を足首で固定して動けなくしてから、片膝を立てた姿勢で全体重を掛けて落下し、後頭部からマットに叩きつける死ななきやオカシイ必殺技である。

しかし、若き天才魔術師は動じる事なく、持ち前の解析能力で真実を導き出していた。

『簡単な事だ。マットに打ち付けられた衝撃は全て、頭髮による空気抵抗で無効化されたんだ』

『なっ!?! 確かに抵抗力が強そうな髪型してますけど、そんなんで

良いんですか？ニュートンがキレても知りませんよ？』

『今の三沢塾の状況と言霊を説明すれば、ニュートンも納得するさ。いいかい、今、三沢塾はグレゴリオ聖歌隊のA・Mの影響で、多数の人間の思考や言葉といった抽象的なものを神格化した、観念神の社と化しているんだ。そして言霊とは言魂とも書けるように、その言語を形成する文字と言い方が非常に重要になる。代表的な例を挙げれば、陰陽道で使役される式神を呼び出す時、式紙として紙を使用する事で神が憑依し易くなるんだ』

『つまり、白スーツが生きているのは言葉による影響力が高まっていて、呼ばれ方に言霊の効果があつた為、と言う訳ですか！それは一体！？』

『思い出してくれ。技を掛ける時、イン…ノペン選手が白スーツを何と呼んだか』

『え〜と…確かオールバックと…ああっ！エアバッグと被ってるうう！？』

真実に辿り着いた加藤を、出来が良い生徒を見る教師の様に、満足げに見つめるスタイル。

『その通り。そして言霊の力でエアバッグになった白スーツのオールバックの空気抵抗力は、言霊学の方程式から算出すると通常の29倍になる』

『そんなに！？なる程、それなら逆に死ぬ方がオカシイですね』

世に名高き近代物理学の祖も認めざるを得ない、パーフェクトなス

テイルの解説を聞いて、塾長室に居たほぼ全員が、白スーツが生きていた事に納得した。

「不自然。キサマを人形と侮辱した私を何故に生かした？」

「再放送中のカナミンの続きが気になっていたので……私は悪役派ですけど」

コーナーストに背中を預けて、淡々と語るノペン。それを聞いた、ほぼ全員はステイルの解説無しでも、言葉に秘められた真意を理解した。

白スーツは塾長（偽）である。社会的地位が有る人物を殺害した場合、自分自身の権力と財力が膨大、もしくは司法と行政機関に巨大なコネが無い限り、隠蔽するのは非常に困難であり、高確率でムシヨにブチ込まれる。

そして、ここが重要なのだが、刑務所内にアニメの需要と供給は……無い。

「釈然。キサマの言葉の裏側に隠された『闘っている間に愛情が芽生えたけど、敵同士だし、恥ずかしくて好きって言えない』と言う乙女心を理解してしまった以上、私には敗北を受け入れる以外の道は無いな、ツンデレか……悪くない」

ガクーン！

顔を赤らめながら凄まじい妄想を独白して、白スーツは気絶した。

「みんな、リングの外を見る！」

長きに渡る（主に解説が）死闘に決着がついた時、ようやく過呼吸

で苦しんでいる上条さんに、聖歌隊員の男子生徒Aが気付いた。その声に司が、いち早く反応して駆け寄ろうとするが、ノペンが右手で制止する。

「落ち着きなさい、ウニは中度の過呼吸に陥っています……私が助けましょう」

「テメエ、治療に見せかけて上条を殺る気だろ！」

「私はウニが滅亡しようが、増殖しようが、一向に構いません……でもインデックスは悲しみますから」

笑いをこらえつつ、司の額の『肉』札を見ながらノペンは思考する。

インデックスは別人格であるノペンの事をよく知らないが、ノペンは防御魔術の機能としてインデックスの体調や心情を把握している。以前は何の感情も持たず『管理』していただけだったが、一個人としての自我を持つてからは、純心な彼女の思考や言動を心地良く思っている。

一方的な友愛感情だが、インデックスが悲しむ事は今のノペンには耐え難い。

「防御魔術にも友情は……あるのです」

「……チツ、そいつを言われちゃ、信じるしかねえな」

司は静かに道を譲る、そしてノペンは話している間に、重度の過呼吸になってしまった上条を救う為、解説席へと歩き出した。

混ぜるな危険、分かつちやいるが止められぬ。(後書き)

次回の注目ポイントは2点。

上条を助ける為のノペンの秘策。

シッコミの重要性。

……上条さんの復活を心待ちにしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5675r/>

とある刹那の奮闘記

2011年12月1日19時55分発行